秋 田 市

湊　城　跡

－秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成18年度調査区）－

2008. 3　秋田市教育委員会

序

秋田市はＪＲ土崎駅の利便性を図るため、平成14年度から秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）を計画しました。当該地は周知の遺跡である「湊城跡」が所在することから、当教育委員会において、遺跡記録保存のための事前発掘調査を同16年度から実施しているものです。

平成18年度の調査区は、前年調査区の東側、土崎神明社斎館及び隣接する街区公園の北側に位置しています。

調査の結果、安土桃山時代から江戸時代までの遺構・遺物のほか、昭和30年代まで存在した堀跡などが確認され、地域の歴史を考える上での貴重な成果を得ることができました。

本報告書は、平成18年度調査区の調査結果をまとめたもので、文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用していただければ、幸いに存じます。

刊行にあたり、調査にご協力いただきました関係各位の皆様に感謝申し上げますとともに、今後とも、埋蔵文化財の保護につきまして、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

平成20年３月

秋田市教育委員会
教育長　髙　橋　健　一

例　　言

1　本報告書は、秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う湊城跡（秋田市土崎中央三丁目地内）の緊急発掘調査報告書である。

2　本事業は、事業主体者が秋田市建設部道路建設課、業務受託者が株式会社本郷建設工務所、調査担当者が秋田市教育委員会文化振興室となり実施した。本発掘調査経費については、事業主体者である秋田市建設部道路建設課が負担した。なお、平成17年度に実施した遺跡範囲確認調査は、秋田市教育委員会が調査主体となり、平成17年度国庫補助金並びに県費補助金の交付を受けて行った。

3　本報告書の執筆は西谷隆、伊藤才城、編集及び写真撮影は伊藤才城が行い、小松正夫・安田忠市・伊藤武士（秋田城跡調査事務所）・神田和彦（環境企画課）・小野隆志の助言を得た。

4　出土遺物の陶磁器類について、有田町教育委員会の村上伸之氏に鑑定をお願いした。

5　本報告書刊行以前に、現地説明会資料や報道等に調査成果の一部を公表しているが、本報告書の記載内容を正式なものとする。

6　発掘調査・整理作業の過程で、下記の各氏より指導・助言を賜った。（敬称略・順不同）
文化庁、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県立博物館、秋田城跡調査事務所、飯村均、泉明、伊藤直子、小野正敏、川口良、木戸雅寿、庄内昭男、高橋学、水澤幸一、八重樫忠郎、山口博之

凡　　例

1　図中には下記の略記号を用いた。
　ＳＤ－溝跡、ＳＧ－堀跡、ＳＫ－土坑、ＳＸ－箱状遺構、Ｐ－ピット

2　図中の方位は、すべて真北を示す。また方位が記されていないものについては、上が真北を示す。

3　本文の地図は、秋田市管内図１／50,000、同１／25,000、都市計画図１／2,500を使用した。

4　本文中の遺物については、土器・陶磁器、木製品、土製品、石製品、瓦、金属製品、銭貨、骨製品の基礎分類ごとに記述した。

5　実測図の中で、青磁は「青磁」の文字と　　、銅緑釉は「銅緑釉」の文字と　　、鉄釉は「鉄釉」の文字と　　の網掛けで図示し、白磁は「白磁」の文字のみで示した。また、木製品に塗布されている赤漆は　　、黒漆は　　の網掛けで図示した。

6　本文中の陶磁器の生産地については、国内産は肥前系、瀬戸美濃系、京信楽系など主要な大規模生産地（地方）の製品を主とし、それに直接技術的影響を受けた周辺及び地方の窯の製品は「系」として示した。また、より具体的に窯を限定できるものについては、「寺内窯」のように秋田県の在地窯名で記述した。
　なお、肥前系陶磁器の産地同定及び年代については有田町教育委員会の村上伸之氏に鑑定を依頼してご教示を得たが、本文の内容については、担当者に責がある。

目　次

序
例　言
凡　例

第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査の経過 …… 1
　第２節　発掘作業の経過 …… 1
　第３節　整理作業の経過 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
　（１）周辺の遺跡 …… 3
　（２）安東氏と湊城跡の概要 …… 9

第３章　調査の方法と成果 …… 13
　第１節　調査の方法 …… 13
　第２節　層序 …… 13
　第３節　遺構と遺物 …… 21
　Ａ地区
　（１）　第Ⅲ層検出の遺構・遺物 …… 21
　（２）　第Ⅳ層検出の遺構・遺物 …… 22
　（３）　第Ⅴ層検出の遺構・遺物 …… 33
　Ｂ地区
　（４）　第Ⅲ層検出の遺構・遺物 …… 40
　（５）　第Ⅳ層検出の遺構・遺物 …… 43
　（６）　第Ⅴ層検出の遺構・遺物 …… 45
　（７）　堀　跡 …… 50
　（８）　動物遺存体 …… 53
　（９）　出土遺物属性表および実測図 …… 53
　(10)　ボーリング調査について …… 83

第４章　まとめ …… 85
　第１節　検出遺構とその年代について …… 85
　第２節　出土遺物について …… 87
　第３節　湊城について …… 89
　第４節　おわりに …… 90

写真図版
報告書抄録

第１章　調査の概要

第１節　調査の経過

秋田市建設部道路建設課は、JR奥羽本線土崎駅前の利便性を図るために秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）を秋田市土崎港中央三丁目・五丁目地内に計画した。しかし、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「湊城跡」が所在することから、秋田市教育委員会との間で開発に伴う事前協議を行った。その結果、平成17年11月24日付けで秋田市教育委員会に埋蔵文化財事前調査の依頼があった。これを受けて秋田市教育委員会は、分布調査による現況確認と試掘による範囲確認調査を平成17年12月14日～16日に実施した。調査の結果、安土桃山時代から江戸時代の遺構・遺物が確認されたことから、平成18年６月８日付けで道路建設課から土木工事等のための発掘調査に関する通知書（文化財保護法第94条）が提出された。これに対して、平成18年６月21日付け教生－606で秋田県教育委員会より、範囲確認調査の結果に基づいて工事は「恒久的な建築物、道路その他の工作物を設置する場合」に該当するため、事業予定地に対して発掘調査条件の通知があった。

上記のことから、事業主体者が秋田市建設部（担当課：道路建設課）、調査担当者が秋田市教育委員会（担当課：文化振興室）となり、平成18年度に発掘調査、平成19年度に整理作業を行うこととした。また、費用負担については事業主体者が負担し、発掘作業・整理作業の調査に関わる部分以外は、業務委託することにした。そして、平成18年７月18日付けで事業主体者の秋田市と調査担当者の秋田市教育委員会、業務受託者の株式会社 本郷建設工務所の３者で発掘調査に関する協定書を結び、整理作業に関しては平成19年６月22日付けで３者で、協定書を締結して事業を実施した。

第２節　発掘作業の経過

発掘作業（平成18年度）

平成18年７月27日よりＡ区の調査を開始した。８月８日、近代造成土である第Ⅰ～Ⅱ層を除去し、第Ⅲ層上部で江戸時代の遺構・遺物を確認した。８月17日より第Ⅳ層面の遺構精査、９月６日より第Ⅴ層面の遺構精査を開始した。10月４日より調査地Ｂ区の調査を開始し、10月６日より第Ⅲ層面の遺構精査を開始した。また、10月13日に調査地にウエルポンプを設置して湧水を排除した。10月23日より第Ⅳ層面の遺構精査、10月27日より第Ⅴ層面の遺構精査を開始した。11月18日に市民を対象とした現地説明会を行い、81名の参加者があった。11月28日に遺構精査・記録化が終了し、11月29日に機材の撤収作業を行い、全工程を終了した。

発掘作業体制（平成18年度）

調 査 期 間　　平成18年７月24日～11月30日
調 査 面 積　　330㎡（調査対象面積972.18㎡）
事業主体者　　秋田市建設部（担当課：道路建設課）
調査担当者　　秋田市教育委員会
調 査 体 制　　秋田市教育委員会文化振興室
　　文化振興室　室　　長　小　松　正　夫
　　参　　事　松　尾　由美子

文化財担当

主席主査　西　谷　　隆（調査担当・主務者）
主　　事　進　藤　　靖（調査担当）
主　　事　鎌　田　英　智（調査担当・主務者）
主　　事　神　田　和　彦（調査担当）
主　　事　小　野　隆　志（調査担当）
主　　事　伊　藤　才　城（調査担当・主務者）

秋田城跡調査事務所

主席主査　安　田　忠　市（調査担当）

業務受託者　株式会社　本郷建設工務所

調査作業員　伊藤弘義、伊藤満、千葉隆樹、佐藤忠喜、小松田税、加賀屋喜久雄、松田忠、佐藤兼雄、山本峰吉、石川巌、布川明、鈴木銀一、鈴木長司、三浦吉司、長尾景元、渡辺範、和田庸悦、水戸瀬厚志

第３節　整理作業の経過

整理作業（平成19年度）

平成19年９月３日より出土遺物（30箱、木製遺物）の洗浄を開始した。９月10日から２月29日まで室内整理作業を実施した。接合（９月中旬）、注記（９月中旬～10月）、遺物復元（９月～10月）、実測（10月～11月）、トレース（12月）、写真撮影（１月～２月）、版下作成（１月～２月）、編集作業（２月）を実施し、印刷所へ原稿を入稿した。12月11日には、有田町教育委員会の村上伸之氏に陶磁器類の鑑定をしていただいた。３月25日までに校正・製本を実施し、全工程を終了した。

整理作業体制（平成19年度）

作 業 期 間　平成19年９月３日～平成20年３月25日
事業主体者　秋田市建設部（担当：道路建設課）
調査担当者　秋田市教育委員会
調 査 体 制　秋田市教育委員会文化振興室

文化振興室
室　　長　小　松　正　夫
参　　事　赤　川　　衛
室長補佐　加　藤　隆　子
副 参 事　中　田　好　彦

文化財担当

主席主査　西　谷　　隆（整理担当）
主席主査　安　田　忠　市
主　　事　進　藤　　靖
主　　事　鎌　田　英　智
主　　事　小　野　隆　志
主　　事　伊　藤　才　城（整理担当）
臨時職員　佐々木　啓　吾

業務受託者　株式会社　本郷建設工務所

整理作業員　千葉隆樹、松田忠、三浦千枝子、岩谷みゆき、宮田美奈子、今野祥子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

湊城跡は、秋田平野を流れる旧雄物川河口部（秋田運河）の右岸、標高４～７ｍの地点に位置している（第１図）。秋田市街地北部の土崎港中央三・五・六丁目地内で、北緯39°45′26″、東経140°4′16″（世界測地系：Ｘ＝-26,661、Ｙ=-65,304）の土崎神明社を中心とし、東西600ｍ、南北500ｍの範囲で、現在市街地となっている（第２図、図版１）。平成18年度調査区は、遺跡の中心から北へ約10ｍ（Ａ区）、北東方向へ約40ｍ（Ｂ区）の地点である。

遺跡は、地形分類では砂丘地にあたる（経済企画庁総合開発局国土調査課編1966、第３図）。秋田市においては、このような砂丘地は海岸線と平行して幅２～４㎞にわたって分布し、この延長は八郎潟南部まで続いており、ほとんどは被覆砂丘である。遺跡が所在する砂丘地は土崎砂丘地と呼ばれ、南を旧雄物川、北を新城川に限られた土崎を中心とし、一部に標高20ｍ前後の高位の砂丘はあるが、大部分は10ｍ前後の低位の砂丘地からなっている。土崎砂丘地で特徴的なことは、土崎市街地と新日本石油精製の間に幅500～600ｍの旧河道がみられ、その一部は現在、「光沼」の地名として残っている。これは雄物川の旧河道と考えられ、北側は秋田市飯島穀丁の集落まで広がり、湾状の形状を呈している。土崎砂丘地の旧地形が湾状の形状を呈していることは、遺跡の立地として注意すべき点である。

第２節　歴史的環境

（１）周辺の遺跡

秋田市教育委員会が昭和61年から63年に作成した『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』（秋田市教育委員会1989）および『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書－改訂版－』（秋田市教育委員会2002）に基づいて、湊城跡周辺の遺跡について概観したい。

主要な中世の遺跡としては、湊城跡から約2.3㎞北の新城川左岸に穀丁遺跡（15世紀代）、旧雄物川下流域右岸では約1.7㎞南に後城遺跡、約2.2㎞南に秋田城跡、約5.3㎞南に下タ野遺跡が所在し、旧雄物川下流域右岸に集中している（第１図）。

下タ野遺跡は、掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・土坑などが検出され、須恵器系陶器、中国産青磁（龍泉窯系）・白磁などが出土し、おおむね12世紀後葉～14世紀中葉頃の遺跡である（小松他1979、神田2003・2005）。秋田城跡は古代城柵官衙遺跡であるが、鵜ノ木地区・大小路地区・勅使館地区は掘立柱建物跡・井戸跡・竪穴状遺構・鍛冶炉跡・土壙墓やかわらけ、中国産青磁（龍泉窯系・同安窯系）・白磁、須恵器系陶器などの出土遺物から、年代は12世紀末～13世紀中葉頃に位置づけられる（小松他1983・1993・1997・1998、小松1997、伊藤2003b）。後城遺跡は、掘立柱建物跡・井戸跡・竪穴状遺構・土壙墓・貯水施設と考えられる大型円形竪穴状遺構などが検出されている（小松他1978、伊藤2003ａ・2005）。出土遺物は、中国産陶磁器（青磁・白磁・染付）、国内産陶器（瀬戸美濃系・珠洲系・越前産・肥前系）などが出土している。年代は13世紀～16世紀末にわたるが、主体は14世紀後半～16世紀末である。穀丁遺跡は、本格的な発掘調査は行われていないが、上水道工事中に遺物が発見されている（庄内1982）。中国産青磁（碗２点）、瀬戸美濃系陶器（花瓶１点）、須恵器系陶器（擂鉢１点）、茶臼１点、鉄鍋１点、砥石１点が出土した。中国産青磁は15世紀代、国内産陶器は15世紀中葉～後葉に位置づ

けている。(神田2006)。

主要な近世の遺跡としては、湊城から約６㎞南西に久保田城跡が所在する。久保田城は秋田藩主佐竹氏12代約270年間の居城で、現在の千秋公園一帯である。慶長７年（1602）に常陸国水戸城（茨城県水戸市）から秋田に転封された佐竹義宣（1570～1633）は、当初、旧領主安東実季（1576～1659）の居城であった湊城に入城した。しかし、湊城は狭小の平城であることから新城を築くこととなった。新城は慶長８年（1603）に着工し、同９年（1604）に湊城を破却し、久保田城へ移ったという経緯がある。

その他、湊城跡周辺には、寺小山遺跡（２：縄文)、県立聾学校遺跡（３：縄文)、高野遺跡（６：奈良・平安)、菅江真澄墓（７：近世)、児桜貝塚（８：縄文)、寺内焼窯跡（９：近世)、神屋敷遺跡（10）等、雄物川右岸の砂丘丘陵および微高地上に周知の遺跡が所在する（第４図)。

【引用文献】

秋田市教育委員会　1989『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』

秋田市教育委員会　2002『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書－改訂版－』

伊藤武士　2003a「秋田市後城遺跡－中世の湊町－」『中世出羽の諸様相－寺院・生産・城館・集落－』東北中世考古学会第９回大会（秋田大会）資料集 pp.99-108

伊藤武士　2003b「秋田市秋田城跡－中世秋田城周辺－」『中世出羽の諸様相－寺院・生産・城館・集落－』東北中世考古学会第９回大会（秋田大会）資料集 pp.224-236

伊藤武士　2005「秋田湊と湊安東氏の城館」『海と城の中世』東北中世考古学叢書４ 高志書院　pp.109-128

神田和彦　2003「秋田市下タ野遺跡－雄物川下流域における中世前期の集落－」『中世出羽の諸様相－寺院・生産・城館・集落－』東北中世考古学会第９回大会（秋田大会）資料集 pp.212-223

神田和彦　2005「雄物川下流域　中世前期の集落－下タ野遺跡－」『海と城の中世』東北中世考古学叢書４ 高志書院　pp.195-204

神田和彦　2006「秋田県中世考古学会の現状と課題－秋田平野における中世遺跡の展開を中心として－」『遺跡研究の方法－東北中世考古学の12年－』東北中世考古学会第12回研究大会資料集　pp.62-70

経済企画庁総合開発局国土調査課編 1966『土地分類基本調査 秋田　地形・表層地質・土壌』

小松正夫　1997「中世秋田城の行方－高清水岡の考古学的見地から－」『倉田芳郎先生古希記念 生産の考古学』同成社　pp.195-204

小松正夫他　1978『後城遺跡発掘調査報告書』秋田市教育委員会

小松正夫他　1979『下タ野遺跡発掘調査報告書』秋田市教育委員会

小松正夫他　1983『昭和57年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会

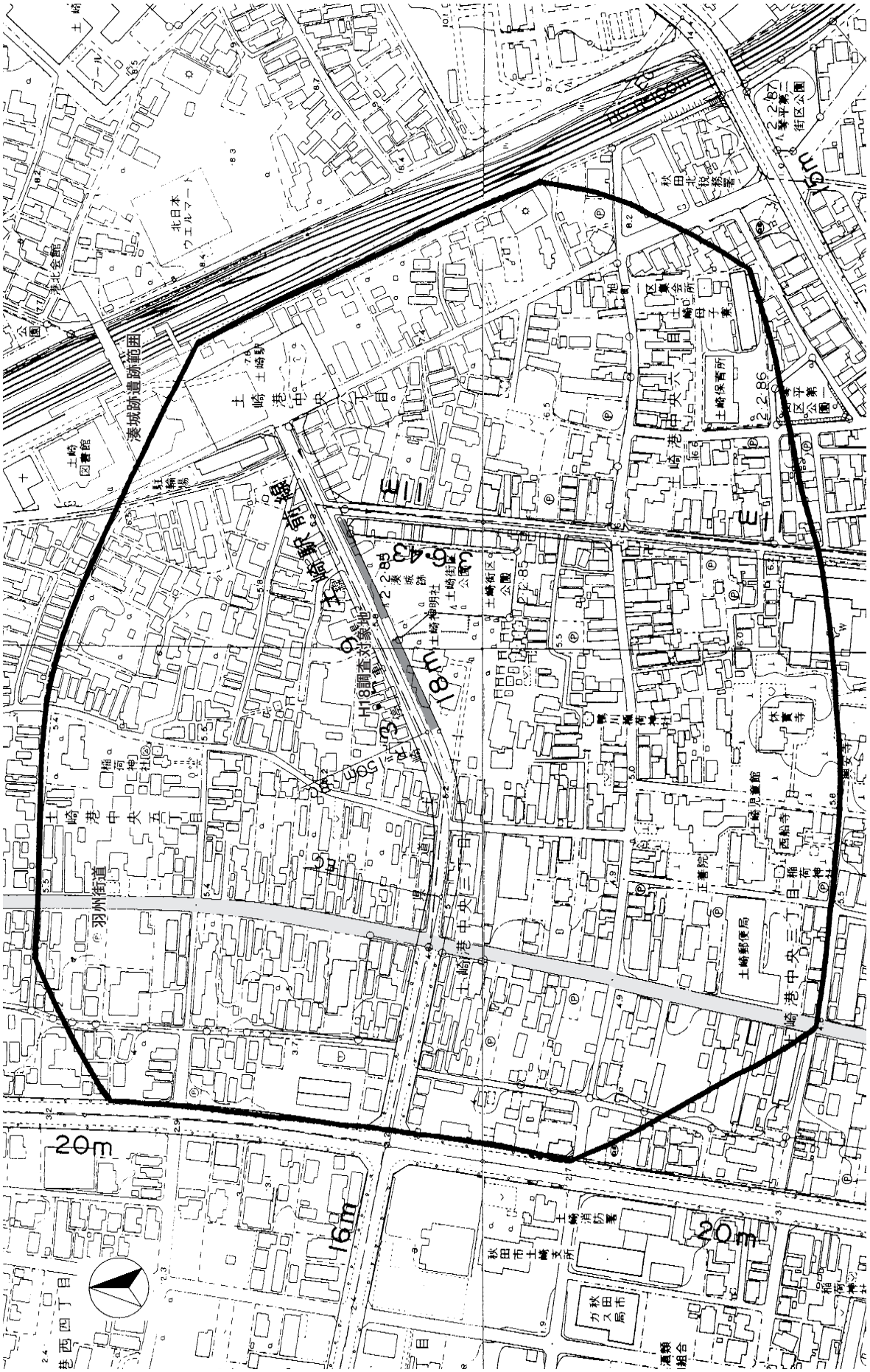
小松正夫他　1993『平成４年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会

小松正夫他　1997『平成８年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会

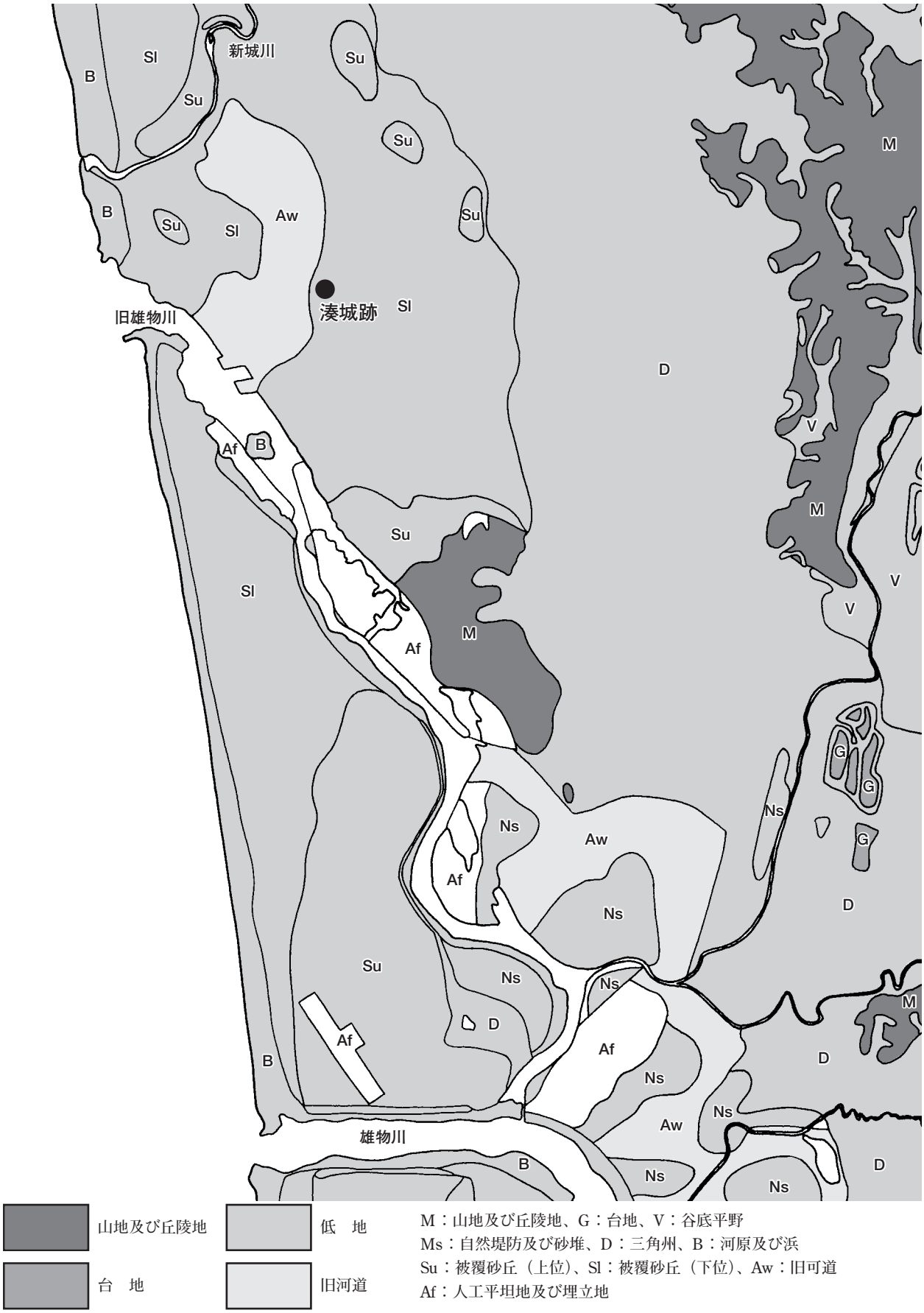
小松正夫他　1998『平成９年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会

庄内昭男　1982「秋田市飯島穀丁出土の中世遺物について」『秋田県立博物館研究報告』７　pp.95-102

第1図　遺跡位置図（S=1/50,000）



第２図　湊城跡周辺図（S=1/3,000）



第3図　地形分類図（S=1/50,000）

第4図　周辺の遺跡（S=1/25,000）

表１　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	所在地	時代	遺構・遺物
1	湊城跡	城郭	秋田市土崎港中央三丁目他	中世・近世	柱列跡、建物跡、溝跡、井戸跡、土坑、焼土遺構、集石遺構、敷石状遺構、ピット：土器・陶器・磁器・土製品・木製品・石製品・金属製品・瓦・銭貨・動物遺存体
2	寺小山遺跡	遺物包含地	秋田市土崎港中央七丁目	縄文	石錘
3	県立聾学校遺跡	遺物包含地	秋田市土崎港北二丁目17番	縄文	縄文土器・石器
4	後城遺跡	集落跡	秋田市寺内後城	奈良・平安・中世	土壙墓・土壙・井戸跡・住居跡：土師器・須恵器・古瀬戸・越前焼・珠洲系中世陶器・青磁・白磁・古銭・鉄製品・木製品・宝篋印塔
5	秋田城跡	城柵・城館（国指定）	秋田市寺内大畑他	縄文・奈良・平安・中世	掘立柱建物跡・竪穴住居跡・築地・柱列・井戸跡・鍛冶炉跡等：縄文土器・石器・石製品・土師器・須恵器・赤褐色土器・漆紙・木製品・鉄製品・木簡等
6	高野遺跡	遺物包含地	秋田市寺内高野	奈良・平安	須恵器
7	菅江真澄墓	墓地（市指定）	秋田市寺内大小路	近世	
8	児桜貝塚	貝塚	秋田市寺内児桜	縄文	貝塚 縄文土器・石錘・刻線礫
9	寺内焼窯跡	窯跡	秋田市寺内堂ノ沢	近世	陶器窯跡・瓦窯跡・煉瓦窯・陶器物原・磁器物原：近世陶磁器・瓦・煉瓦・木製品
10	神屋敷遺跡	近世盛土遺構	秋田市寺内神屋敷		直径７ｍ、高さ1.5m程度の土盛り３基
11	根笹山遺跡	古墳擬定地	秋田市寺内神屋敷		径６ｍ程高さ２ｍの円墳状の高まり

（２）安東氏と湊城跡の概要

安東氏と湊城跡については、文献史料や絵図などにみられる記載を整理し、概要と変遷について述べる。

『秋田家文書』所収の「秋田家系図」[註1]によれば、安東氏は前九年の役（1051～1062）で討伐された安倍貞任の子・高星が青森県津軽地方の藤崎に逃れ、その後、子孫の貞秀が安東太郎と称し、当家の家名としたことに始まるとされる。そして、愛秀の頃（鎌倉時代末頃か）に安東氏は、十三湊（現・五所川原市十三）を本拠とした。その後、盛季（？～1414）は下国家を興し、盛季の弟・鹿季（？～1423）は、盛季の命により、兵200余騎を率いて、秋田の湊を伐ち、湊家の元祖となったとされる。また、「南部世譜附録」によれば、応永17年（1410）に、安東鹿季は山北刈和野（現・大仙市刈和野）で南部守行と戦った記録がある。この他、秋田市山内字松原に所在する補陀寺には、「安東下国太郎守季位牌」があり、補陀寺の開基である安東盛季が応永21年（1414）に96才で死亡したと記載されている。安東氏が伐ったとされる、いわゆる「秋田湊」の場所は定かではないが、以上のような記述から、鹿季の頃の応永年間（1394～1428）には秋田平野に湊安東氏の影響が及んでいたと考えられる。

湊安東氏の居城とされる湊城の築造については、明治期に書かれた『秋田沿革史大成』には、「土崎湊城ハ百三代後花園帝永享八酉辰年、安倍康季将軍野西北ノ方へ築ク」[註2]との記述があるが、この記述自体に根拠はなく、所在・年代ともに不明と言わざるを得ない。

その後、安東家は、政季（？～1488）が出羽国河北郡（檜山郡）を得、次代の忠季（？～1511）が檜山城（現・能代市）を居城として築き、檜山安東氏となった。つまり、秋田県内には能代の檜山安東氏と秋田の湊安東氏の両家が併存することとなる。元亀元年（1570）頃、愛季（？～1587）が弟・茂季を湊家に送り、両家の統合を図った。しかし、こうした強引な両家統合に湊安東氏側は反発し、天正17年（1589）に『秋田家文書』の「湊檜山両家合戦覚書」に記されるように、両家の合戦、所謂「湊合戦」が起こる。湊合戦の結果、檜山安東氏の実季（1576～1659）が勝利を収め、その後実季は檜山城から湊城へ居城を移していったようである。『秋田家文書』「御作事入用之目録」などに記されるように、慶長４～６年（1599～1601）には、湊城が改修されていることが分かる。改修の内容は、御広間・御奏者之間・角屋倉・御門屋倉・御台所・御鷹部屋・御料理之間・御長屋の作事を行っている。また、改修にかかった費用・人数・材料・日数なども記されており、その内容は大がかりなものである。こうした改修は大規模であり、城の新築に近いとの見解もある（塩谷他1996）。

このような大改修が行われた湊城の所在については、江戸時代中期に書かれた『出羽国風土略記』に、「土崎の湊という當地に城跡あり平城にして水堀二重土手所々にあり大手は辛酉にあり搦手は北に有」と記されており、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地としての「湊城跡」はこれを参考に設定されている。

江戸時代に入り、慶長７年（1602）に佐竹義宣が常陸より秋田へ転封となり、湊城へ入城する。安東実季は常陸国宍戸へ国替えとなる。慶長９年（1604）には、新築した久保田城へ移り、湊城は破却される。その後、湊城跡周辺は土崎湊として発展し、元和２年（1616）には久保田城と土崎湊をつなぐ新道（羽州街道）が整備される。それまでは、久保田城に行くには、土崎湊→八柳→天徳寺門前通り→泉→手形→久保田城というルートであったが、羽州街道が整備されたことにより、土崎湊→寺内→八橋→久保田城というルートになったとされている（加藤編1941）。また、元和６年（1620）には、神明社が湊城の跡地（現在地）に移り、土崎の総鎮守となる（秋田市教育委員会編1993）[註3]。その後、土崎湊は日本海運・雄物川船運による物流の要所となり湊町として栄えていく。川口家に伝わる『元文年中湊古絵図』

（1730～1740）（第５図）、また弘化３年（1846）の『湊町古絵図』（第６図）には江戸期の土崎湊の町割り図などが描かれている。これによれば、平成18年度調査区は神明社北側から東側堀の一画にあたる。

以上のような、安東氏と湊城跡の概要について年表にまとめると表２のようになる。

表２　湊城跡関係年表

年　号	西　暦	内　　容
応永年間	1394～1428	津軽十三湊の安東鹿季が秋田の湊を伐つ。 「鹿季　安東二郎　盛季 鹿季に兵二百余の騎を附け、秋田之湊を伐令む、是れ湊家之元祖也、応永三十年六月十六日卒、・・・」 『秋田家文書』「秋田家系図」
永享８年	1436	湊城が築城される？ 「土崎湊城は百三代花園帝永享八酉辰年、安倍康季将軍野西北の方へ築く。」 『秋田沿革史大成 下』
天正17年	1589	湊合戦がおこる。 『秋田家文書』「湊檜山両家合戦覚書」
慶長４～６年	1599～1601	安東実季が湊城の大改修を行う。 御広間・御奏者之間・角屋倉・門屋倉・御台所・御鷹部屋・御料理之間・御長屋を工事した費用・人数・日数等の記述がある。『秋田家文書』「御作事入用之目録」など 「土崎の湊という當地に城跡あり平城にして水堀二重土手所々にあり大手は辛酉にあり搦手は北に有」『出羽国風土略記』
慶長７年	1602	佐竹義宣が常陸より湊城へ入城。安東実季は常陸国宍戸へ。
慶長９年	1604	佐竹義宣が久保田城へ移り、湊城は破却。
元和２年	1616	久保田城と土崎湊をつなぐ新道（羽州街道）が完成。
元和６年	1620	神明社が湊城の跡地（現在地）に移り、土崎の総鎮守となる。

註１）安東氏に関する家系図はこの他にも様々あるが、ここでは実季の死去の前年（1658）に完成されたとされる秋田家に伝わる「秋田家系図」を参考にした。文献としては、塩谷編1996に所収されたものを参照した。

註２）原文に「永享八酉辰年」とあるが、実際は永享八年は「丙辰」であり、この記述自体の信憑性が問われる。

註３）神明社では大正２年（1913）に300年祭、昭和38年（1963）に350年祭を行っており、神明社の根本の創建が慶長18年（1613）、湊城跡地に社殿等が整ったのが元和６年（1620）とする説もある。（秋田市教育委員会編2002）

【引用・参考文献】

塩谷順耳他　1996『秋田市史 第八巻 中世 史料編』秋田市

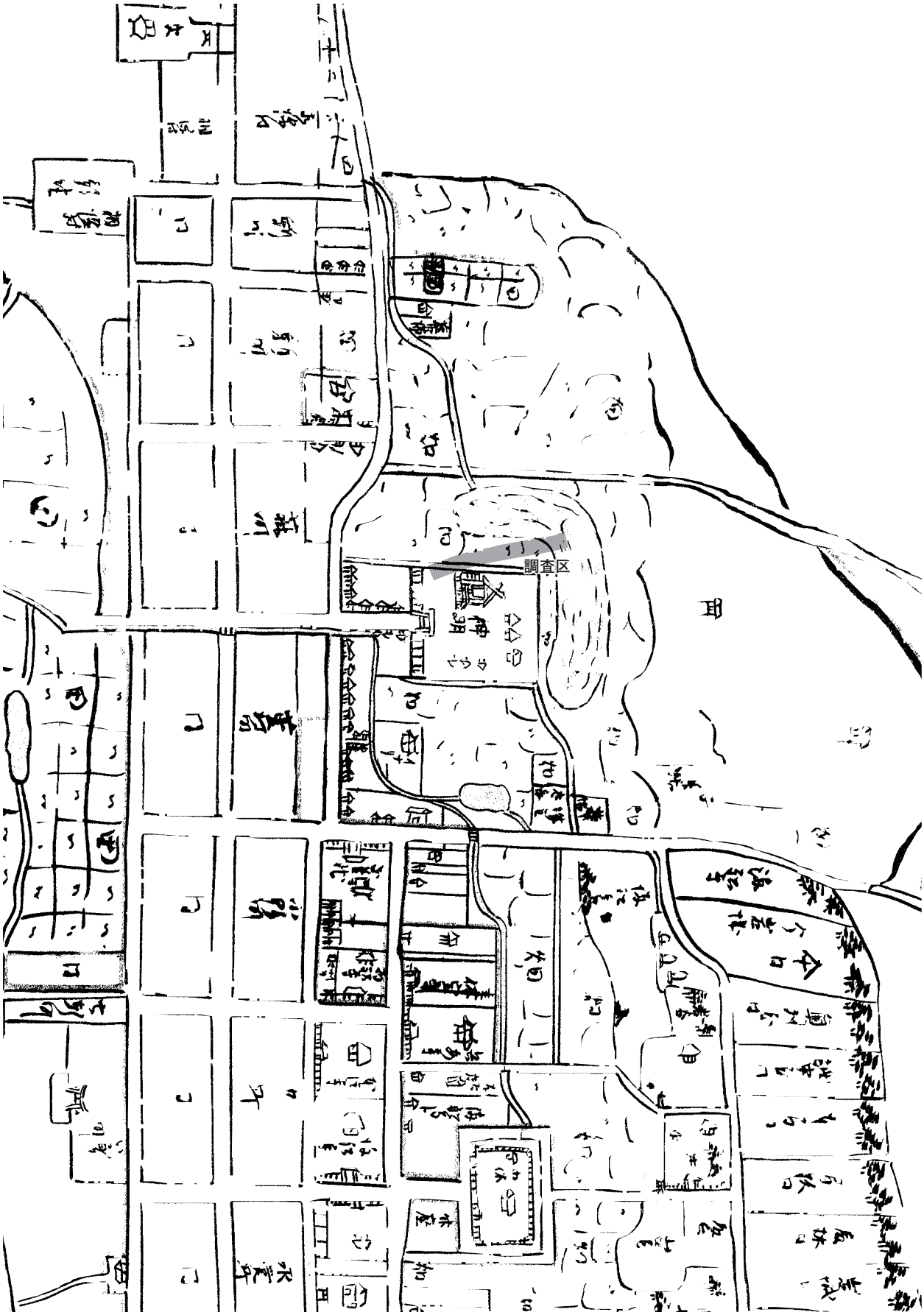
秋田市教育委員会編　1993『土崎港祭りの曳山行事』

秋田市教育委員会編　2002『土崎神明社の曳山行事伝承活用テキスト』

加藤助吉　1941『土崎港町史』秋田市役所土崎出張所

橋本宗彦　1898『秋田沿革史大成 下』（復刻版　橋本宗彦 1973『秋田沿革史大成 下』加賀谷書店 所収）

進藤重記　1762『出羽国風土略記』（進藤重記 1974『出羽国風土略記』歴史図書 所収）



第5図　元文年中湊古絵図（『土崎港町史』より転載）

第6図　湊町古絵図（『土崎港町史』より転載）

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

調査対象地とした土崎神明社斎館及び街区公園の北側は、神明社駐車場入り口や公園入口があることから、発掘調査期間中を通して車道や歩道の確保が必要であった。そこで、調査は斎館北側をＡ区、街区公園北側をＢ区とし、中央を通路として進めた。

調査地に一区画４ｍ×４ｍのグリッドを設定し（第７、８図）、グリッドの南北軸は調査地に合わせた任意の方向で、南北軸に直行する東西軸を設定した。そして、南北軸に算用数字、東西軸に２文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の交点で両者を組み合わせてグリッド名とした。また、グリッド杭とは別に、世界測地系に基づいた座標杭を各３点設置し、各座標杭の数値は下記のとおりである。

Ａ区

Ａ：（Ｘ＝-26,650.000　Ｙ＝-65,330.000）、Ｂ：（Ｘ＝-26,550.000　Ｙ＝-65,330.000）

Ｃ：（Ｘ＝-26,655.000　Ｙ＝-65,445.000）

Ｂ区

Ａ：（Ｘ＝-26,627.456　Ｙ＝-65,438.000）、Ｂ：（Ｘ＝-26,620.000　Ｙ＝-65,250.000）

Ｃ：（Ｘ＝-26,615.100　Ｙ＝-65,250.000）、

結果として、グリッド南北軸はＡ区では真北方向軸に対して23°52′16″西偏、Ｂ区では真北方向軸に対して25°21′13″西偏することになった。

調査地設定にあたっては、周辺建物への影響を考慮し、道路境界線から約1.5ｍ、宅地境界線から約１ｍ離した。また、Ａ区西端に約４ｍ、Ｂ区西端に約４ｍの土砂運搬用作業スペースを確保した。

遺物の取り上げは、グリッド名・層位名等を記録したグリッド上げを基本とし、適宜、出土地点を記録して行った。遺構平面図・断面図・土層断面図は、１／20の縮尺で作成した。遺構写真は35㎜版及び６×７ブローニー版を使用し、モノクロフィルム及びリバーサルフィルムで記録した。遺物は調査終了時で、55×34×15㎝のコンテナで30箱で、その他一部コンテナに収容できない木製品があった。遺物は洗浄・注記・接合・復元作業を行い、実測図を１／１で作成した。遺物写真は６×７ブローニー版を使用し、モノクロフィルム及びリバーサルフィルムで撮影した。

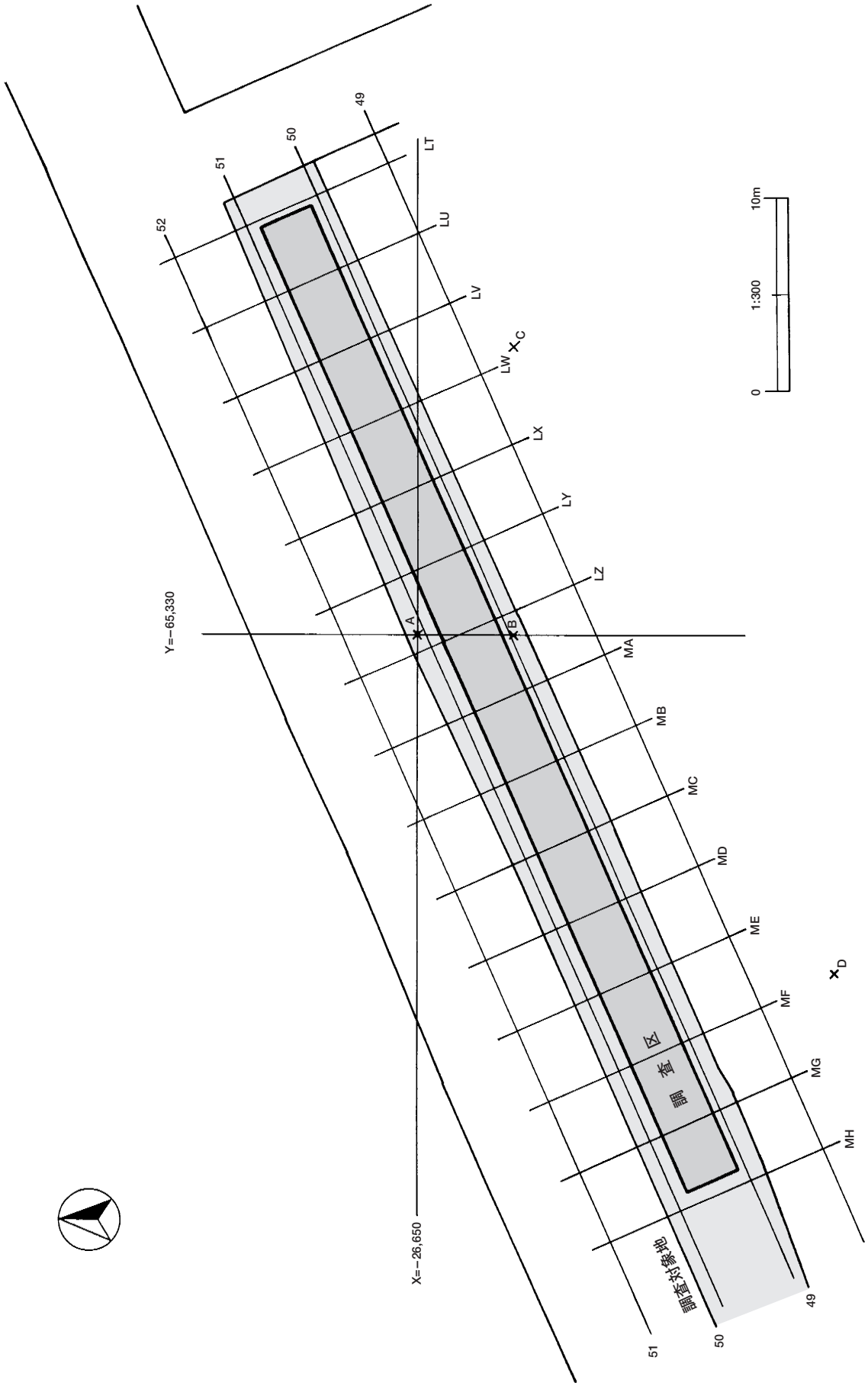
第２節　層序

各調査区の層序は下記のとおりである（第９～14図）。

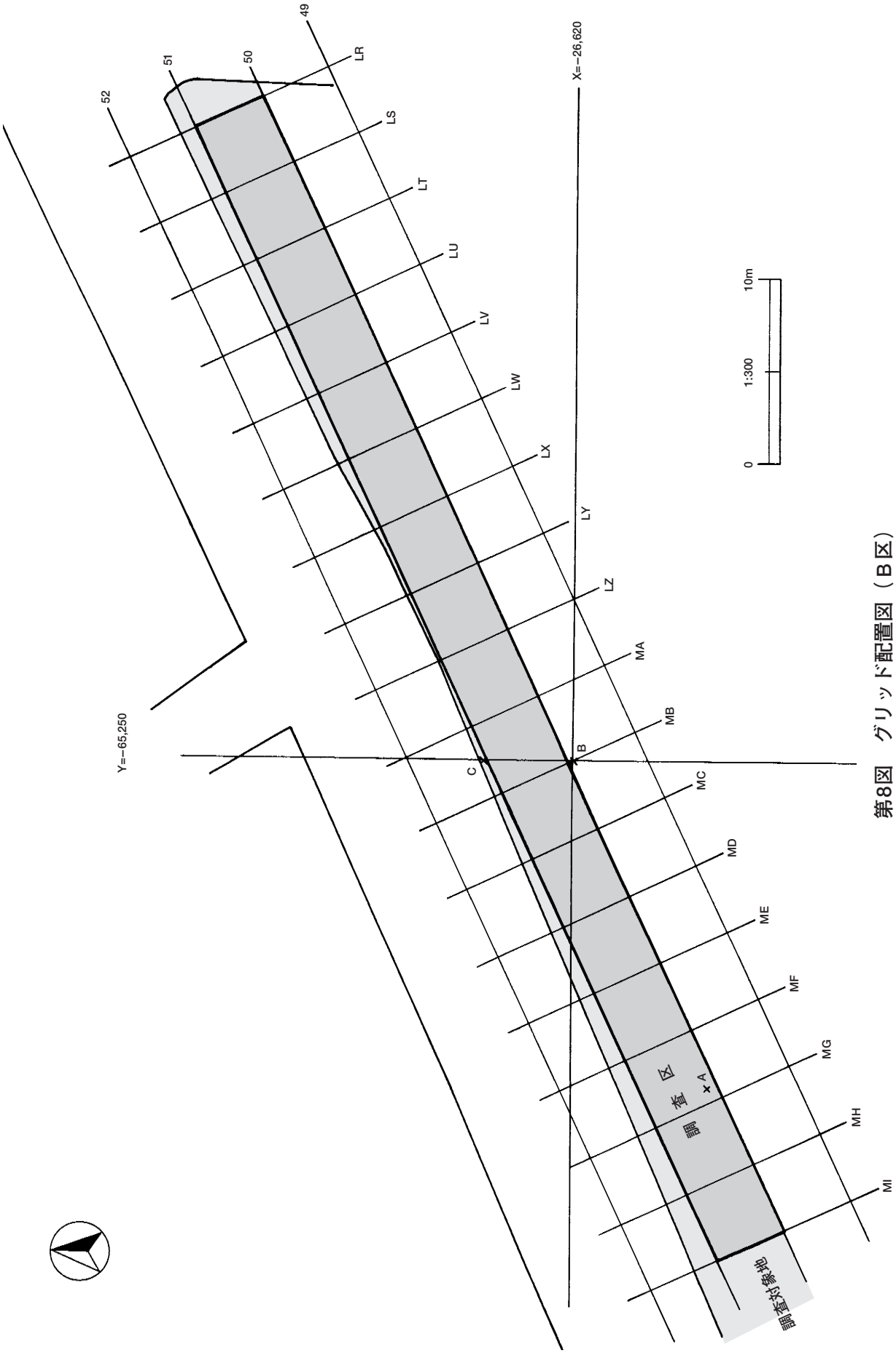
Ａ区

第Ⅰ層（表土）　黄褐色砂質土（10YR5/6）に砕石が混じる。また、場所によって第Ⅰａ層（にぶい黄褐色砂〔10YR4/3〕に小円礫が混じる）の層が入る。

第Ⅱ層（近代造成土）　暗灰黄色砂質土（10YR4/2）に砕石が混じる。また、場所によって第Ⅱａ層（暗褐色砂〔10YR3/3〕に炭化物が混じる）、第Ⅱｂ層（灰黄色砂〔2.5YR6/2〕に明黄褐色砂〔2.5YR6/6〕が混じる）、第Ⅱｃ層（灰黄褐色砂〔10YR4/2〕）、第Ⅱｄ層（黒褐色粘質土〔10YR2/2〕）、第Ⅱｅ層（灰黄褐色砂〔10YR4/2〕と黒褐色砂〔10YR3/1〕が混じる）の層が入る。



第7図　グリッド配置図（Ａ区）



第8図　グリッド配置図（Ｂ区）

第Ⅲ層（江戸時代以降の整地層①）　暗褐色砂（10YR3/3）に黄褐色砂（10YR5/6）、炭化物が混じる。また、場所によって第Ⅲa層（にぶい黄褐色砂〔10YR5/4〕に灰黄褐色砂〔10YR4/2〕が混じる）の層が入る。江戸時代以降の遺物が出土している。

第Ⅳ層（江戸時代の整地層②）　黄褐色砂（2.5YR5/4）に明黄褐色砂（10YR6/6）と炭化物が混じる。江戸時代の遺構・遺物が確認された。

第Ⅴ層（安土桃山時代の整地層）　明黄褐色砂（10YR7/6）。安土桃山時代から江戸時代初頭にかけての遺構・遺物が確認された。

Ｂ区

第Ⅰ層（表土）　灰黄褐色土（10YR4/2）に明黄褐色粘土（10YR6/8）と炭化物が混じる。また場所によって、第Ⅰa層（灰黄褐色砂質土〔10YR5/2〕に砂利と炭化物が混じる）、第Ⅰb層（褐灰色砂質土〔10YR5/1〕ににぶい黄橙色砂〔10YR6/4〕が混じる）の層が入る。

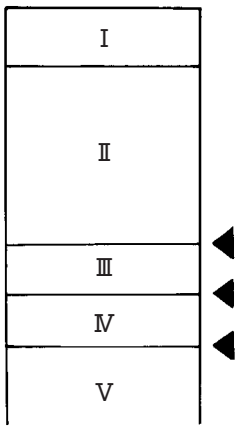
第Ⅱ層（近代造成土）　にぶい黄橙色砂（10YR6/4）。また場所によって第Ⅱa層（にぶい黄褐色砂〔10YR4/3〕に黄褐色砂〔10YR5/6〕が混じる）の層が入る。

第Ⅲ層（江戸時代の整地層）　灰黄褐色砂（10YR4/2）に一部砂利と炭化物が混じる。江戸時代以降の遺構・遺物が出土している。

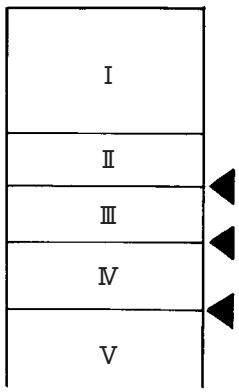
第Ⅳ層（江戸時代の整地層）　灰黄褐色砂（10YR5/2）に炭化物が混じる。また場所によって第Ⅳa層（にぶい黄褐色砂〔10YR5/2〕に明黄褐色砂（10YR7/6）が混じる）の層が入る。江戸時代の遺構・遺物が出土している。

第Ⅴ層（安土桃山時代の整地層）　黄褐色砂（10YR5/6）に炭化物が混じる。江戸時代の遺構・遺物が出土している。

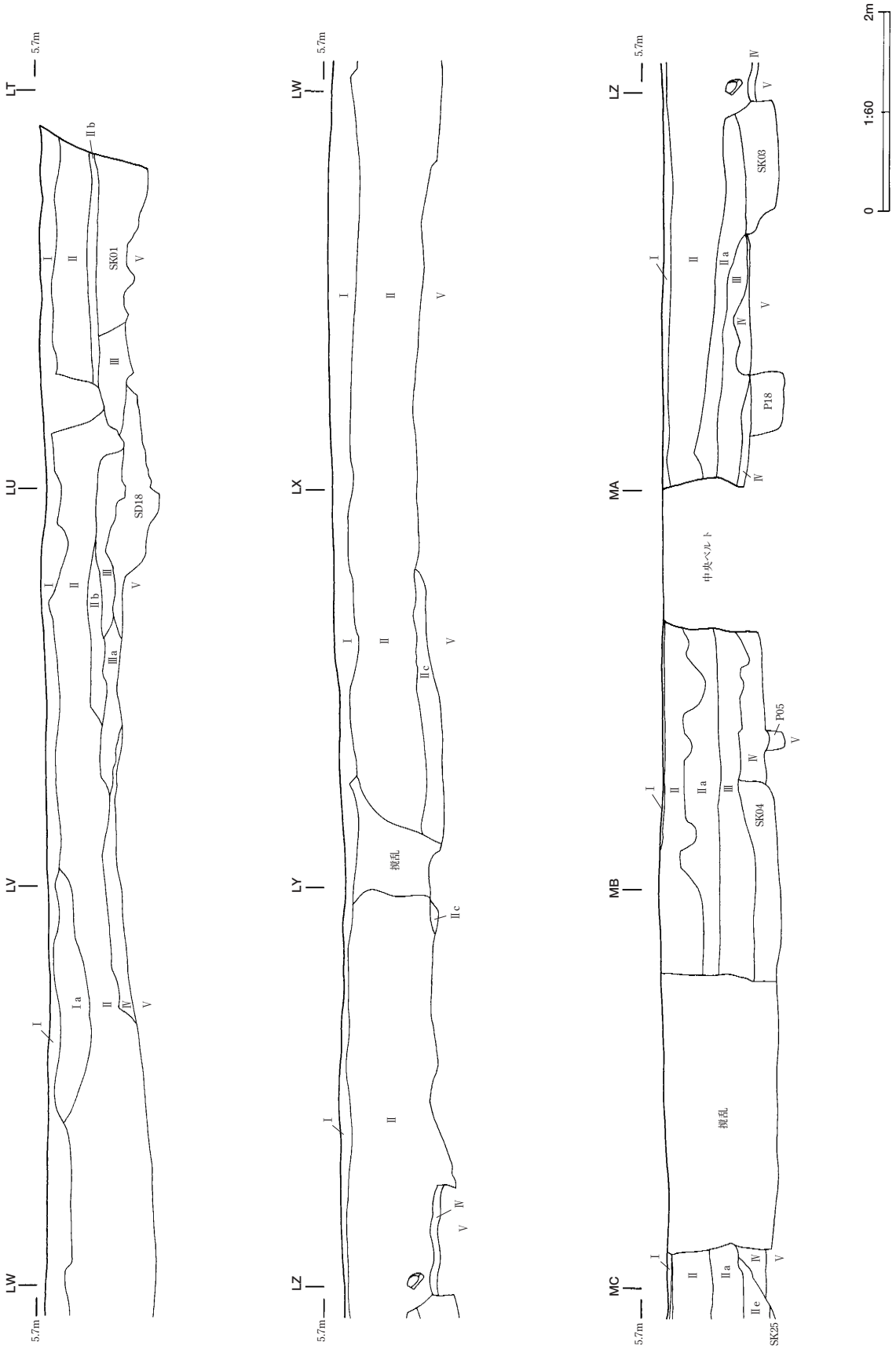
遺構確認面は、第Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ層の３面で、各層は人為的に造成された整地層である。中・近世の整地層（第Ⅲ～Ⅴ層）で、約40㎝の堆積がみられる。



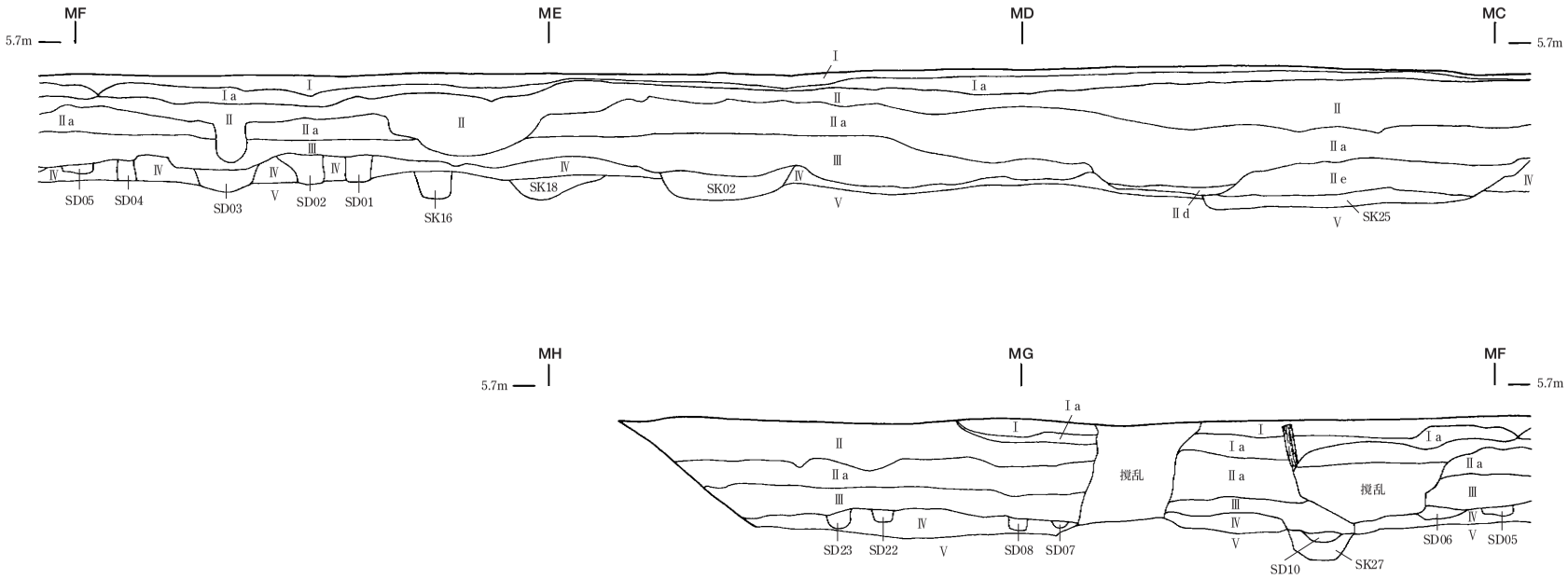
第9図　基本層序柱状図（Ａ区）



第10図　基本層序柱状図（Ｂ区）



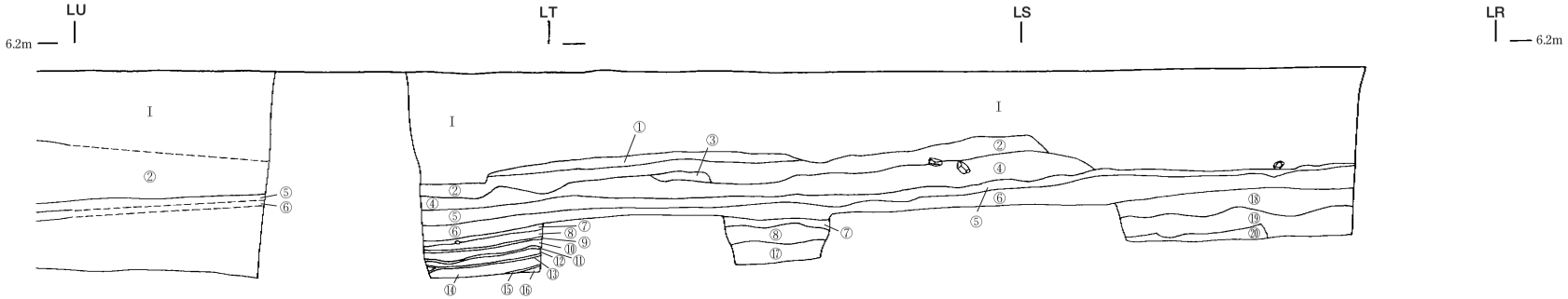
第11図　A区北壁土層断面図①



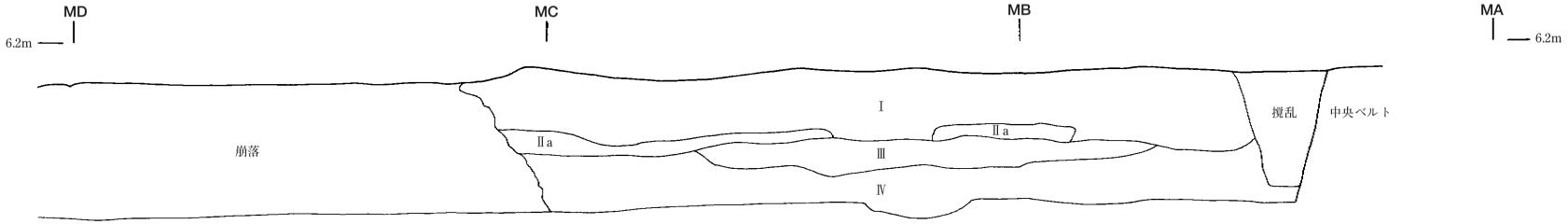
A区
第Ⅰ層　黄褐色砂質土（10YR5/6）に砕石が混じる
第Ⅰa層　にぶい黄褐色砂（10YR4/3）に小円礫含む
第Ⅱ層　暗灰黄色砂質土（10YR4/2）に砕石が混じる
第Ⅱa層　暗褐色砂（10YR3/3）に炭化物が混じる
第Ⅱb層　灰黄色砂（2.5Y6/2）に明黄褐色砂（2.5Y6/6）が混じる
第Ⅱc層　灰黄褐色砂（10YR4/2）に黄褐色砂（2.5Y5/6）が混じる
第Ⅱd層　黒褐色粘質土（10YR2/2）
第Ⅱe層　灰黄褐色砂（10YR4/2）と黒褐色砂（10YR3/1)が混じる
第Ⅲ層　暗褐色砂（10YR3/3）に黄褐色砂（10YR5/6）と炭化物が混じる
第Ⅲa層　にぶい黄褐色砂（10YR5/4）に灰黄褐色砂（10YR4/2）が混じる
第Ⅳ層　黄褐色砂（2.5Y5/4）に明黄褐色砂（10YR6/6）と炭化物が混じる
第Ⅴ層　明黄褐色砂（10YR7/6）

0　1:60　2m

第12図　A区北壁土層断面図②



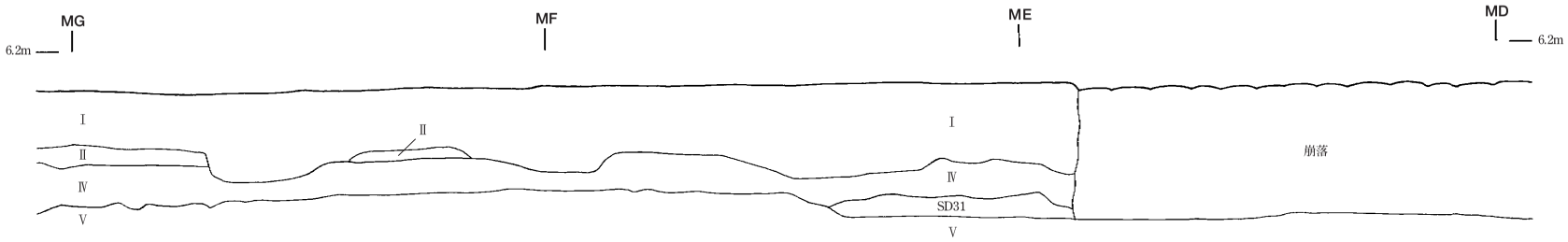
１号堀跡北壁土層断面図

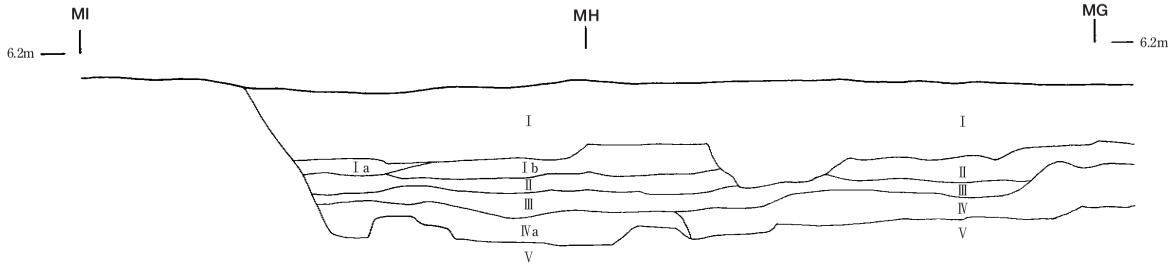


ＳＧ01
① にぶい黄褐色砂（10YR5/3)に褐色砂（10YR4/6）と砂利が混じる
② 黄褐色砂（10YR5/6）に一部鉄分含む
③ 暗褐色砂質土（10YR3/4）に鉄分含む
④ 黒褐色砂質土（10YR2/3）に植物堆積物含む
⑤ 黒褐色土（10YR3/1）植物堆積層（すくも）
⑥ 浅黄色砂（2.5Ｙ7/4）に灰黄褐色砂質土（10YR5/2）が一部混じる
⑦ 黒褐色植物堆積層（10YR3/1）
⑧ 灰黄色砂（2.5Ｙ6/2）に黒褐色植物堆積層（10YR3/1）が少量混じる
⑨ 黒褐色植物堆積層（10YR3/1）
⑩ 灰黄色砂（2.5Ｙ6/2）に黒褐色植物堆積層（10YR3/1）が少量混じる
⑪ 黒褐色植物堆積層（10YR3/1）
⑫ 灰黄色砂（2.5Ｙ6/2）に黒褐色植物堆積層（10YR3/1）が少量混じる
⑬ 黒褐色植物堆積層（10YR3/1）
⑭ 灰黄色砂（2.5Ｙ6/2）に黒褐色植物堆積層（10YR3/1）が少量混じる
⑮ 黒褐色植物堆積層（10YR3/1）
⑯ 灰黄色砂（2.5Ｙ6/2）に黒褐色植物堆積層（10YR3/1）が少量混じる
⑰ 暗灰黄色砂（2.5Ｙ5/2）に植物堆積物が混じる
⑱ 明黄褐色砂（2.5Y7/6）
⑲ 黄灰色砂（2.5Ｙ5/1）に灰黄褐色砂質土（10YR4/2、植物堆積）が混じる
⑳ 黄灰色砂（2.5Ｙ5/1）

0　1:60　2m

第13図　Ｂ区北壁土層断面図①





B区
第Ⅰ層　灰黄褐色土（10YR4/2）に明黄褐色粘土（10ＹR6/8）と炭化物が混じる
第Ⅰa層　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）に砂利と炭化物が混じる
第Ⅰb層　褐灰色砂質土（10YR5/1）ににぶい黄橙色砂（10YR6/4）が混じる
第Ⅱ層　にぶい黄橙色砂（10YR6/4）
第Ⅱa層　にぶい黄褐色砂（10YR4/3)に黄褐色砂（10YR5/6）が混じる
第Ⅲ層　灰黄褐色砂（10YR4/2）に一部砂利と炭化物が混じる
第Ⅳ層　灰黄褐色砂（10YR5/2）に炭化物が混じる
第Ⅳa層　にぶい黄褐色砂（10YR5/3）に明黄褐色砂（10YR7/6）が混じる
第Ⅴ層　黄褐色砂（10YR5/6）に炭化物が混じる

0　1:60　2m

第14図　Ｂ区北壁土層断面図②

第３節　遺構と遺物

検出遺構と出土遺物を調査区ごとに記述する。

（Ａ区）

遺構は第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の３面で確認された（第16図）。以下、各層ごとに検出された遺構・遺物について述べる。

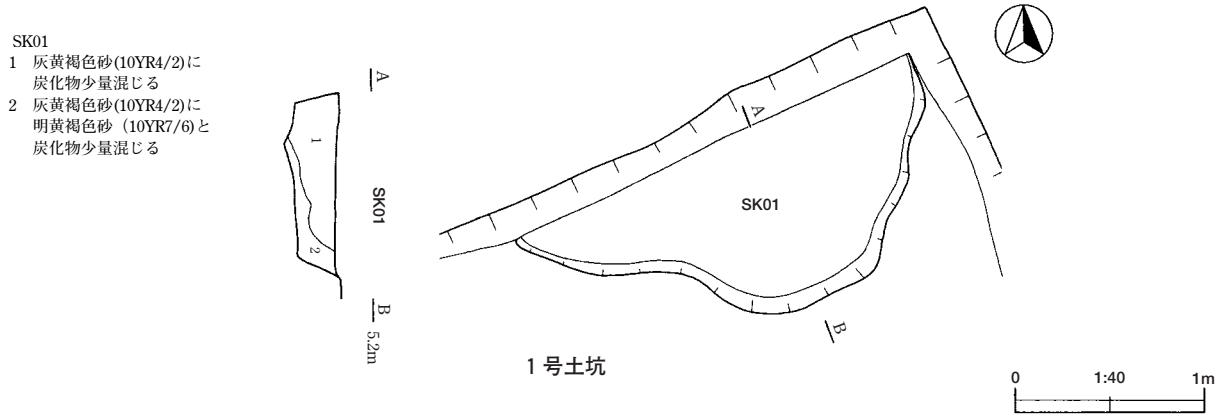
（１）第Ⅲ層検出の遺構・遺物

遺構は、土坑１基（SK01）のみの検出である（第16図、図版２、８）。遺物は、整地層である第Ⅲ層から、陶磁器・金属製品・石製品が出土した。

土坑

１号土坑（第15図）

LT50グリッドで検出された。平面形は不整形で、北側は調査区外へ延びるため全容は不明である。規模は東西2.5ｍ、南北１ｍ以上で、深さは確認面から約20㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。



第15図　Ａ区第Ⅲ層検出遺構（土坑）

第Ⅲ層出土遺物

土器・陶磁器（第29、30図、図版13、14、15）

〔**陶器**〕１～８は陶器である。

（碗類）１は産地不明の陶器碗で、二次加熱を受けている。釉は暗オリーブ褐色を帯びている。

（皿類）２は肥前系陶器灰釉溝縁皿である。釉は灰褐色を呈し、口縁端部に一条の細い溝を施している。３は京信楽系灰釉皿で、高台は露胎である。４は産地不明の陶器皿である。

（火入れ）５は産地不明の陶器火入れである。

（甕類）６は産地不明の甕である。

（土瓶）７は産地不明の土瓶である。

（擂鉢）８は産地不明の擂鉢である。

〔**磁器**〕９～29は磁器である。

（碗類）９～11は肥前系磁器染付碗である。９の外面には柳文を染付けている。10の内面にはロクロ痕が認められる。11の外面には雷文を染付けている。12～15は産地不明の磁器染付碗である。12は型紙刷りで文様を染付けている。13の外面には松文を染付けている。14の内面口縁部付近には雷文、外面には梅花文を施している。

（皿類）16は肥前系磁器染付皿で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施し、松葉文を染付けている。17は肥前系磁器青磁皿で、外面には青磁釉、内面には見込みにコンニャク印判による五弁花文を染付けている。18～20は肥前系磁器染付皿で、18は内面に草花文、外面に唐草文を染付けている。20は高台に砂が付着している。21は肥前系磁器白磁皿で、内面に型押し成形による梅花文を施している。22は産地不明の磁器染付皿で、内面に西洋コバルトで型紙刷りを施している。23、24は産地不明の染付皿である。25は中国産磁器青磁皿で、高台下部は無釉である。

（小坏）26は肥前系磁器染付小坏である。27は産地不明の磁器白磁小坏で、蛇ノ目釉剥ぎを施している。

（段重）28は肥前系磁器染付段重で、高台に砂が付着している。

（徳利）29は産地不明の磁器染付徳利で、内面は無釉である。

陶磁器の年代は、おおむね19世紀後半以降であり、第Ⅲ層はこの時期に造成された整地層と考えられる。

金属製品（第38図、図版22）

１は鉄製の釘であるが、長さが長いことと、頭部のつくりから瓦釘と考えられる。

石製品（第38図、図版22）

１は賽である。目の中の凹面にはベンガラが塗られている。

（２）第Ⅳ層検出の遺構・遺物

遺構は溝跡25条（SD01～SD25）、土坑４基（SK02～SK05）、ピット４個（P01～04）が検出された（第16図、図版３、８、９）。遺物は、土器・陶磁器が出土した。

溝跡

１号溝跡（第17図、図版８）

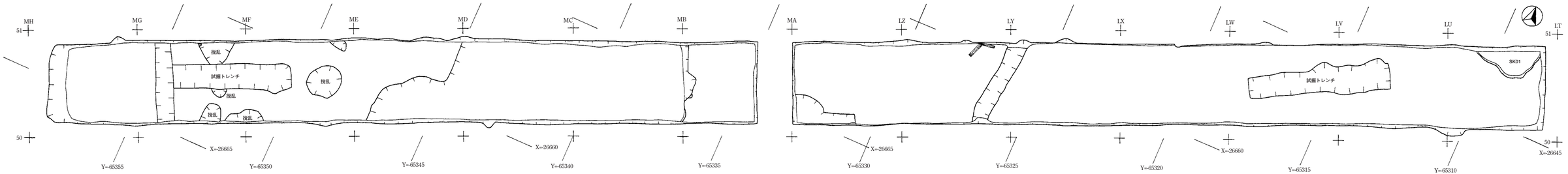
ME50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが1.2ｍ確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約１度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約30㎝、深さは確認面から約28㎝で、断面はＵ字状を呈する。

１号溝跡出土遺物

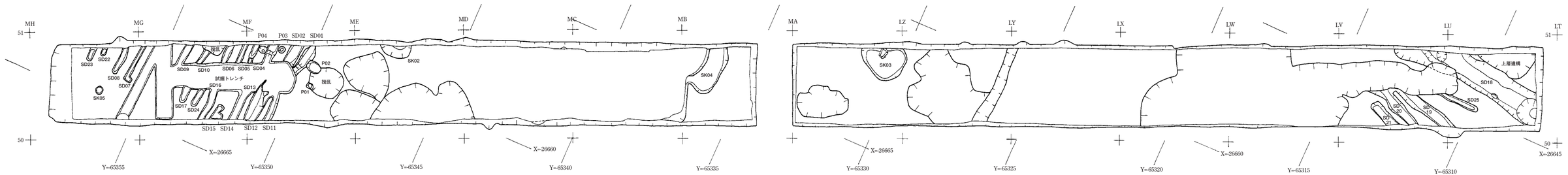
陶磁器（第31図30、図版15）：30は埋土出土である。肥前系磁器染付皿で、見込みの二重圏文内部に花文を染付けている。

２号溝跡（第17図、図版８）

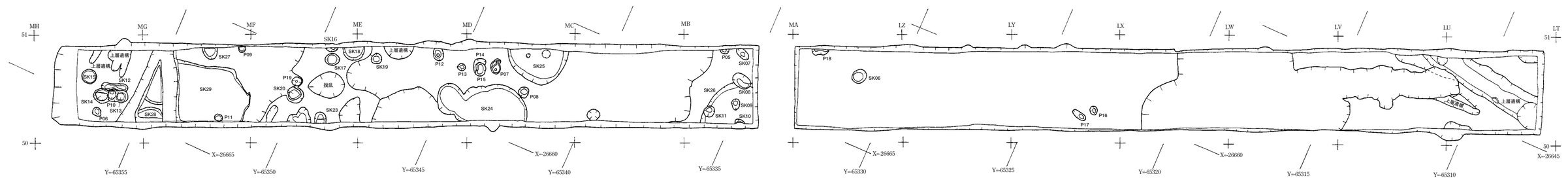
ME50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが70㎝確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約３度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約40㎝、深さは確認面から約25㎝で、断面はＵ



A区　第Ⅲ層検出遺構



A区　第Ⅳ層検出遺構



A区　第Ⅴ層検出遺構

第16図　A区遺構全体図

0　1:100　4m

字状を呈する。

３号溝跡（第17図、図版８）

ME50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが70㎝確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約16度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約30㎝、深さは確認面から約10㎝で、断面は鍋底状を呈する。

４号溝跡（第17図、図版８）

ME50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが70㎝確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約16度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約20㎝、深さは確認面から約13㎝で、断面は鍋底状を呈する。

５号溝跡（第17図、図版８）

MF50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが70㎝確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約１度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約18㎝、深さは確認面から約10㎝で、断面は鍋底状を呈する。

６号溝跡（第17図、図版８）

MF50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが65㎝確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約１度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約25㎝、深さは確認面から約10㎝で、断面は鍋底状を呈する。

７号溝跡（第17図、図版８）

MG50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが1.4ｍ確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約４度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約15㎝、深さは確認面から約８㎝で、断面は鍋底状を呈する。

８号溝跡（第17図、図版８）

MG50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが1.1ｍ確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約２度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約25㎝、深さは確認面から約５㎝で、断面は鍋底状を呈する。

９号溝跡（第17図）

MF50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが60㎝確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約７度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約18㎝、深さは確認面から約15㎝で、断面はU字状を呈する。

10号溝跡（第17図）

MF50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが60㎝確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約13度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約20㎝、深さは確認面から約５㎝で、断面は鍋底状を呈する。

11号溝跡（第17図）

ME50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが1.1ｍ確認され、南側は調査区外へ延びる。方向は北で約７度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約15㎝、深さは確認面から約14㎝で、断面はＵ字状を呈する。

12号溝跡（第17図）

ME50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが1.2ｍ確認され、南側は調査区外へ延びる。方向は北で約９度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約60㎝、深さは確認面から約25㎝で、断面は鍋底状を呈する。

遺構廃絶年代は陶磁器の年代から、19世紀中葉と考えられる。

12号溝跡出土遺物

陶磁器（第31図31、図版15）：31は埋土出土である。産地不明の白磁皿で、高台に砂が付着している。

13号溝跡（第17図）

ME50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが1.1ｍ確認され、南側は調査区外へ延びる。方向は北で約１度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約30㎝、深さは確認面から約25㎝で、断面はＵ字状を呈する。

14号溝跡（第17図）

MF50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが20㎝確認され、南側は調査区外へ延びる。方向は北で約３度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約25㎝、深さは確認面から約10㎝で、断面はＵ字状を呈する。

15号溝跡（第17図）

MF50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが60㎝確認され、南側は調査区外へ延びる。方向は北で約10度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約20㎝、深さは確認面から約15㎝で、断面は鍋底状を呈する。

16号溝跡（第17図）

MF50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが65㎝確認され、南側は調査区外へ延びる。方向は北で約９度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約20㎝、深さは確認面から約15㎝で、断面はＵ字状を呈する。

17号溝跡（第17図）

MF50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが60㎝確認され、北側は試掘トレンチで削られた。方向は北で約10度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約20㎝、深さは確認面から約15㎝で、断面は鍋底状を呈する。

18号溝跡（第18図、図版８）

LT50グリッドで検出された。東西方向の溝で、長さが4.5ｍ確認され、東側および西側は、調査区外へ延びる。方向は北で約78度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約１ｍ、深さは確認面から約35㎝で、断面は鍋底状を呈する。

陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は19世紀前期～中葉と考えられる。

18号溝跡出土遺物

陶磁器（第31図32～36、図版15）：32～36は埋土出土である。32は産地不明の陶器土瓶で、体部下端まで灰白色の釉を施している。33は産地不明の磁器染付碗で、内外面に四方襷文を染付けている。34は産地不明の磁器染付碗で、内側には雷文、外側には線によって文様を表現している。35は肥前系磁器染付皿である。36は産地不明の磁器染付急須または土瓶である。

19号溝跡（第18図、図版８）

LU50グリッドで検出された。東西方向の溝で、長さが2.2ｍ確認され、東側は調査区外へ延びる。方向は北で約74度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約45㎝、深さは確認面から約13㎝で、断面は鍋底状を呈する。

20号溝跡（第18図、図版８）

LU50グリッドで検出された。東西方向の溝で、長さが1.7ｍ確認され、東側は調査区外へ延びる。方向は北で約65度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約40㎝、深さは確認面から約10㎝で、断面は鍋底状を呈する。

21号溝跡（第18図、図版８）

LU50グリッドで検出された。東西方向の溝で、長さが1.1ｍ確認され、東側は調査区外へ延びる。方向は北で約66度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約35㎝、深さは確認面から約５㎝で、断面は鍋底状を呈する。

22号溝跡（第18図、図版８）

MG50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが30㎝確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約３度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約20㎝、深さは確認面から約20㎝で、断面はＵ字状を呈する。

23号溝跡（第18図、図版８）

MG50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが50㎝確認され、北側は調査区外へ延びる。

方向はほぼ北方向である。溝の側壁間の幅は約20㎝、深さは確認面から約35㎝で、断面はＵ字状を呈する。

24号溝跡（第17図、図版８）

MF50グリッドで検出された。南北方向の溝で、長さが1.6ｍ確認され、北側は試掘トレンチで削られた。方向はほぼ北方向である。溝の側壁間の幅は約20㎝、深さは確認面から約22㎝で、断面は鍋底状を呈する。

25号溝跡（第18図、図版８）

LT50グリッドで検出された。東西方向の溝で、長さが30㎝確認され、北側は撹乱されている。方向は北で約３度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約20㎝、深さは確認面から約10㎝で、断面はＵ字状を呈する。

25号溝出土遺物

陶磁器（第31図37、図版15）：37は肥前系磁器染付碗で、外面に網目文を染付けている。

土坑

２号土坑（第19図、図版９）

MD50グリッドで検出された。平面形は楕円形と考えられ、北側は調査区外へ延びる。規模は、長軸約1.1ｍ、短軸50㎝以上で、深さは確認面から約20㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

３号土坑（第19図、図版９）

LZ50グリッドで検出された。平面形は隅丸方形と考えられ、北側は調査区外へ延びる。規模は長軸1.5ｍ以上、短軸1.4ｍ以上で、深さは確認面から約30㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。埋土に約25㎝の礫が入っていた。

３号土坑出土遺物

陶磁器（第31図38、図版15）：38は埋土出土で、産地不明の磁器皿である。内外面の口縁部付近に一条の線を染付けている。

４号土坑（第19図、図版９）

MA50グリッドで検出された。周辺のⅣ層掘り上げ時に検出されており、全容は明確ではない。平面形は楕円形と考えられる。規模は長軸約1.7ｍ、短軸約1.2ｍで、深さは確認面から約30㎝である。底面は二段を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。

４号土坑出土遺物

陶磁器（第31図39、40、図版15）：39、40は埋土出土である。39は産地不明の磁器碗で、外面に印判によるコバルトで染付けている。40は産地不明の陶器碗である。

５号土坑（第19図）

MG50グリッドで検出された。平面形は円形で、規模は直径約30㎝、深さは確認面から約22㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

Ⅳ層出土遺物

土器・陶磁器（第31、32図41～50、図版15～16）

〔**陶器**〕41、43は陶器である。

（皿類）41は瀬戸美濃系陶器皿で、内外面に浅黄色の釉を施している。

（擂鉢）43は産地不明の陶器擂鉢である。

〔**磁器**〕44～49は磁器である。

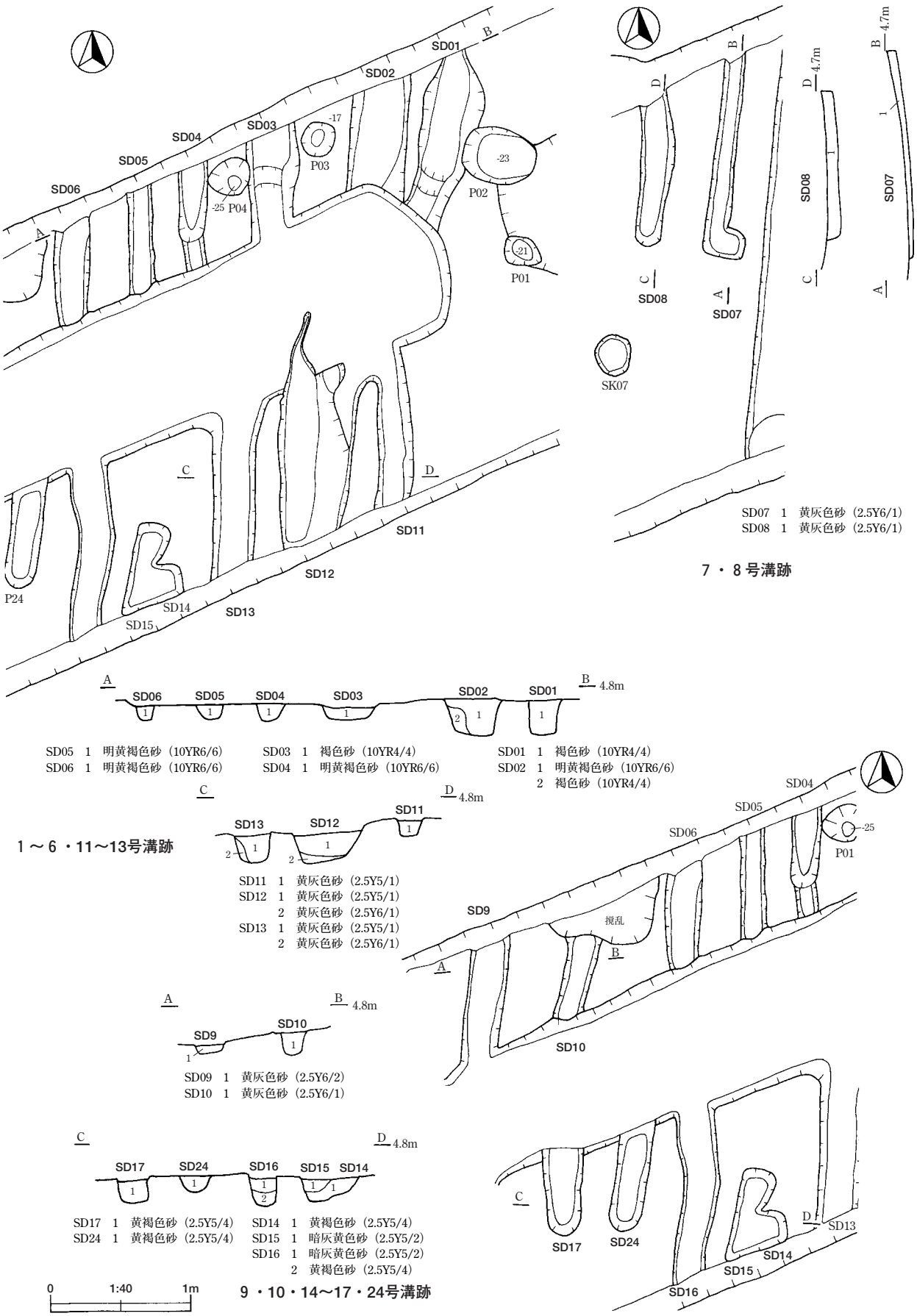
（碗類）44、45は肥前系磁器染付碗である。45は外面に網目文を染付けている。

（皿類）46は中国産磁器染付皿である。裏底に「洪武年造」銘を染付けている。47～49は肥前系磁器染付皿である。47は裏底に方形で囲んだ銘を染付けているが、文字は不明である。48は見込みにコンニャク印判による五弁花を施している。裏底には「福」銘を手書きで染付けている。49は裏底に「富貴長春」銘を染付けている。

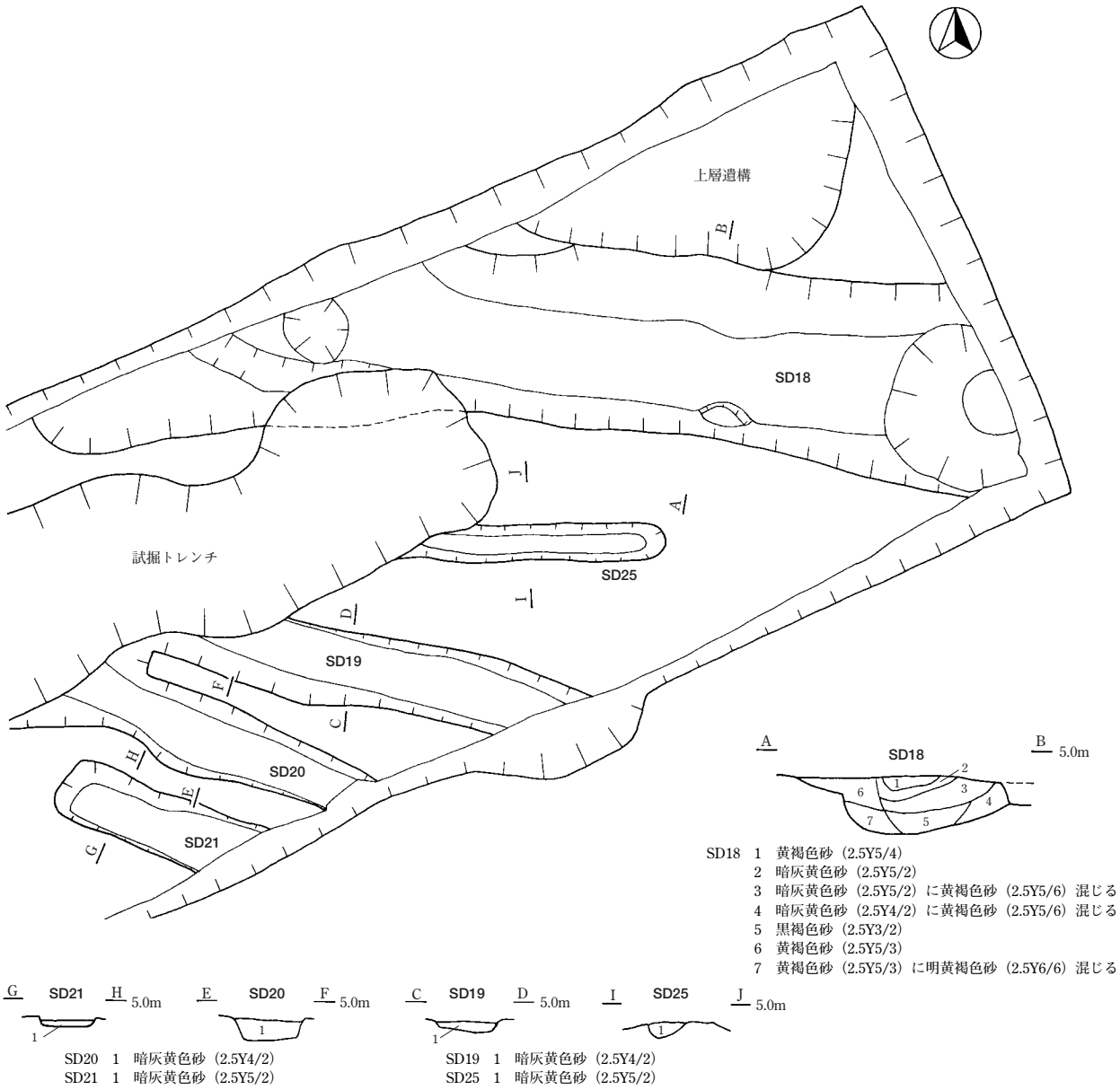
〔**土器**〕42、50は土器である。

（かわらけ）42は型づくりかわらけである。煤が付着しており、灯火具に転用したと考えられる。50は京都系手づくね成形のかわらけである。口縁部に煤が付着しており、灯火具に転用したと考えられる。

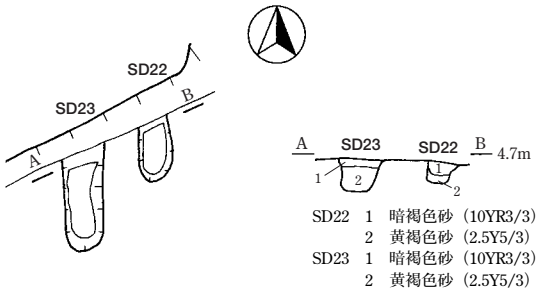
陶磁器の年代は、18世紀後半～19世紀前半であり、第Ⅳ層はこの時期に造成された整地層と考えられる。



第17図　Ａ区第Ⅳ層検出遺構（溝跡①）



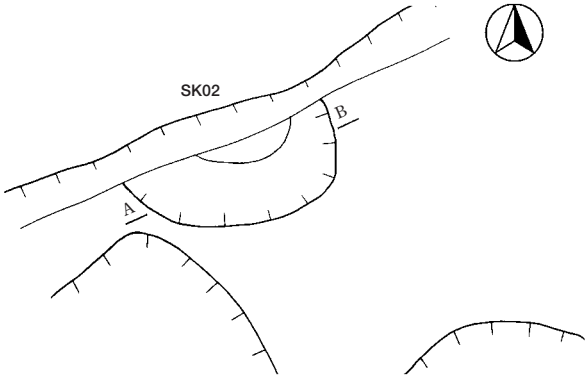
18～21・25号溝跡

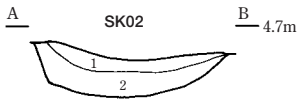


22・23号溝跡

0　1:40　1m

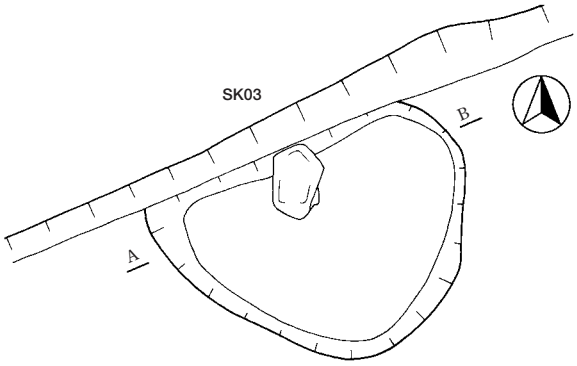
第18図　Ａ区第Ⅳ層検出遺構（溝跡②）

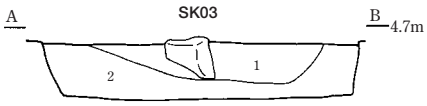




SK02　1　黒褐色砂（10YR3/2）に褐色砂（10YR4/4）少量混じる
　　2　灰黄褐色砂（10YR５/２）

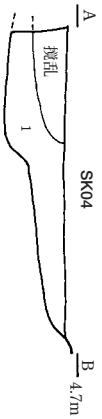
２号土坑



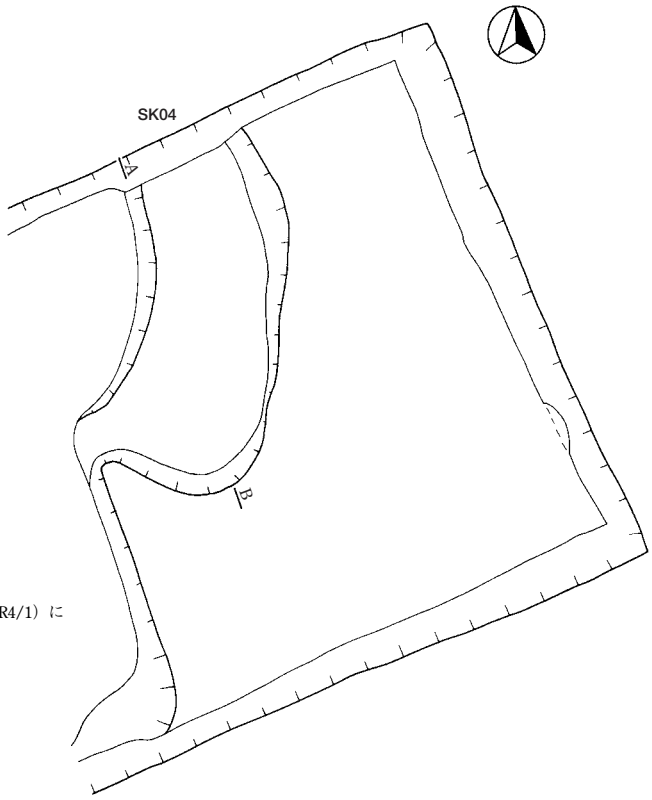


SK03　1　黒褐色砂（2.5Y3/1）
　　2　黒色砂（2.5Y2/1）

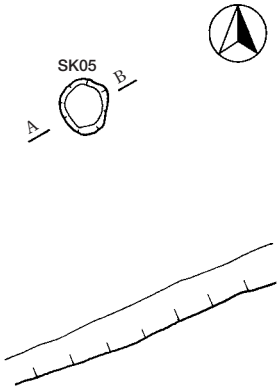
３号土坑

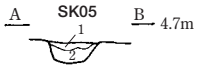


SK04　1
褐灰色砂質土（10YR4/1）に
炭化物少量混じる



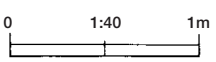
４号土坑





SK05　1　黒褐色砂質土（10YR3/1）
　　2　灰黄褐色砂（10YR5/2）に黒褐色砂
　　（10YR3/1）混じる

５号土坑



第19図　Ａ区第Ⅳ層検出遺構（土坑）

（３）第Ⅴ層検出の遺構・遺物

遺構は土坑24基（SK06～29）、ピット15基（P05～19）が検出された（第16図、図版３、９、10）。遺物は、遺構内および第Ⅴ層から土器・陶磁器、土製品、金属製品が出土した。

土坑

６号土坑（第20図、図版９）

LZ50グリッドで検出された。平面形は円形で、規模は直径約50㎝、深さは確認面から約60㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

７号土坑（第20図）

MA50グリッドで検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸50㎝、短軸30㎝で、深さは確認面から約16㎝である。底面はやや湾曲し、壁はやや急に立ち上がる。

８号土坑（第20図）

MA50グリッドで検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸約70㎝、短軸約47㎝、深さは確認面から約15㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

９号土坑（第20図）

MA50グリッドで検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸約40㎝、短軸約30㎝、深さは確認面から約15㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

10号土坑（第20図）

MA50グリッドで検出された。平面形は楕円形と考えられ、規模は長軸約35㎝以上、短軸約15㎝以上、深さは確認面から約30㎝で、底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

10号土坑出土遺物

金属製品（第38図２、図版22）：２は鉄製の釘である。

11号土坑（第20図）

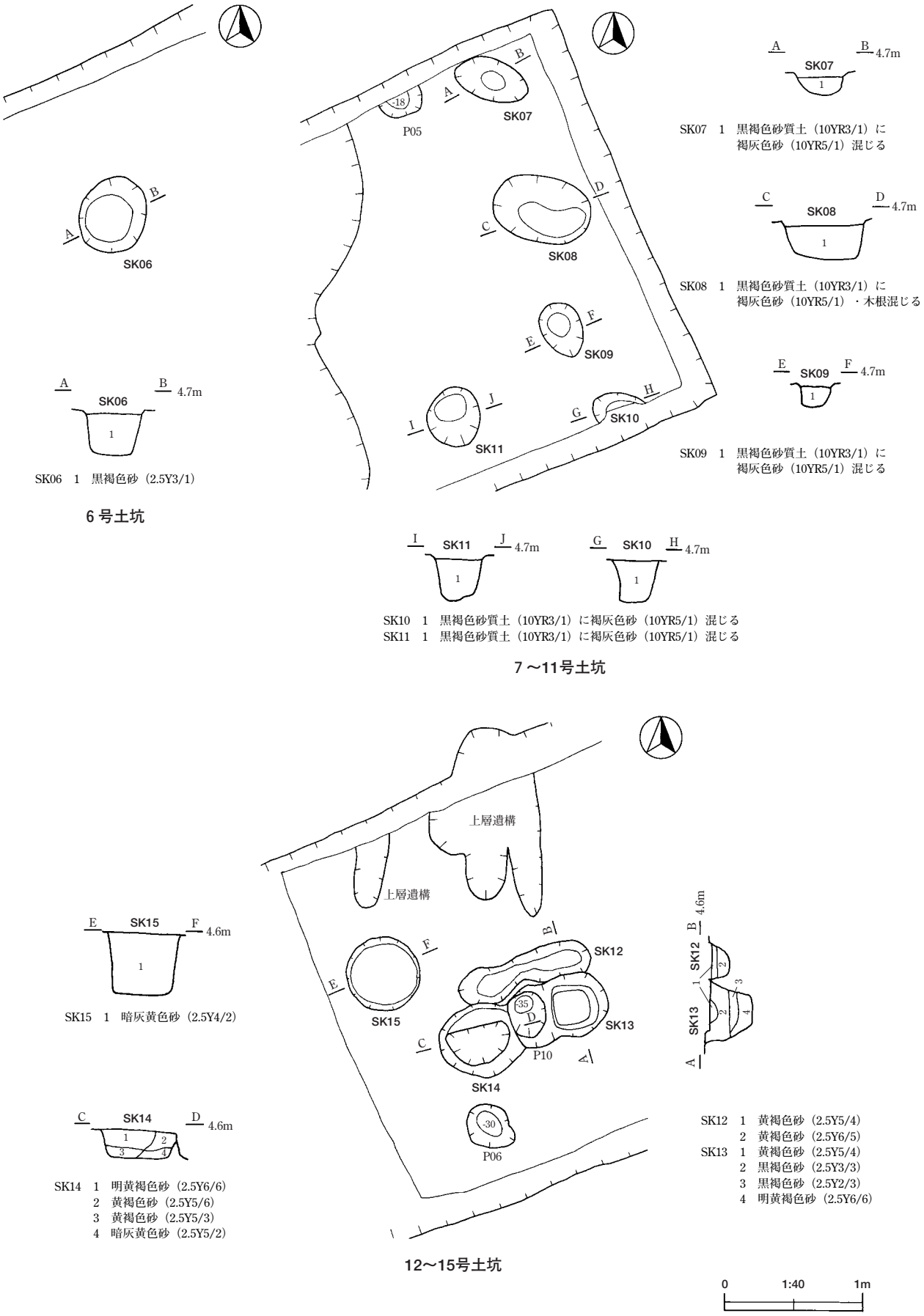
MA50グリッドで検出された。平面形は円形で、規模は直径約40㎝、深さは確認面から約30㎝である。底面は凹凸をなし、壁は急に立ち上がる。

12号土坑（第20図）

MG50グリッドで検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸約１ｍ、短軸約20㎝、深さは確認面から約16㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。13、14号土坑と重複し、これらより古い。

13号土坑（第20図）

MG50グリッドで検出された。平面形は円形で、規模は直径約60㎝、深さは確認面から約32㎝であ



第20図　Ａ区第Ⅴ層検出遺構（土坑①）

る。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。12号土坑、10号ピットと重複し、12号土抗より新しく、10号ピットより古い。

14号土坑（第20図）

MG50グリッドで検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸約70㎝、短軸約60㎝、深さは確認面から約20㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。12号土坑、10号ピットと重複し、10号ピットより古く、12号土坑より新しい。

15号土坑（第20図）

MG50グリッドで検出された。平面形は円形で、規模は直径約53㎝、深さは確認面から約45㎝である。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

16号土坑（第21図）

ME50グリッドで検出された。平面形は楕円形と考えられ、規模は長軸約40㎝以上、短軸約15㎝以上で、北側は調査区外へ延びる。深さは確認面から約23㎝で、底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

17号土坑（第21図）

ME50グリッドで検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸約55㎝、短軸約45㎝で、深さは確認面から約18㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

18号土坑（第21図）

ME50グリッドで検出された。平面形は楕円形と考えられ、規模は長軸約80㎝以上、短軸約40㎝以上で、北側は調査区外へ延びる。深さは確認面から８㎝で、底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

19号土坑（第21図）

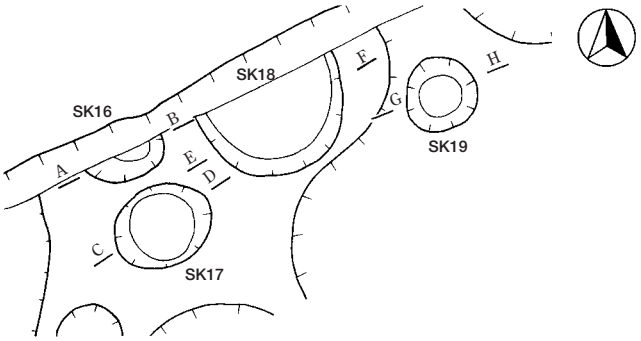
MD50グリッドで検出された。平面形は円形であり、規模は直径約60㎝、深さは確認面から約35㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

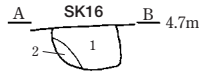
20号土坑（第21図、図版９）

ME50グリッドで検出された。平面形は不整円形であり、規模は直径約40㎝、深さは確認面から約15㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

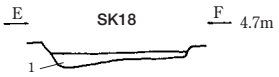
21号土坑（第21図）

ME50グリッドで検出された。平面形は楕円形を呈すると考えられるが、南側が調査区外へ延びている。規模は長軸約35㎝以上、短軸約40㎝以上で、深さは確認面から約23㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。22号土坑と重複するが新旧関係は不明である。

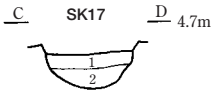




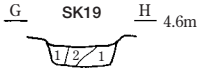
SK16　1　暗灰黄色砂（2.5Y4/2）
　　2　明黄褐色砂（2.5Y6/6）



SK18　1　暗灰黄色砂（2.5Y5/2）

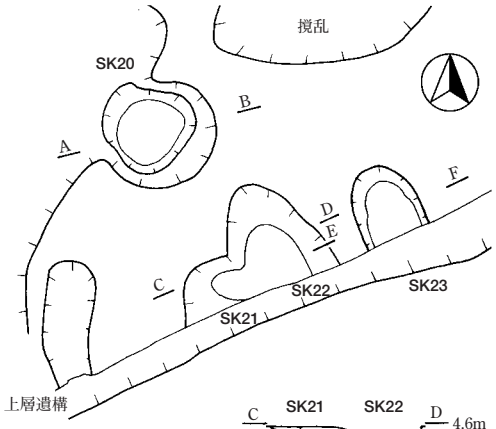


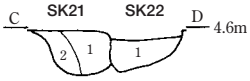
SK17　1　黄褐色砂（2.5Y5/3）に
　　黄褐色砂（2.5Y5/6）混じる
　　2　暗灰黄色砂（2.5Y5/2）



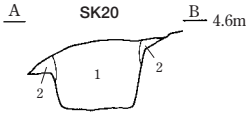
SK19　1　暗褐色砂（2.5Y5/2）
　　2　黄灰色砂（2.5Y5/1）

16～19号土坑

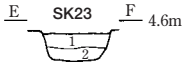




SK21　1　暗灰黄色砂（2.5Y4/2）
　　2　暗灰黄色砂（2.5Y5/2）
SK22　1　暗灰黄色砂（2.5Y4/2）

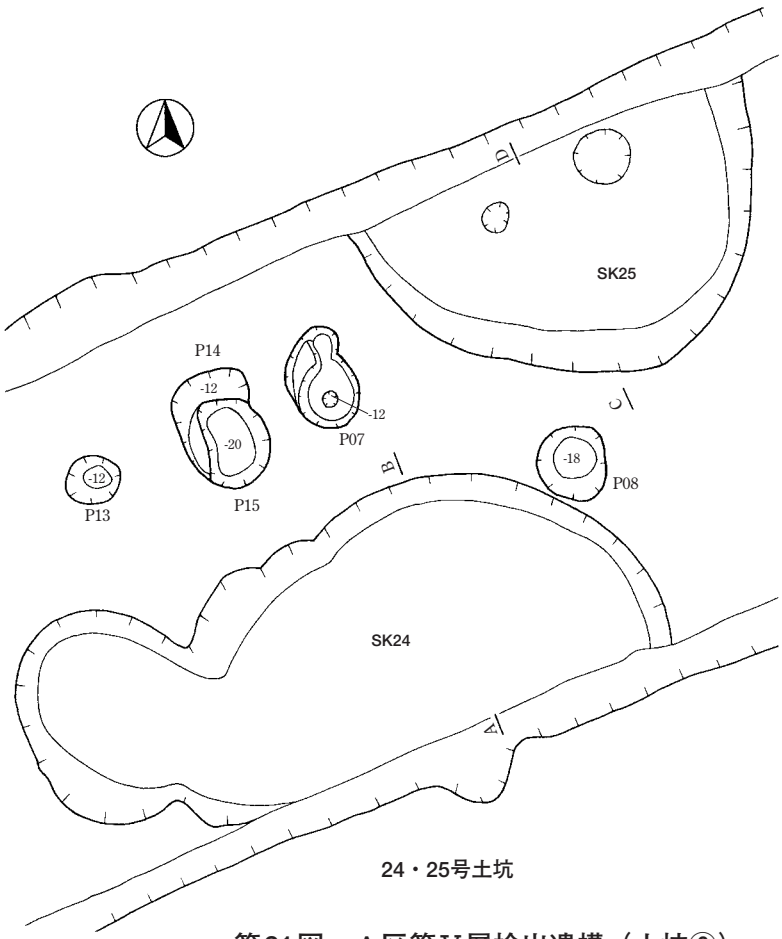


SK20　1　暗褐色砂（2.5Y4/2）
　　2　明黄褐色砂（10YR 7 /6）



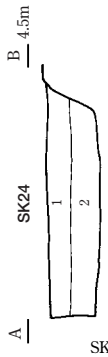
SK23　1　黄灰色砂（2.5Y5/6）
　　2　黄褐色砂（2.5Y5/4）

20・23号土坑

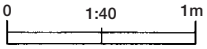


24・25号土坑

SK25
1　黒褐色砂（2.5Y3/1）



SK24
1　暗灰黄色砂（2.5Y4/2）
2　黒褐色砂（2.5Y3/2）



第21図　Ａ区第Ⅴ層検出遺構（土坑②）

22号土坑（第21図）

ME50グリッドで検出された。平面形は楕円形を呈すると考えられるが、南側が調査区外へ延びている。規模は長軸約60㎝以上、短軸約35㎝以上で、深さは確認面から約28㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。21号土坑と重複するが新旧関係は不明である。

23号土坑（第21図）

ME50グリッドで検出された。平面形は楕円形を呈すると考えられるが、南側が調査区外へ延びている。規模は長軸約40㎝以上、短軸40㎝で、深さは確認面から約25㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

24号土坑（第21図、図版９）

MC50グリッドで検出された。平面形は不整形であるが、南側が調査区外へ延びている。規模は長軸約3.5ｍ、短軸1.5ｍ以上で、深さは確認面から約27㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺構廃絶年代は陶磁器の年代から、16世紀後葉と考えられる。

24号土坑出土遺物

土器・陶磁器（第32図51～58、図版16、17）：51～58は埋土出土である。51は瀬戸美濃系陶器端反皿で、見込みに印花文が施されている。52、53は中国産磁器染付碗である。54は肥前系磁器碗で、二次加熱を受けている。55、56は中国産白磁皿で、55は端反皿である。57は中国産磁器染付皿である。58は京都系手づくね成形のかわらけである。 浅黄橙色を呈し、浅身である。

土製品（第38図１、図版22）：１は埋土出土の土錘である。

25号土坑（第21図、図版９）

MC50グリッドで検出された。平面形は円形を呈すると考えられるが、北側が調査区外へ延びる。規模は直径2.3ｍ、深さは確認面から約12㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

26号土坑（第22図、図版10）

MA50グリッドで検出された。平面形は不整形を呈すると考えられるが、南東側が調査区外へ延びる。規模は長軸1.9ｍ以上、短軸1.5ｍ以上、深さは確認面から約32㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

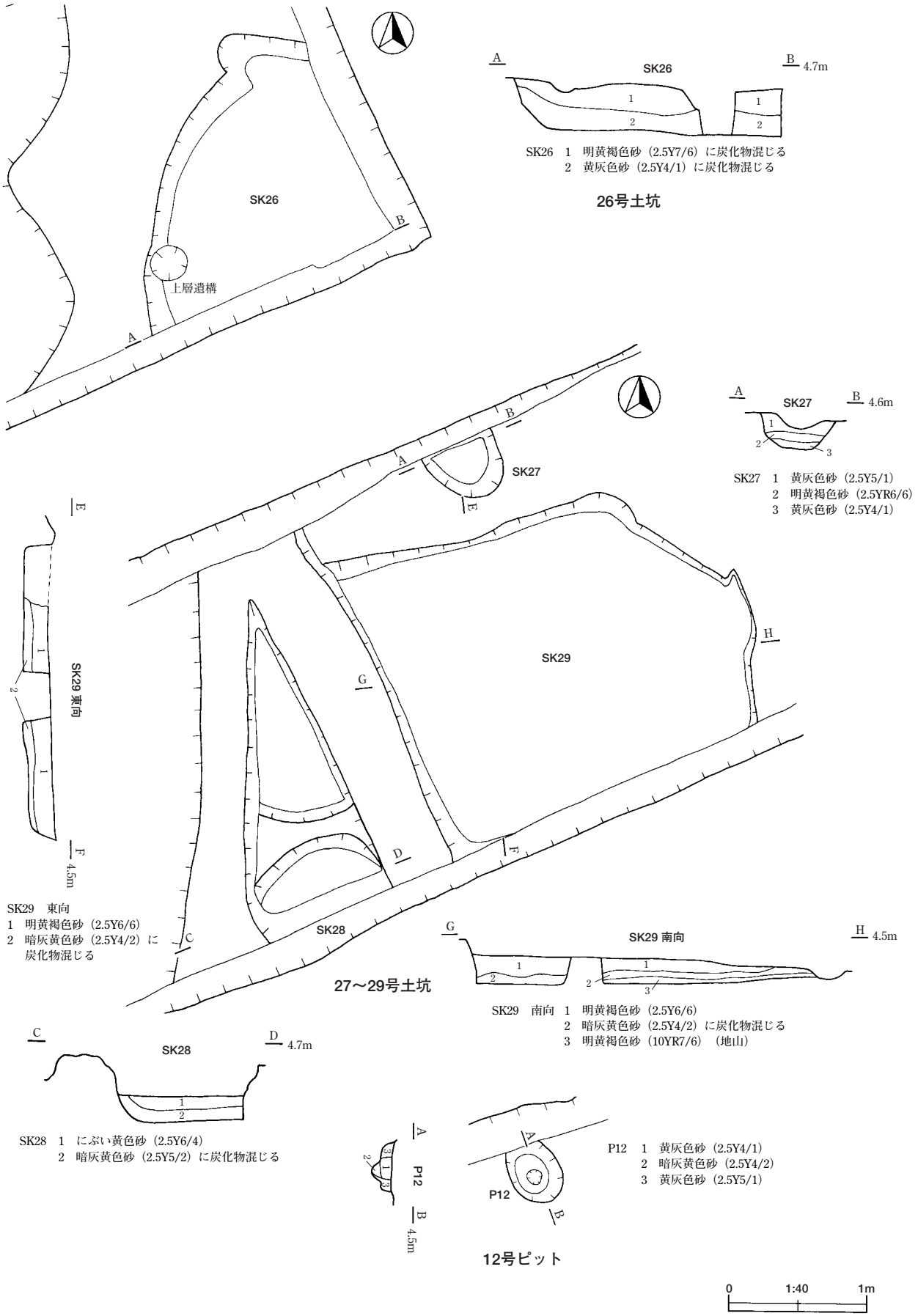
遺構廃絶年代は陶磁器の年代から15世紀後葉～16世紀前葉と考えられる。

26号土坑出土遺物

陶磁器（第32図59、図版17）：59は埋土出土の中国産白磁端反皿である。

27号土坑（第22図）

MF50グリッドで検出された。平面形は楕円形を呈すると考えられるが、北側が調査区外へ延びている。規模は長軸45㎝以上、短軸55㎝以上で、深さは確認面から約27㎝である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。



第22図　Ａ区第Ⅴ層検出遺構（土坑③、ピット）

28号土坑（第22図）

MF50グリッドで検出された。平面形は楕円形を呈すると考えられるが、南側が調査区外へ延びている。規模は長軸90㎝以上、短軸55㎝以上で、深さは確認面から約20㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

29号土坑（第22図、図版10）

MF50グリッドで検出された。平面形は不整形を呈すると考えられ、南側は調査区外へ延びている。規模は長軸3.7ｍ以上、短軸2.0ｍ以上で、深さは確認面から約20㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

遺構廃絶年代は陶磁器の年代から、15世紀後葉～16世紀前葉と考えられる。

29号土坑出土遺物

陶磁器（第32図60、図版17）：60は埋土出土の中国産磁器染付皿で、底部は蛇ノ目凹型高台で、碁笥底を呈する。内面には芭蕉文を染付けている。

金属製品（第38図３、図版22）：３は埋土出土の鉄製の釘である。

ピット12出土遺物

陶磁器（第32図61、図版17）：61は埋土出土の瀬戸美濃系陶器灰釉碗である。

第Ⅴ層出土遺物

土器・陶磁器（第33図62～70、図版17、18）

〔**陶器**〕62～64は陶器である。

（皿類）62は肥前系陶器灰釉溝縁皿で、63は瀬戸美濃系陶器皿である。

（碗類）64は産地不明の陶器鉄釉碗で、外面下半部は無釉である。

〔**磁器**〕65～68は磁器である。

（皿類）65は中国産磁器染付皿で、外面に唐草文を染付けている。66、67は肥前系磁器染付皿である。66は外面に唐草文を、67の外面には唐草文、内面に桐文を染付けている。

（鉢類）68は肥前系磁器染付鉢で、体部外面に「寿」が多数染付けている。

〔**土器**〕69、70は土器である。69は皿形の土器で、70は土風炉である。

陶磁器の年代はおおむね17～18世紀前葉であり、第Ⅴ層はこの時期に造成された整地層と考えられる。

金属製品（第38図４、図版22）

４は鉄製の釘である。

第Ⅰ層、第Ⅱ層および撹乱内で出土した遺物については、出土遺物属性表と実測図のみでの説明とする。

（Ｂ区）

遺構は第Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ層の３面で確認された（第24図）。堀跡（SG01）はⅢ層面から確認されることから別項で触れることとし、以下、各層ごとに検出された遺構・遺物について述べる。

(4) 第Ⅲ層検出の遺構・遺物

遺構は、土坑２基（SK30、31）が検出された（第24図、図版４、10）。遺物は、遺構、陶磁器、金属製品が出土した。

土坑

30号土坑（第23図、図版10）

MG50～MH50グリッドで検出された。平面形は不整形で、規模は長軸約1.5ｍ、短軸80㎝以上で、深さは確認面から約25㎝である。北側が一段低くなっている。それぞれの底面はほぼ平坦で、壁は低い方から上部へは緩く立ち上がり、上部から確認面には急に立ち上がる。

30号土坑出土遺物

陶磁器（第39図109、図版23）：109は埋土出土の産地不明の陶器擂鉢で、内外面に鉄釉を施している。

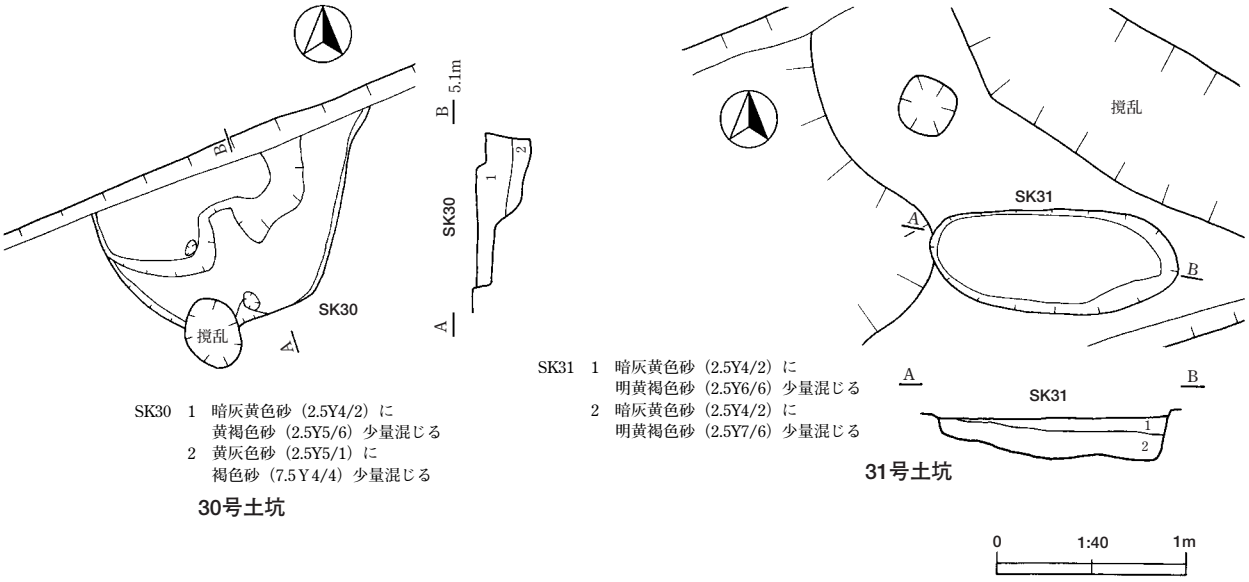
31号土坑（第23図、図版10）

MD50グリッドで検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸約1.3ｍ、短軸55㎝で、深さは確認面から約30㎝である。底面は凹凸があり、壁は急に立ち上がる。

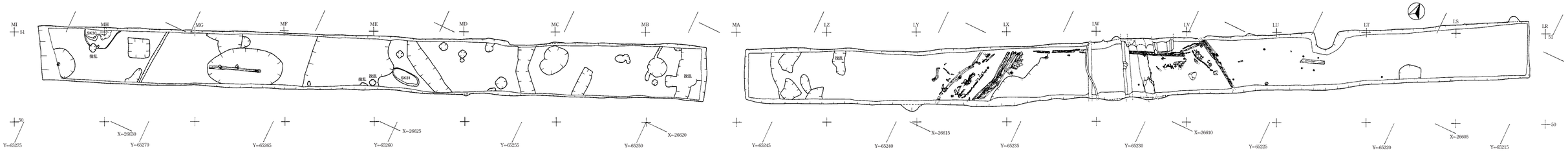
31号土坑出土遺物

陶磁器（第39図110、図版23）：110は産地及び器種も不明の陶器で、口縁部のみ無釉である。

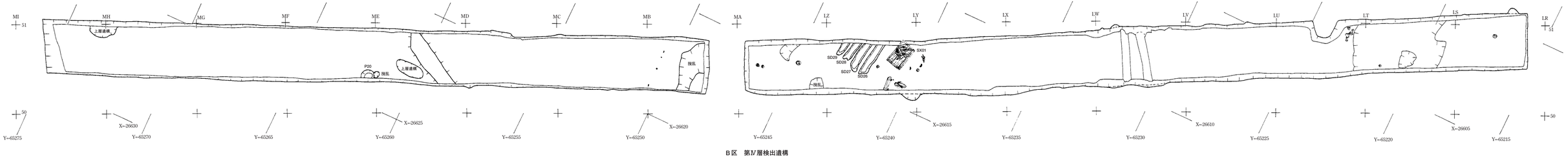
金属製品（第51図６、図版36）：６は鉄製鎌の先端部である。



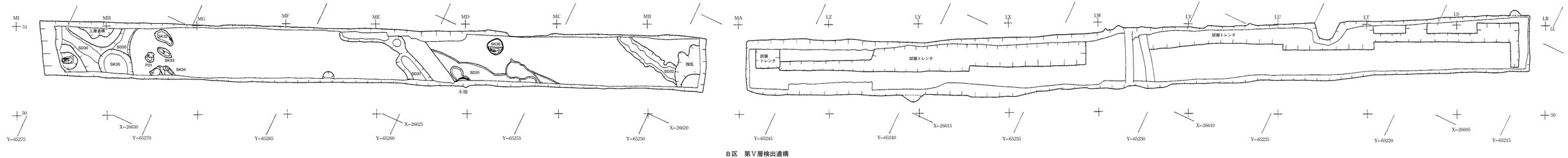
第23図　Ｂ区第Ⅲ層検出遺構（土坑）



Ｂ区　第Ⅲ層検出遺構



Ｂ区　第Ⅳ層検出遺構



Ｂ区　第Ⅴ層検出遺構

第24図　Ｂ区遺構全体図

0　1:100　4m

第Ⅲ層出土遺物

土器・陶磁器　（第39、40図、図版23、24）

［**陶器**］111～115は陶器である。

（皿類）111は瀬戸美濃系陶器皿で、内外面に銅緑釉が施されている。

（擂鉢）112、113は産地不明の擂鉢である。いずれも内外面に鉄釉を施している。

（鉢類）114は産地不明の片口である。

（その他）115は産地不明の鍋で、外面に細かい沈線で文様を作り出し、内外面に鉄釉を施している。

［**磁器**］116～127は磁器である。

（碗類）116、117は肥前系磁器染付碗である。116の外面には蛸唐草文を、内面には四方襷文を染付けている。117の内外面には網目文を染付けている。118は産地不明の磁器染付碗である。119は産地不明の磁器染付端反碗で、外面には海浜文と考えられる風景文様を染付けている。

（皿類）120～122は肥前系磁器染付皿で、120の内面に二重格子文を染付けている。121は蛇ノ目凹形高台で内面に菊文を染付けている。122は内面に松竹梅文を染付けている。123は産地不明の磁器白磁皿で型打ち成形である。124は肥前系磁器と考えられる染付皿である。見込みには山水文で風景文様を染付けている。体部に白濁したガラス質の焼継が認められ、裏底には焼継銘が認められる。125は産地不明の磁器染付皿で、西洋コバルトによる型紙刷で文様を染付けている。

（蓋類）126は産地不明の磁器染付土瓶蓋である。

（その他）127は肥前系磁器染付小坏または仏飯器で、外面に蛸唐草文を染付けている。

陶磁器の年代はおおむね19世紀代であり、第Ⅲ層はこの時期に造成された整地層と考えられる。

（５）第Ⅳ層検出の遺構・遺物

遺構からは、溝４基（SD26～29）、箱状遺構１基が検出された（第24、25図、図版10）。遺物は、土器、陶器類、土製品、金属製品が出土した。

溝跡

26号溝跡（第25図、図版10）

LY50グリッドで検出された。南北方向の溝で、規模は長さが1.7ｍ確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約９度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約45㎝、深さは確認面から約13㎝で、断面は鍋底状を呈する。

27号溝跡（第25図、図版10）

LY50グリッドで検出された。南北方向の溝で、規模は長さが1.4ｍ確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約10度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約30㎝、深さは確認面から約12㎝で、断面は鍋底状を呈する。

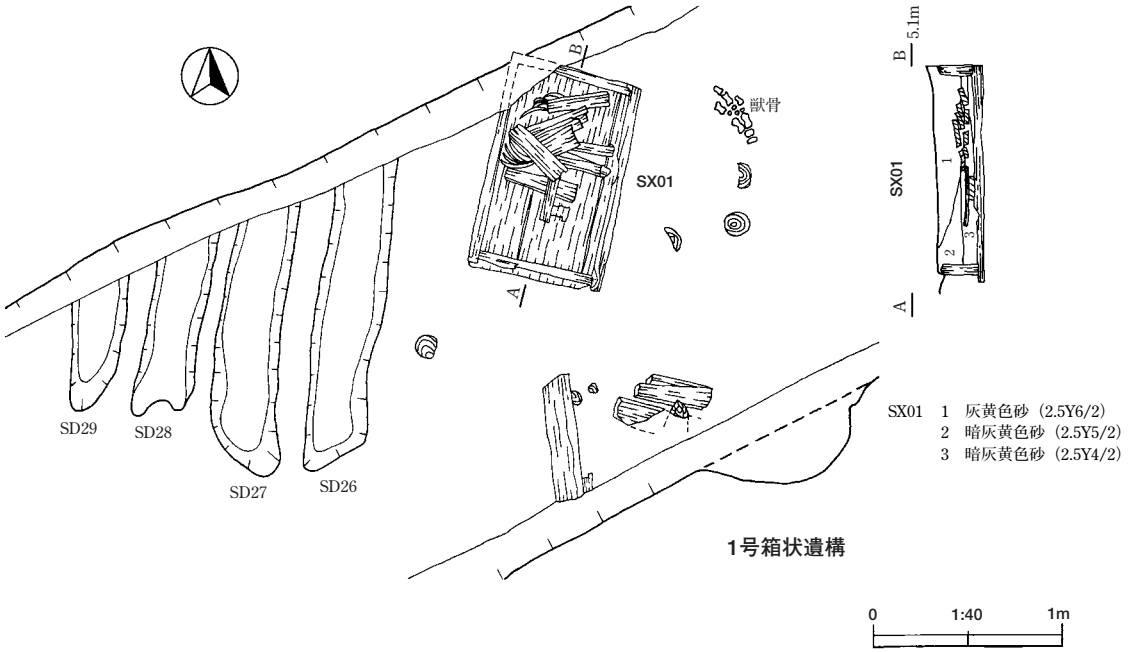
28号溝跡（第25図、図版10）

LY50グリッドで検出された。南北方向の溝で、規模は長さが80㎝確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約10度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約30㎝、深さは確認面から約11㎝で、

断面は鍋底状を呈する。

29号溝跡（第25図、図版10）

LY50グリッドで検出された。南北方向の溝で、規模は長さが60㎝確認され、北側は調査区外へ延びる。方向は北で約７度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約28㎝、深さは確認面から約14㎝で、断面は鍋底状を呈する。



第25図　Ｂ区第Ⅳ層検出遺構（溝跡、箱状遺構）

箱状遺構（第25図、図版10）

LY50グリッドで検出された。72.0㎝×112.5㎝の規模で、26～29号溝跡の隣に埋設された状態で確認された。

第Ⅳ層出土遺物

土器・陶磁器（第40図、図版24）

［**陶器**］128は産地不明の陶器土瓶蓋である。

［**磁器**］129～138は磁器である。

（碗類）129は肥前系磁器碗で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施している。130は肥前系磁器染付碗で、外面に草花文を染付けている。131は産地不明の磁器碗で、貫入が多く認められる。132、133は産地不明の磁器染付端反碗である。内面には崩れた形の雷文を染付けている。

（皿類）134～136は肥前系磁器染付皿で、134は内面にコンニャク印判による桐文を染付けている。135は二次加熱を受けている。136は内面に雪輪文を染付けている。

（鉢類）137は肥前系磁器白磁鉢である。

（蓋類）138は産地不明の磁器染付蓋である。

陶磁器の年代はおおむね18世紀～19世紀前半であり、第Ⅳ層はこの時期に造成された整地層と考えられる。

土製品（第51図３、図版36）

３は土錘である。

金属製品（第51図７、８、図版36）

７は鉄製の釘である。８は幅1.3㎝、厚さ３㎜の板状の鉄製品である。

（６）第Ⅴ層検出の遺物

遺構は溝跡３条（SD30～32）、土坑５基（SK32～36）が検出された（第23図、図版５、10～12）。遺物は遺構内および第Ⅴ層から、土器・陶磁器、金属製品が出土した。

溝跡

30号溝跡（第26図、図版11）

MH50グリッドで検出された。東西方向の溝で、規模は長さが4.2ｍ確認され、西側は調査区外へ延びる。方向は北で約78度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約70㎝、深さは確認面から約15㎝で、断面は鍋底状を呈する。

30号溝跡出土遺物

陶磁器（第41図139、140、図版25）：139、140は埋土出土である。139は産地不明の擂鉢である。内外面に鉄釉を施している。140は肥前系磁器と考えられる染付蓋で、内面に雷文を染付けている。

31号溝跡（第27図、図版11）

MC～MD50グリッドで検出された。東西方向の溝で、規模は長さが9.8ｍ確認され、北側および南側は調査区外へ延びる。方向は北で約96度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約70㎝、深さは確認面から約10㎝で、断面は鍋底状を呈する。

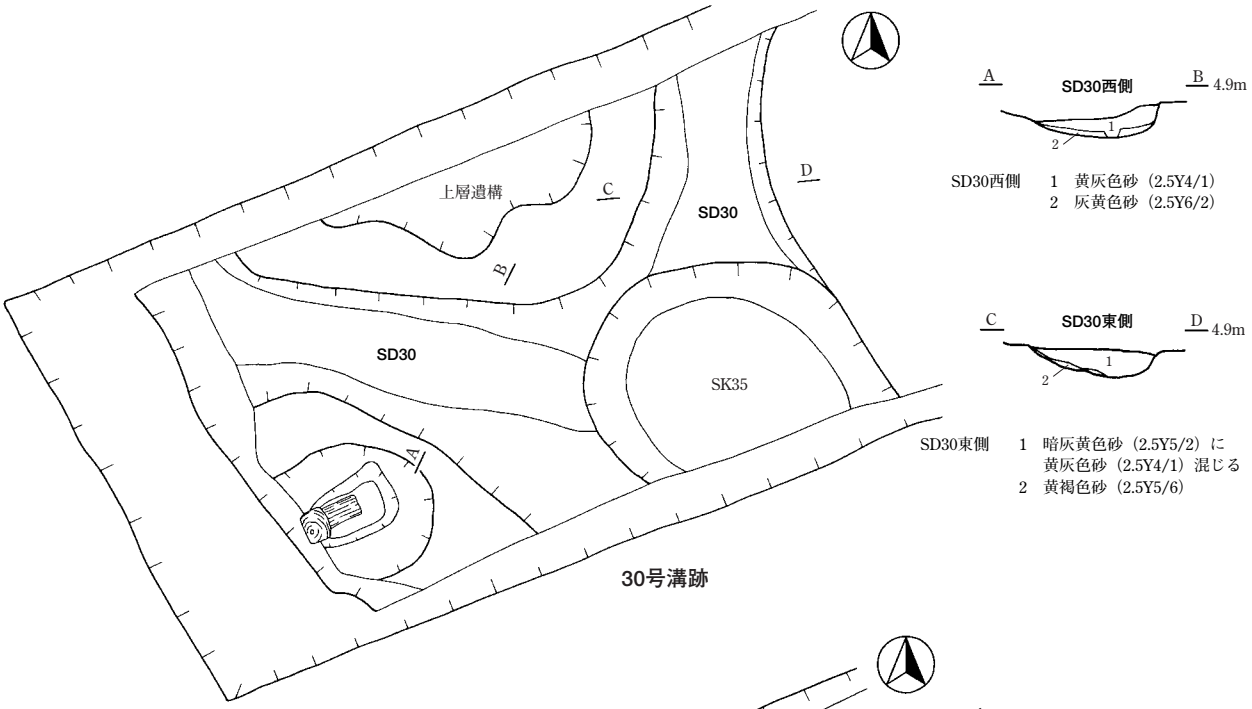
31号溝跡出土遺物

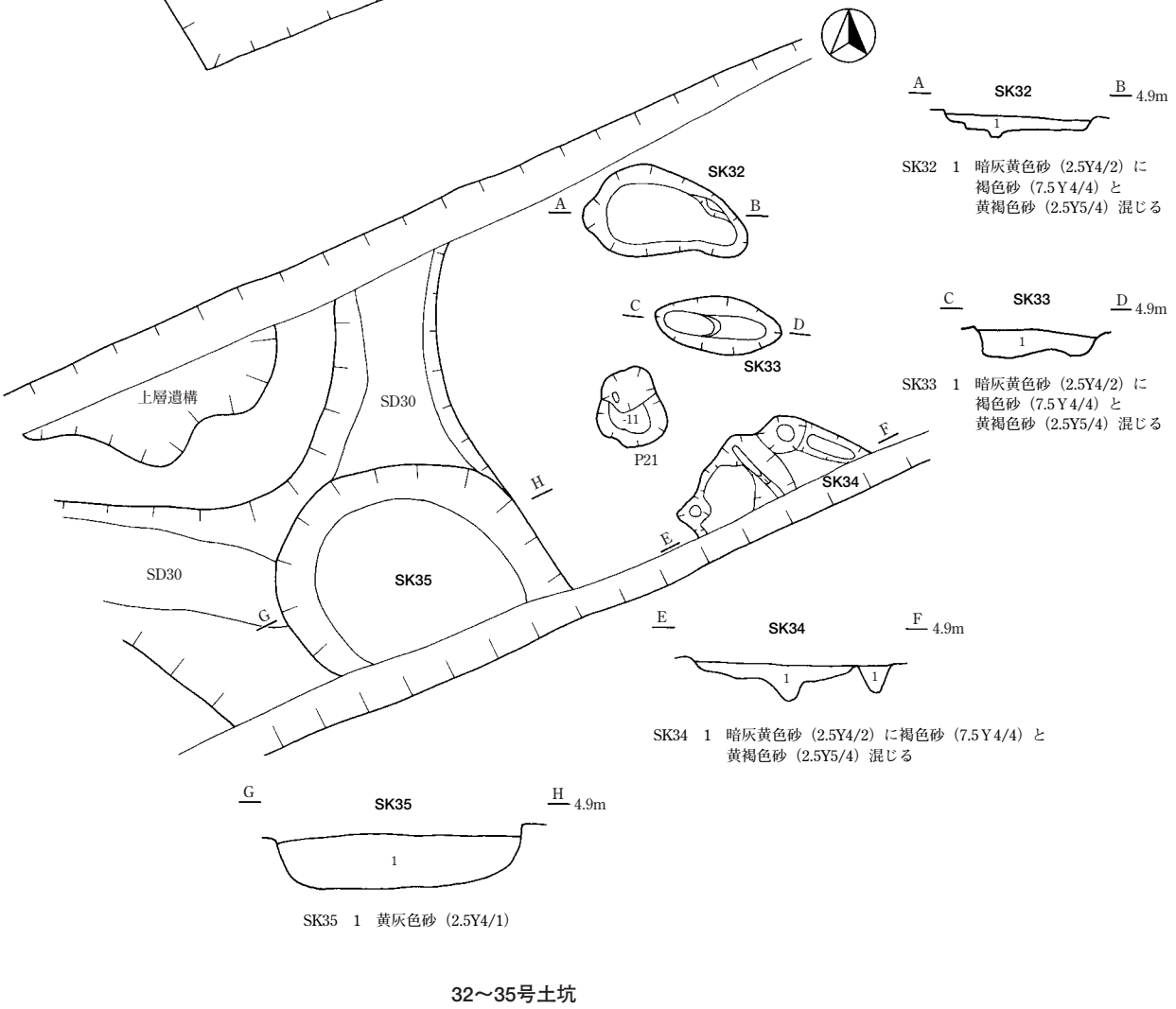
陶磁器（第41図141,142、図版25）：141、142は埋土出土である。141は産地不明の土瓶で、体部外面下端に粘土粒が認められる。142は産地不明の磁器染付小坏である。

土器（第41図143、144、図版26）：143、144は埋土出土である。いずれも土師質の火鉢と考えられ、外面は指によるナデを施している。

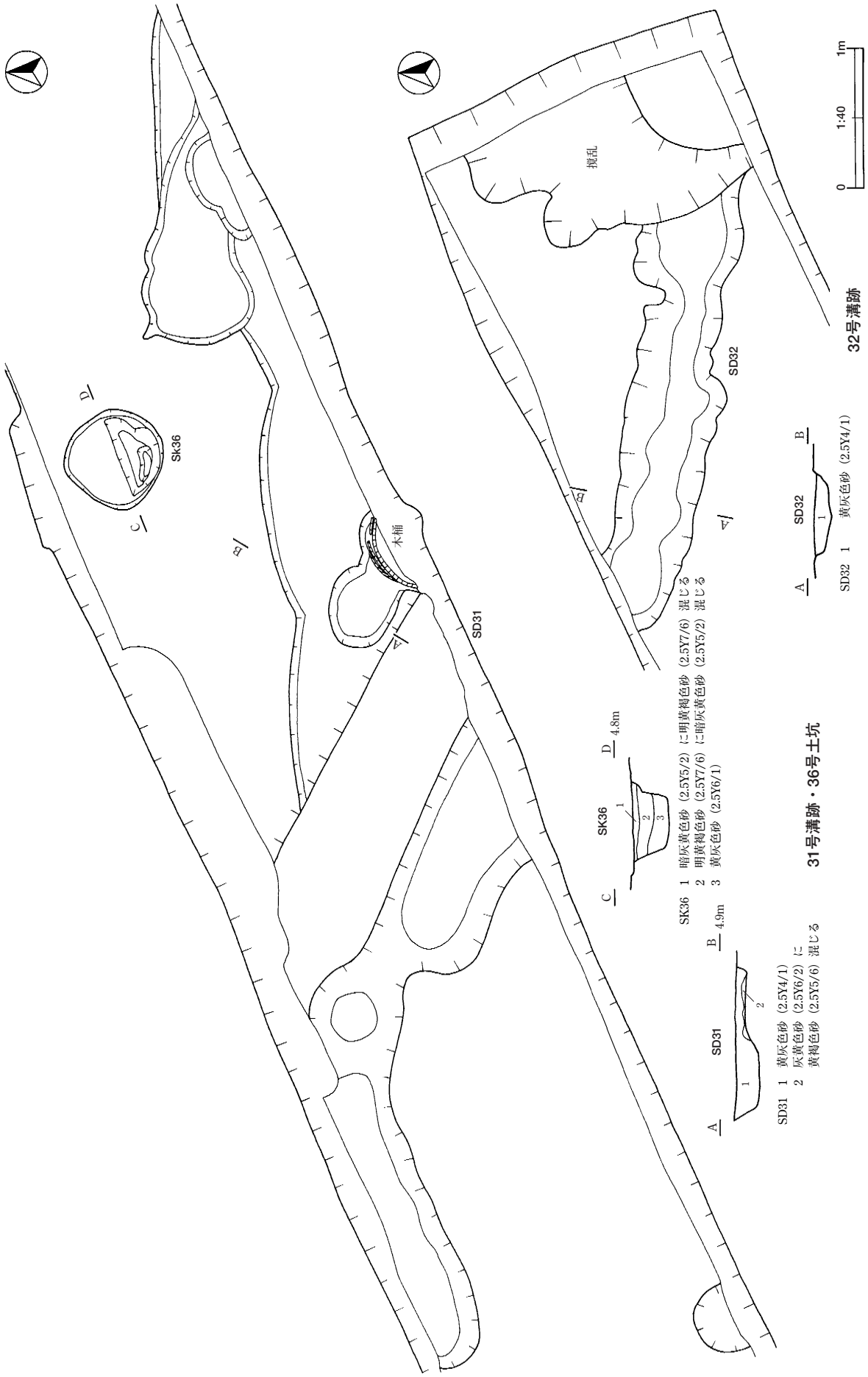
32号溝跡（第27図、図版11）

MA～MB50グリッドで検出された。東西方向の溝で、規模は長さが2.8ｍ確認され、西側は調査区外へ延び、南側は撹乱で削平されている。方向は北で約79度西へ振れている。溝の側壁間の幅は約65㎝、深さは確認面から約12㎝で、断面は鍋底状を呈する。





第26図　Ｂ区第Ⅴ層検出遺構（溝跡①、土坑①）



第27図　Ｂ区第Ⅴ層検出遺構（溝跡②、土坑②）

土坑

32号土坑（第26図、図版11）

MG50グリッドで検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸約90㎝、短軸約45㎝で、深さは確認面から約10㎝である。底面は中央部が窪んでおり、壁は緩やかに立ち上がる。

33号土坑（第26図）

MG50グリッドで検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸約70㎝、短軸約30㎝で、深さは確認面から約15㎝である。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。

34号土坑（第26図、図版11）

MG50グリッドで検出された。平面形は不整形で、規模は長軸約90㎝、短軸約50㎝以上で、深さは確認面から約10㎝である。底面の中央部が窪んでおり、壁は緩やかに立ち上がる。

35号土坑（第26図、図版11）

MG50グリッドで検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸約1.4ｍ以上、短軸約1.3ｍで、深さは確認面から約25㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。30号溝跡と重複し、これよりも新しい。

36号土坑（第27図、図版12）

MC50グリッドで検出された。平面形は円形で、規模は直径70㎝で、深さは確認面から約25㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

第Ⅴ層出土遺物

陶磁器（第41図、図版26）

145～147は磁器である。

（碗類）145は肥前系磁器染付碗で、外面に青磁釉を施している。146は産地不明の磁器染付端反碗で、口唇部に口紅を施している。

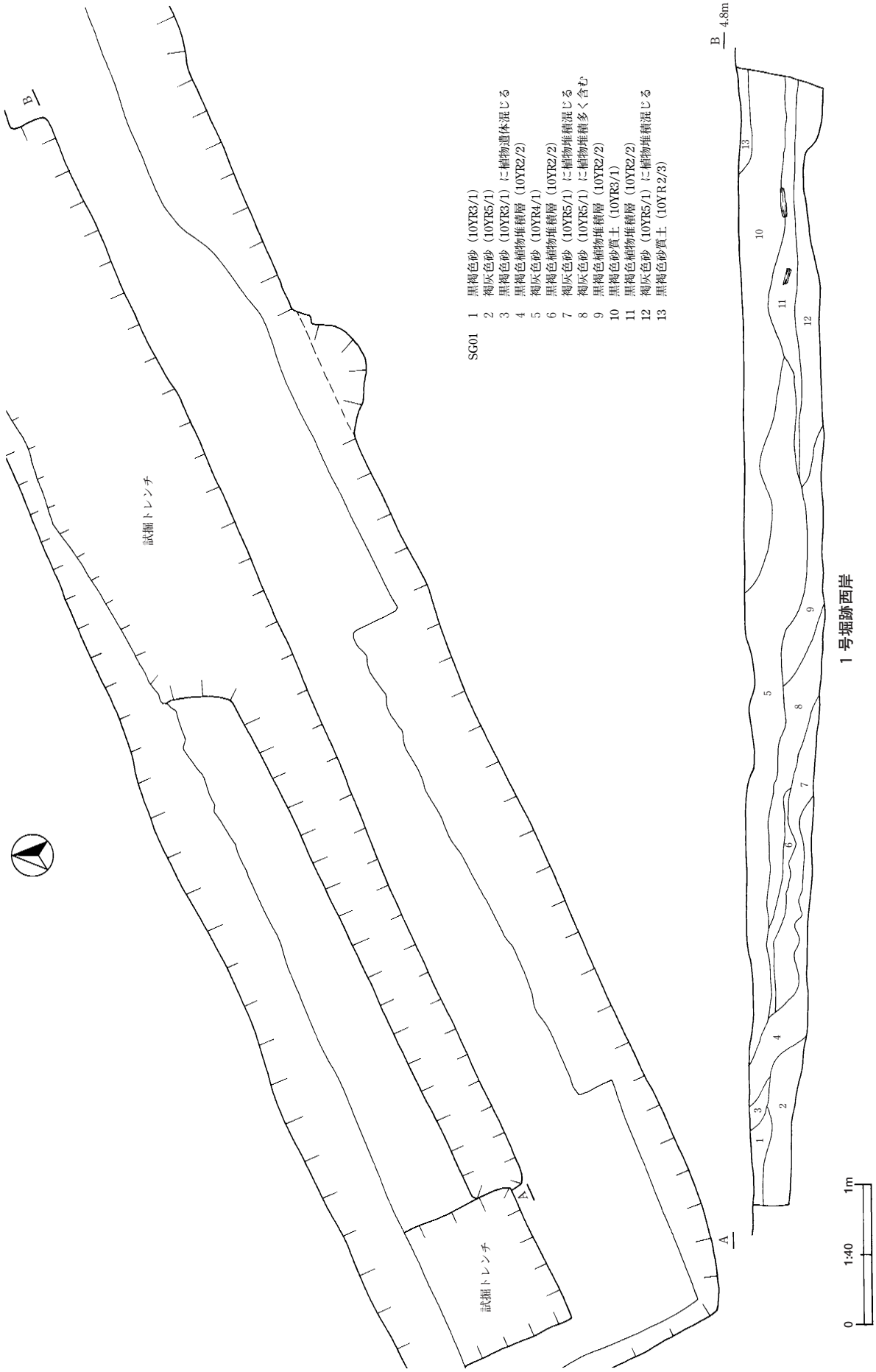
（蓋類）147は肥前系磁器染付合子蓋である。外面には色絵付けされていたが、二次加熱を受けた痕跡のみがみられる。

陶磁器の年代はおおむね18世紀であるが、出土遺物が少量のため、造成時期は不明である。

金属製品（第51図９、図版36）

９は鉄製の折釘である。

第Ⅰ層、第Ⅱ層および撹乱内で出土した遺物については、出土遺物属性表と実測図のみでの説明とする。



第28図　B区　LX～LZグリッド付近（１号堀跡西岸）

（７）堀跡（第24、28図、図版４～６、12）

Ｂ区LR～LZ50グリッドに及ぶ範囲で第Ⅰ層を除去して検出した。詳細については後述し、ここでは堀内の埋土基本層序（第13図）と出土遺物のみを記述する。

Ⅰ層　上部ににぶい黄褐色砂（10YR5/3）に褐色砂（10YR4/6）と砂利が混じる。下部は黄褐色砂（10YR5/6）に一部鉄分を含む

Ⅱ層　上部に植物堆積物を含む黒褐色砂質土（10YR2/3）、その下に黒褐色植物堆積層（10YR3/1）、下部に灰黄褐色砂質土（10YR5/2）が一部混じる浅黄色砂（2.5Y7/4）が堆積する。

Ⅲ層　上部に黒褐色植物堆積層（10YR3/1）、下部に黒褐色植物堆積層（10YR3/1）が少量混じる灰黄色砂（2.5Y6/2）が堆積する。

Ⅳ層　上部に黒褐色植物堆積層（10YR3/1）、下部に黒褐色植物堆積層（10YR3/1）が少量混じる灰黄色砂（2.5Y6/2）が堆積する。

Ⅴ層　上部に黒褐色植物堆積層（10YR3/1）、下部に黒褐色植物堆積層（10YR3/1）が少量混じる灰黄色砂（2.5Y6/2）

Ⅲ層以下は、植物堆積層と砂層の互層であり、底部に砂が堆積して少しずつ浅くなっていったと考えられる。

Ⅰ層出土遺物

陶磁器（第41図、図版26）

148～153は磁器である。

（碗類）148は瀬戸美濃系磁器小碗である。

（皿類）149は肥前系磁器染付皿で、内面に雷文を染付けている。150～152は産地不明の磁器染付皿で、内面に西洋コバルトで文様を施している。150の底部は蛇ノ目凹形高台である。151は銅版刷で文様を染付けている。152は産地不明の磁器染付皿である。

（蓋類）153は産地不明の磁器染付蓋である。外面には四方襷文および山水文が、内面に雷文を染付けている。

木製品（第47図、図版34）

１は一木下駄の丸型の刳り下駄、２は一木下駄の角型の連歯下駄である。３は曲物の蓋で、両面に赤漆を塗布している。

骨製品（第52図、図版36）

１は動物の骨を加工したもので、穴を１カ所開けている。用途及び動物の種類は不明である。

Ⅱ層出土遺物

土器・陶磁器（第42～44図、図版27～38）

［**陶器**］154～157は陶器である。

（鉢類）154、155は寺内窯産陶器鉢で、内外面に鉄釉を施し、上からなまこ釉を施している。

（瓶類）156は寺内窯産陶器土瓶で、化粧掛け後、文様を染付けている。

（壺類）157は産地不明の陶器小壺で、内外面に鉄釉を施した後、内面口唇部から外面体部上半にあ

め釉を施している。

［**磁器**］158～187は磁器である。

（碗類）158～166は肥前系磁器染付碗である。158は外面に網目文を染付けている。159は外面にコンニャク印判による桐文を染付けている。160は見込みの二重圏文の中にコンニャク印判による五弁花を、体部外面に草木文を染付けている。裏底に渦福の銘がある。161は見込みの二重圏文の中に菊花文を染付け、焼継痕がある。163は内外面に菊と氷裂菊花文を染付けている。164は内面に雷文、外面には花文を染付けている。165は見込みに麒麟を、外面に草花文、高台部外面に櫛目文を染付けている。裏底に銘があるが判読不能である。焼継痕がある。166は内面上部に雷文、外面上部に四方襷文と竹文を染付けている。167は産地不明の磁器染付碗である。外面体部下端に「大□」の焼継銘がある。

（皿類）168～174は肥前系磁器染付皿である。168は折縁皿で見込みに梅文を染付けている。169は蛇の目釉剥ぎを施している。170は外面に唐草文を染付けている。171は外面に唐草文、内面に松文を染付けている。172は外面に唐草文、内面に竹文を染付けている。173は見込みに梅文、二重圏文の外側に牡丹唐草文を染付けている。174は見込みに松竹梅文を染付けている。175は肥前系磁器色絵皿で、内面の左右に、鶴・亀を中央に熨斗を色絵付けしている。176～179は産地不明の磁器染付皿である。176は見込みに半円を利用したもの、二重圏文外側に笹文を染付けている。底部は蛇ノ目凹形高台となっている。177は輪花皿で見込みに型紙による龍を、さらに体部には植物葉を染付けている。178は見込みに草花文を染付けている。底部は蛇ノ目凹形高台となっている。179は型紙刷りで山水文を染付けている。焼継痕がある。

（鉢類）180は肥前系磁器染付鉢で、体部内面の口唇部から上面に四方襷文を、下部に芙蓉文を染付けている。焼継痕がある。181は産地不明の磁器染付鉢である。内面上部に雷文を染付けている。

（蓋類）182は産地不明の磁器染付蓋である。内面に雷文を染付けている。183は産地不明の磁器染付蓋である。外面には型紙刷で稚児を配した文様を染付けている。

（坏類）184は産地不明の磁器染付小坏で、見込みに花文を染付けている。

（段重類）185は肥前系磁器染付段重である。186は産地不明の磁器染付段重で、外面に丸文を染付けている。

（香炉類）187は肥前系磁器白磁香炉である。底部は蛇ノ目凹形高台となっている。

（土器）188は瓦質土器火鉢である。内面には煤状の黒色付着物が認められ、外面下半に木葉痕が認められる。

木製品（第47～49図、図版34）

４、５は漆器椀である。４の内面には赤漆、外面には黒漆を塗布している。５は黒漆が両面に塗布されている。６～15は箸である。16、17は桶の蓋で、いずれも木釘で板を継いで使用している。

18は蓋で、取手の痕跡が認められる。19、20は樽の蓋で「さ」、「あさ□」の焼印がある。21、22は一木下駄の角型の連歯下駄である。23は浮子と考えられる。24、25は用途不明木製品である。

土製品（第51図４、５、図版36）

４は土師質の土錘である。５は陶質の土錘で、全面に褐色の釉薬を施している。

銭貨（第52図、図版36）

１、２は銅製の寛永通寶である。銭文の書体等からいずれも新寛永（初鋳1697年）の分類に該当する。

Ⅲ層出土遺物

土器・陶磁器（第44、45図、図版30～32）

［**陶器**］189～192は陶器である。

（皿類）189は肥前系灰釉陶器皿で、見込みには砂目積み痕が認められる。190は瀬戸美濃系陶器緑釉皿である。

（鉢類）191は肥前系陶器刷毛目鉢である。内面に白化粧土で波状と直線の刷毛目文を施し、その上から内外面の口縁部から体部上半に鉄釉を施している。192は産地不明の陶器灯明皿で、鉄釉を施している。ロクロ成形で底部の切り離しは回転糸切りである。

［**磁器**］193～201は磁器である。

（碗類）193～196は肥前系磁器染付碗である。193は見込みに蝶を染付け、漆継痕がある。195は外面に矢羽根文を染付けている。196は内外面とも帯文を染付けている。197は産地不明の磁器端反碗で、内面に雷文、外面には牡丹文を染付けている。

（皿類）198は肥前系磁器染付皿である。見込みに手書き五弁花文を染付けている。蛇ノ目釉剥ぎを施している。

（蓋類）199は肥前系磁器染付蓋である。見込みに「永楽年製」銘を染付けている。焼継痕がある。

（坏類）200は産地不明の磁器染付小坏で、口唇部に口紅を施している。焼継痕があり、「イサ」焼継銘がある。

（その他）201は肥前系磁器仏飯器の脚部で、乳白色の釉が施されている。

木製品（第50図、図版35）

26は漆器皿で、見込みに赤漆、高台内に黒漆、その他の部分には飴色の漆を塗布している。27は箸である。28は杭である。

Ⅳ層出土遺物

陶磁器（第45図、図版32）

［**陶器**］202､203は陶器である。

（皿類）202は肥前系陶器灰釉溝縁皿で、見込みには砂目積み痕がある。

（香炉）203は瀬戸美濃系陶器緑釉香炉である。

［**磁器**］204～206は磁器である。

（碗類）204は肥前系磁器染付端反碗である。

（皿類）205は瀬戸美濃系磁器染付皿で、見込みに草花文を染付けている。

（仏飯器）206は肥前系磁器染付仏飯器で、格子地半菊文を染付けている。

土製品（第51図、図版36）

６は土師質の土錘である。

木製品（第50図、図版35）

29､30は用途不明の木製品である。

Ⅴ層出土遺物

陶磁器（第45図、図版32）

［陶器］207は陶器である。

（その他）207は窯道具の脚付ハマで、脚が４カ所ある。

［磁器］208は磁器である。

（香炉）208は肥前系青磁香炉で、外面及び内面口縁部付近に釉薬を施している。

木製品（第50図、図版35）

31は番号札と考えられる。墨で「十番」の字が書かれており、下部に釘穴がある。

（８）動物遺存体

上述の遺物以外に、Ｂ区第Ⅳ層LY50グリッド箱状遺構の周辺で、イルカの左ヒレと考えられる獣骨が出土した。長さ35㎝、幅13㎝、厚さ６㎝で体部からヒレの部分を切断したときの切痕がある。（図版10、36）

（９）出土遺物属性表および実測図

表３～16、第29～52図に出土遺物の属性表および実測図を掲載した。表３～16の凡例は下記のとおりである。

凡例

1　土器・陶磁器、木製品、金属製品、銭貨、土製品、石製品、瓦、骨製品の基本分類ごとに番号を付与した。

2　図番号は、実測図の番号と一致している。

3　土器・陶磁器について、分類では土器・陶器・磁器に分類を行った。また、施釉や絵付けにより、染付・青磁・白磁・色絵等の細分が可能であり、「特徴」欄に記載した。

4　土器・陶磁器では、国外産の貿易陶磁については、大きく中国系等の国別を示し、国内産は肥前系、瀬戸美濃系、京信楽系など主要な大規模生産地（地方）の製品を主とし、それに直接技術的影響を受けた周辺及び地方の窯の製品は「系」として示した。また、より具体的に窯を限定できるものについては、秋田県の在地窯である寺内窯のように窯名を記述した。

5　土器・陶磁器の年代については、各生産地における編年区分を用いるとともに、より年代を限定できるものについては、西暦年代で示した。また、窯を限定できるものについては、生産・操業期間に基づき年代を示した。

表３　土器・陶磁器属性一覧①

番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	特徴
1	第29図	A	Ⅲ層	LT50	陶器	碗	不明		被熱あり
2	第29図	A	Ⅲ層	MG50	陶器	皿	肥前系	1610－30	灰釉溝縁皿
3	第29図	A	Ⅲ層	LV50	陶器	皿	京信楽系	18後－19前	
4	第29図	A	Ⅲ層	LZ50	陶器	皿	不明		
5	第29図	A	Ⅲ層	LT50	陶器	火入	不明		
6	第29図	A	Ⅲ層	LT50	陶器	甕	不明	18世紀	
7	第29図	A	Ⅲ層	MG50	陶器	土瓶	不明	19世紀中葉	
8	第29図	A	Ⅲ層	MG50	陶器	擂鉢	不明		無釉
9	第29図	A	Ⅲ層	LV50	磁器	碗	肥前系	19世紀中葉	染付
10	第29図	A	Ⅲ層	LZ50	磁器	碗	肥前系	17世紀中葉	染付
11	第29図	A	Ⅲ層	MF50	磁器	碗	肥前系	17世紀中葉	染付
12	第29図	A	Ⅲ層	LZ50	磁器	碗	不明	20世紀	染付、型紙刷り
13	第29図	A	Ⅲ層	LZ50	磁器	碗	不明	19世紀中葉	染付
14	第29図	A	Ⅲ層	MA50	磁器	碗	不明	19世紀中葉	染付
15	第29図	A	Ⅲ層	MF50	磁器	碗	不明	19世紀中葉	染付
16	第29図	A	Ⅲ層	MB50	磁器	皿	肥前系	17後－18前	染付、蛇ノ目釉剥ぎ
17	第30図	A	Ⅲ層	MB50	磁器	皿	肥前系	18世紀後期	染付、外青磁、コンニャク印判の五弁花
18	第30図	A	Ⅲ層	LT50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付
19	第30図	A	Ⅲ層	LZ50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付
20	第30図	A	Ⅲ層	MC50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付
21	第30図	A	Ⅲ層	MD50	磁器	変形皿	肥前系	18世紀	白磁、押し型成形
22	第30図	A	Ⅲ層	LT50	磁器	皿	不明	大正以降	型紙刷り、西洋コバルト
23	第30図	A	Ⅲ層	LT50	磁器	皿	不明	19世紀前期	染付
24	第30図	A	Ⅲ層	LZ50	磁器	皿	不明	19世紀中葉	染付
25	第30図	A	Ⅲ層	MG50	磁器	皿	中国産	16世紀	青磁
26	第30図	A	Ⅲ層	MG50	磁器	小坏	肥前系	18世紀後期	染付
27	第30図	A	Ⅲ層	MD50	磁器	小坏	不明	19世紀中葉	白磁、蛇ノ目釉剥ぎ
28	第30図	A	Ⅲ層	MA50	磁器	段重	肥前系	18世紀	染付
29	第30図	A	Ⅲ層	MD50	磁器	徳利	不明	19世紀中葉	染付
30	第31図	A	SD01埋土・Ⅳ層		磁器	皿	肥前系	1630－40	染付
31	第31図	A	SD12埋土・Ⅳ層		磁器	皿	不明	19世紀中葉	白磁
32	第31図	A	SD18埋土・Ⅳ層		陶器	土瓶	不明	19世紀中葉	内面鉄釉、外面灰釉
33	第31図	A	SD18埋土・Ⅳ層		磁器	碗	不明	19世紀前期	染付
34	第31図	A	SD18埋土・Ⅳ層		磁器	碗	不明	19世紀中葉	染付
35	第31図	A	SD18埋土・Ⅳ層		磁器	皿	肥前系	19世紀前期	染付
36	第31図	A	SD18埋土・Ⅳ層		磁器	急須、土瓶	不明	19世紀中葉	染付
37	第31図	A	SD25埋土・Ⅳ層		磁器	碗	肥前系	17世紀後半	染付
38	第31図	A	SK03埋土・Ⅳ層		磁器	皿	不明		染付
39	第31図	A	SK04埋土・Ⅳ層		磁器	碗	不明	20世紀	西洋コバルト染付
40	第31図	A	SK04埋土・Ⅳ層		陶器	碗	不明		
41	第31図	A	Ⅳ層	MA50	陶器	皿	瀬戸美濃系	17世紀前期	
42	第31図	A	Ⅳ層	MC50	土器	皿	不明		型づくりかわらけ
43	第31図	A	Ⅳ層	MC50	陶器	擂鉢	不明		内外面鉄釉
44	第31図	A	Ⅳ層	MC50	磁器	碗	肥前系	17世紀中葉	染付
45	第31図	A	Ⅳ層	LT50	磁器	碗	肥前系	17世紀後期	染付
46	第31図	A	Ⅳ層	LZ50	磁器	皿	中国産	16世紀中葉	染付碗E群、「洪武年造」銘
47	第32図	A	Ⅳ層	LV50	磁器	皿	肥前系	18後－19前	染付
48	第32図	A	Ⅳ層	LY50	磁器	皿	肥前系	18後－19前	染付、高台内福（手書き） コンニャク印判の五弁花
49	第32図	A	Ⅳ層	LV50	磁器	皿	肥前系	18世紀後期	染付、「富貴長春」銘
50	第32図	A	Ⅳ層	LZ50	土器	皿	不明		京都系手づくねかわらけ 口縁に煤あり
51	第32図	A	SK24埋土・Ⅴ層		陶器	皿	瀬戸美濃系	1480－1530	端反皿、大窯1期
52	第32図	A	SK24埋土・Ⅴ層		磁器	碗	中国産	不明	染付
53	第32図	A	SK24埋土・Ⅴ層		磁器	碗	中国産	16世紀中葉	染付碗E群
54	第32図	A	SK24埋土・Ⅴ層		磁器	碗	肥前系	17世紀後期	被熱あり
55	第32図	A	SK24埋土・Ⅴ層		磁器	皿	中国産	15後－１６前	白磁皿C群、端反皿
56	第32図	A	SK24埋土・Ⅴ層		磁器	皿	中国産	16世紀後期	白磁

表４　土器・陶磁器属性一覧②

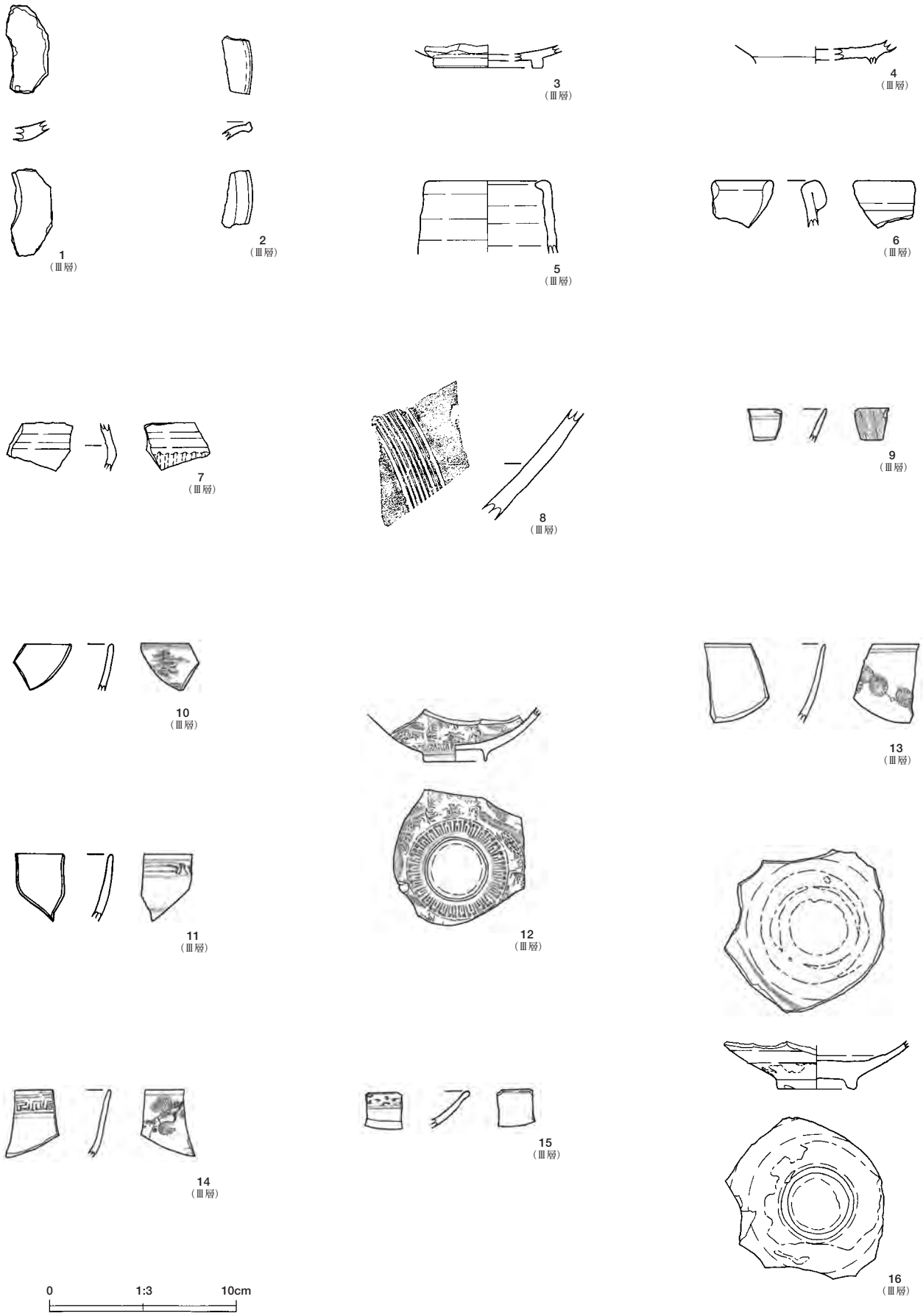
番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	特徴
57	第32図	A	SK24埋土・Ⅴ層		磁器	皿	中国産		染付
58	第32図	A	SK24埋土・Ⅴ層		土器	皿	不明	16世紀	京都系手づくねかわらけ
59	第32図	A	SK26埋土・Ⅴ層		磁器	皿	中国産	15後－16前	白磁皿C群、端反皿
60	第32図	A	SK29埋土・Ⅴ層		磁器	皿	中国産	15後－16前	染付皿C群、碁笥底 蛇ノ目凹形高台
61	第32図	A	PIT12埋土・Ⅴ層		陶器	碗	瀬戸美濃系		灰釉
62	第33図	A	Ⅴ層	LT50	陶器	皿	肥前系	1610－30	灰釉溝縁皿
63	第33図	A	Ⅴ層	LU50	陶器	皿	瀬戸美濃系	17世紀	
64	第33図	A	Ⅴ層	MC50	陶器	碗	不明		内面鉄釉、外面一部鉄釉
65	第33図	A	Ⅴ層	LT50	磁器	皿	中国産	16後－17前	染付
66	第33図	A	Ⅴ層	LU50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付
67	第33図	A	Ⅴ層	MC50	磁器	皿（深め）	肥前系	17末－18前	染付
68	第33図	A	Ⅴ層	LU50	磁器	鉢	肥前系	17世紀後期	染付
69	第33図	A	Ⅴ層	LU50	土器	皿	在地系土器		
70	第33図	A	Ⅴ層	MC50	土器	土風炉	在地系土器		
71	第34図	A	Ⅰ層		陶器	灯火具（ひょうそく）			内面鉄釉
72	第34図	A	Ⅰ層		磁器	皿	肥前系	18中－後	染付、「富貴長春」銘
73	第34図	A	Ⅱ層	LW50	陶器	皿	肥前系	1610－30	灰釉溝縁皿、砂目積み
74	第34図	A	Ⅱ層	MC50	陶器	皿	肥前系	17後－18前	蛇ノ目釉剥ぎ
75	第34図	A	Ⅱ層	LW50	陶器	鉢	肥前系	17後－18前	灰釉
76	第34図	A	Ⅱ層	MA50	陶器	鉢	肥前系	17世紀後期	刷毛目
77	第34図	A	Ⅱ層	LW50	陶器	不明	瀬戸美濃系	17世紀	
78	第34図	A	Ⅱ層	LX50	磁器	碗	肥前系	18後－19前	染付、コンニャク印判
79	第34図	A	Ⅱ層	LY50	磁器	碗	肥前系	17世紀後期	染付
80	第34図	A	Ⅱ層	LY50	磁器	碗	不明	18後－19前	染付
81	第35図	A	Ⅱ層	LU50	磁器	碗	不明	明治	型紙刷り
82	第35図	A	Ⅱ層	MD50	磁器	碗（湯のみ）	不明	19世紀	染付
83	第35図	A	Ⅱ層	LV50	磁器	端反碗	不明	19世紀	西洋コバルトで染付
84	第35図	A	Ⅱ層	LY50	磁器	皿	中国産	17世紀前期	染付
85	第35図	A	Ⅱ層	MA50	磁器	皿	肥前系	18後－19前	染付、「福」銘 コンニャク印判の五弁花
86	第35図	A	Ⅱ層	ME50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付
87	第35図	A	Ⅱ層	LV50	磁器	皿	肥前系	17後－18前	白磁、蛇ノ目釉剥ぎ
88	第35図	A	Ⅱ層	LZ50	磁器	皿	肥前系	1640－50	染付、輪花皿、型打ち成形
89	第35図	A	Ⅱ層	LW50	磁器	皿	肥前系	18世紀後期	色絵、被熱あり
90	第35図	A	Ⅱ層	MB50	磁器	皿	肥前系	18世紀後期	染付、蛇ノ目凹形高台
91	第36図	A	Ⅱ層	ME50	磁器	皿	寺内窯？	19世紀中葉	染付、口紅
92	第36図	A	Ⅱ層	LX50	磁器	鉢	不明	19世紀中葉	染付
93	第36図	A	Ⅱ層	LT50	磁器	蓋（広東碗）	肥前系	19世紀前期	染付
94	第36図	A	Ⅱ層	LX50	磁器	蓋（広東碗）	肥前系	18末－1810	染付
95	第36図	A	Ⅱ層	MB50	磁器	蓋（蓋物）	不明	19世紀後半	染付、焼継痕（銘あり）
96	第36図	A	Ⅱ層	MB50	磁器	蓋（端反碗）	不明	19世紀中葉	染付
97	第36図	A	Ⅱ層	MB50	磁器	小坏	瀬戸美濃系	19世紀	染付
98	第36図	A	Ⅱ層	MB50	磁器	瓶	肥前系	19世紀前期	染付
99	第36図	A	Ⅱ層	LY50	磁器	御神酒徳利	肥前系	19世紀前期	染付
100	第36図	A	Ⅱ層	MA50	磁器	花生	不明	19世紀中葉	染付
101	第36図	A	Ⅱ層	LU50	磁器	合子	肥前系	18世紀後期	染付
102	第37図	A	撹乱		土器	皿	不明		かわらけ
103	第37図	A	撹乱	LY50	陶器	碗	瀬戸美濃系	16世紀後期	鉄釉、天目茶碗、大窯期
104	第37図	A	撹乱	MF50	陶器	皿	肥前系	17後－18前	銅緑釉、蛇ノ目釉剥ぎ
105	第37図	A	撹乱		陶器	皿	肥前系	17世紀	蛇ノ目釉剥ぎ
106	第37図	A	撹乱	LY50	陶器	皿	瀬戸美濃系	1560－90	銅緑釉、大窯３期
107	第37図	A	撹乱	LY50	磁器	皿	中国産	16世紀後期	染付皿E群
108	第37図	A	撹乱	MB50	磁器	碗	京信楽系	18世紀	色絵
109	第39図	B	SK30・Ⅲ層		陶器	擂鉢	不明		内外面鉄釉
110	第39図	B	SK31・Ⅲ層		陶器	不明	不明		口縁無釉
111	第39図	B	Ⅲ層	MG50	陶器	皿	瀬戸美濃系		銅緑釉
112	第39図	B	Ⅲ層	MB50	陶器	擂鉢	不明		内外面鉄釉

表５　土器・陶磁器属性一覧③

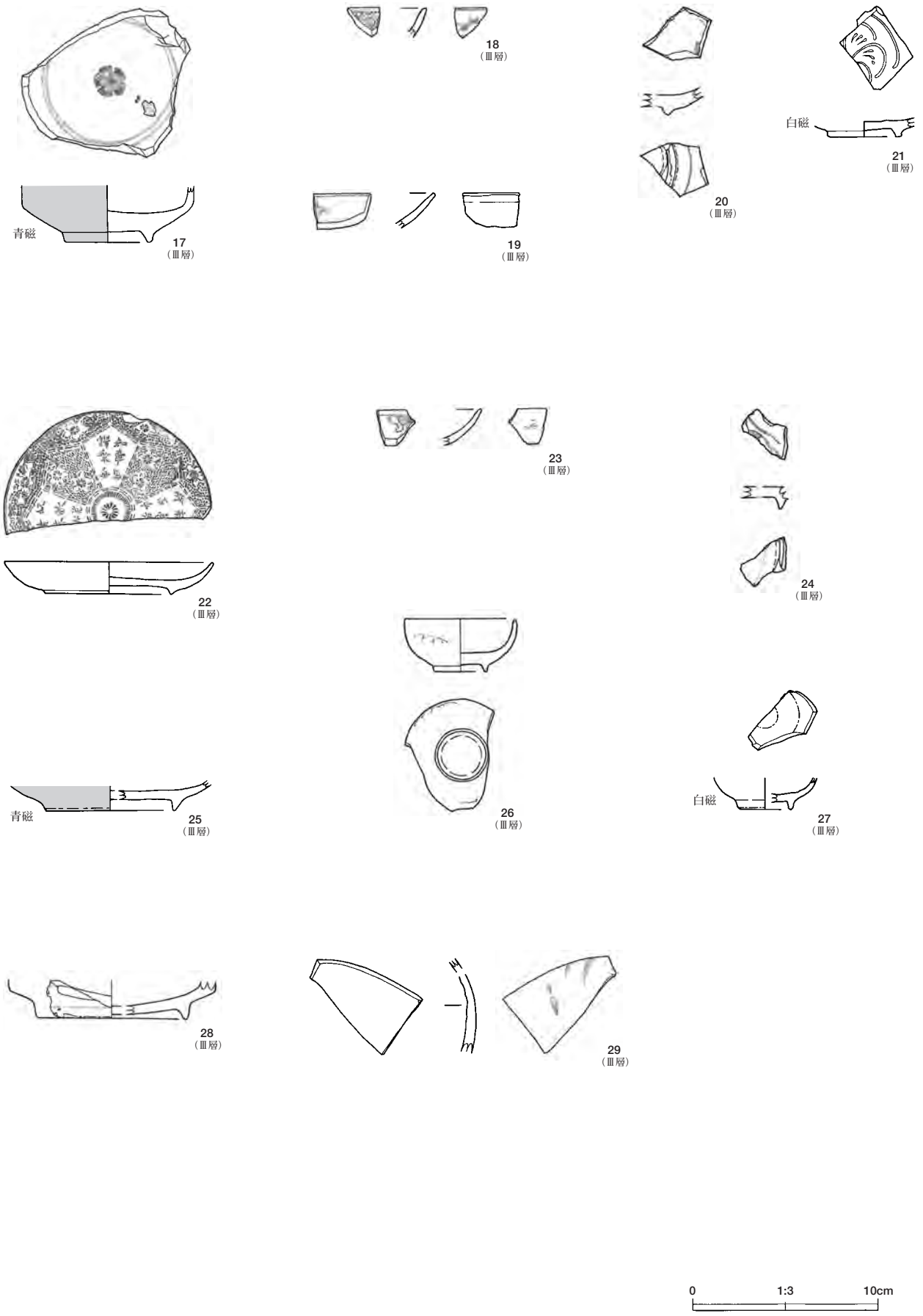
番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	特徴
113	第39図	B	Ⅲ層	MH50	陶器	擂鉢	不明		内外面鉄釉
114	第39図	B	Ⅲ層	MH50	陶器	片口	不明		
115	第39図	B	Ⅲ層	MB50	陶器	鍋	不明		内外面鉄釉
116	第39図	B	Ⅲ層	MC50	磁器	碗	肥前系	19世紀中葉	染付
117	第39図	B	Ⅲ層	MG50	磁器	碗	肥前系	18世紀前期	染付
118	第39図	B	Ⅲ層	MA50	磁器	碗	不明	19世紀中葉	染付
119	第39図	B	Ⅲ層	MB50	磁器	端反碗	不明	19世紀中葉	染付
120	第39図	B	Ⅲ層	MA50	磁器	皿	肥前系	18後－19前	染付
121	第39図	B	Ⅲ層	MH50	磁器	皿	肥前系	19世紀前期	染付、蛇ノ目凹形高台
122	第39図	B	Ⅲ層	MH50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付
123	第40図	B	Ⅲ層	MB50	磁器	皿	不明	19世紀中葉	白磁、型打ち成形
124	第40図	B	Ⅲ層	MH50	磁器	皿	肥前系？	19世紀中葉	染付、焼継痕（銘あり）
125	第40図	B	Ⅲ層	MG50	磁器	皿	不明	明治以降	型紙刷り、西洋コバルト
126	第40図	B	Ⅲ層	MB50	磁器	蓋（土瓶）	不明	19世紀中葉	染付
127	第40図	B	Ⅲ層	LY－LZ50	磁器	小坏か仏飯器	肥前系	19世紀前期	染付
128	第40図	B	Ⅳ層	MG50	陶器	土瓶蓋	不明	18後－19中	
129	第40図	B	Ⅳ層	MC-MD50	磁器	碗	肥前系	18世紀	蛇ノ目釉剥ぎ
130	第40図	B	Ⅳ層	ME50	磁器	碗	肥前系	1640－60	染付
131	第40図	B	Ⅳ層	MB50	磁器	碗	不明	19世紀中葉	
132	第40図	B	Ⅳ層	MG-MH50	磁器	端反碗	不明	19世紀中葉	染付
133	第40図	B	Ⅳ層	MH50	磁器	端反碗	不明	19世紀中葉	染付
134	第40図	B	Ⅳ層	MC50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付、コンニャク印判
135	第40図	B	Ⅳ層	MH50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付、被熱あり
136	第40図	B	Ⅳ層	LZ50	磁器	皿	肥前系	19世紀中葉	染付
137	第40図	B	Ⅳ層	MG-MH50	磁器	鉢	肥前系	18世紀	白磁
138	第40図	B	Ⅳ層	MB50	磁器	蓋（端反碗）	不明	19世紀中葉	染付
139	第41図	B	SD30・Ⅴ層		陶器	擂鉢	不明		内外面鉄釉
140	第41図	B	SD30・Ⅴ層		磁器	蓋（端反碗）	肥前系？	19世紀中葉	染付
141	第41図	B	SD31・Ⅴ層		陶器	土瓶	不明	19世紀中葉	内面鉄釉
142	第41図	B	SD31・Ⅴ層		磁器	小坏	不明	19世紀中葉	染付
143	第41図	B	SD31・Ⅴ層		土器	火鉢	在地系土器		
144	第41図	B	SD31・Ⅴ層		土器	火鉢	在地系土器		
145	第41図	B	Ⅴ層	MA50	磁器	碗	肥前系	18世紀	外青磁
146	第41図	B	Ⅴ層	MB50	磁器	端反碗	不明	19世紀中葉	染付、口紅
147	第41図	B	Ⅴ層	MA50	磁器	合子蓋	肥前系	18世紀	色絵、被熱あり
148	第41図	B	SG01 Ⅰ層	LX-LY50	磁器	小碗	瀬戸美濃系	19世紀中葉	染付
149	第41図	B	SG01 Ⅰ層	LS50	磁器	皿	肥前系	19世紀中葉	染付
150	第41図	B	SG01 Ⅰ層	LS50	磁器	皿	不明	明治以降	西洋コバルトで染付 蛇ノ目凹形高台
151	第41図	B	SG01 Ⅰ層	LU50	磁器	皿	不明	大正、昭和	西洋コバルトで染付 銅板刷り
152	第41図	B	SG01 Ⅰ層	LR50	磁器	皿	不明	明治以降	染付
153	第41図	B	SG01 Ⅰ層	LU50	磁器	蓋	不明	19後－20	染付
154	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	陶器	鉢	寺内窯	江戸後期	内面なまこ釉、外面鉄釉
155	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	陶器	鉢	寺内窯	江戸後期	内外面鉄釉外面 上部と内面なまこ釉
156	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	陶器	土瓶	寺内窯	18後以降	化粧掛けの上に鉄釉で絵付
157	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LX50	陶器	小壺	不明	江戸後期	内外面鉄釉 上部内外面なまこ釉
158	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LT50	磁器	碗	肥前系	17世紀後期	染付
159	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LR50	磁器	碗	肥前系	18世紀	染付、コンニャク印判
160	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LR50	磁器	碗	肥前系	18世紀	染付、渦福銘 コンニャク印判の五弁花
161	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	碗	肥前系	18世紀	染付、焼継痕
162	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	碗	肥前系	1780－1810	染付
163	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LT50	磁器	碗	肥前系	18後－1810	染付
164	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LR50	磁器	端反碗	肥前系	19世紀中葉	染付
165	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	端反碗	肥前系	19世紀中葉	染付、焼継痕

表６　土器・陶磁器属性一覧④

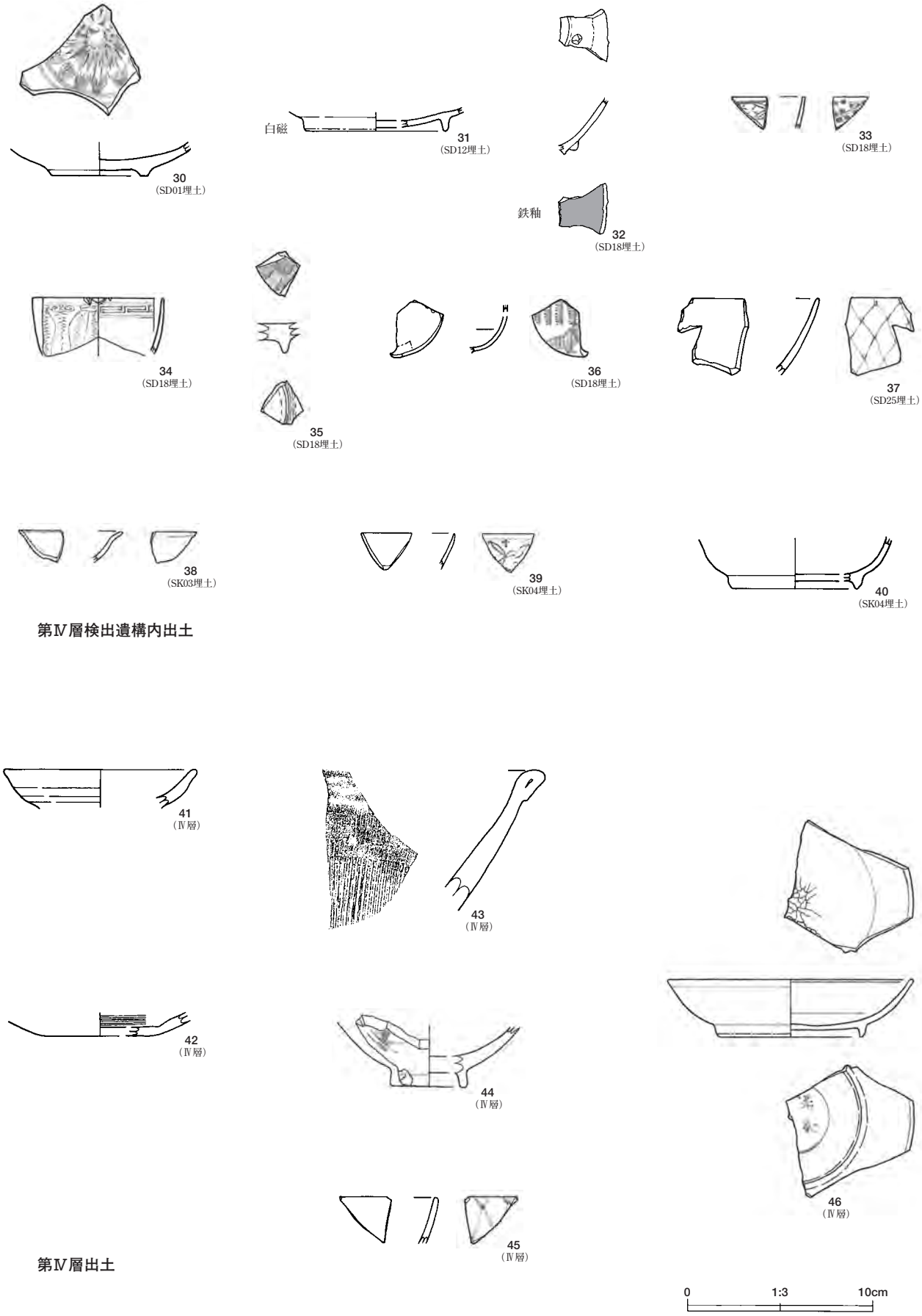
番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	特徴
166	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	端反碗	肥前系	19世紀中葉	染付
167	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LT50	磁器	碗	不明	19世紀中葉	染付、焼継痕
168	第42図	B	SG01 Ⅱ層	LX50	磁器	皿	肥前系	1630－50	染付、折縁皿
169	第43図	B	SG01 Ⅱ層	LT50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付、蛇ノ目釉剥ぎ
170	第43図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付
171	第43図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付
172	第43図	B	SG01 Ⅱ層	LT50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付
173	第43図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	皿	肥前系	18中－後	染付
174	第43図	B	SG01 Ⅱ層	LX50	磁器	皿	肥前系	1810－20	染付
175	第43図	B	SG01 Ⅱ層	LW50	磁器	皿	肥前系	19世紀中葉	色絵
176	第43図	B	SG01 Ⅱ層	LR50	磁器	皿	不明	1820－60	染付
177	第43図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	皿	不明	19世紀中葉	染付、輪花皿
178	第43図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	皿	不明	明治以降	染付、蛇ノ目凹形高台 漆継痕
179	第43図	B	SG01 Ⅱ層	LU50	磁器	皿	不明	明治以降	染付、型紙刷り、焼継痕
180	第43図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	鉢	肥前系	19世紀中葉	染付、焼継痕
181	第44図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	鉢	不明	19世紀中葉	染付
182	第44図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	蓋（端反碗）	不明	19世紀中葉	染付
183	第44図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	蓋（碗）	不明	明治以降	染付、型紙刷り
184	第44図	B	SG01 Ⅱ層	LX50	磁器	小坏	不明	19世紀中葉	
185	第44図	B	SG01 Ⅱ層	LX50	磁器	段重	肥前系	19世紀中葉	
186	第44図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	磁器	段重	不明	19世紀中葉	
187	第44図	B	SG01 Ⅱ層	LR50	磁器	香炉	肥前系	18世紀	白磁、蛇ノ目凹形高台
188	第44図	B	SG01 Ⅱ層	LV50	土器	火鉢	在地系土器		瓦質土器
189	第44図	B	SG01 Ⅲ層	LR50	陶器	皿	肥前系	1610－30	灰釉溝縁皿、砂目止め
190	第44図	B	SG01 Ⅲ層	LY50	陶器	皿	瀬戸美濃系	1560－90	銅緑釉、大窯3期
191	第44図	B	SG01 Ⅲ層	LR50	陶器	鉢	肥前系	17世紀後期	二彩唐津
192	第44図	B	SG01 Ⅲ層	LR50	陶器	灯火具（灯明皿）	不明	不明	鉄釉
193	第45図	B	SG01 Ⅲ層	LR50	磁器	碗	肥前系	18後－19前	染付、漆継痕
194	第45図	B	SG01 Ⅲ層	LR50	磁器	碗	肥前系	18後－19初	染付
195	第45図	B	SG01 Ⅲ層	LX50	磁器	碗	肥前系	18末－1820	染付
196	第45図	B	SG01 Ⅲ層	LR50	磁器	碗	肥前系	19世紀中葉	染付
197	第45図	B	SG01 Ⅲ層	LR50	磁器	端反碗	不明	19世紀中葉	染付
198	第45図	B	SG01 Ⅲ層	LR50	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付、手書き五弁花 蛇ノ目釉剥ぎ
199	第45図	B	SG01 Ⅲ層	LR50	磁器	蓋（端反碗）	肥前系	19世紀中葉	染付、「永楽年製」銘、焼継痕
200	第45図	B	SG01 Ⅲ層	LS50	磁器	小坏	不明	19世紀中葉	染付、口紅、焼継痕
201	第45図	B	SG01 Ⅲ層	LX50	磁器	仏飯器	肥前系	18－19中	
202	第45図	B	SG01 Ⅳ層	LZ50	陶器	皿	肥前系	1610－50	灰釉溝縁皿、砂目止め
203	第45図	B	SG01 Ⅳ層	LY50	陶器	香炉	瀬戸美濃系		銅緑釉、内灰釉
204	第45図	B	SG01 Ⅳ層	LX50	磁器	碗	肥前系	19世紀中葉	染付、端反碗
205	第45図	B	SG01 Ⅳ層	LZ50	磁器	皿	瀬戸美濃系		染付
206	第45図	B	SG01 Ⅳ層	LX50	磁器	仏飯器	肥前系	18世紀以降	染付
207	第45図	B	SG01 Ⅴ層	LU50	陶器	脚付ハマ	不明		
208	第45図	B	SG01 Ⅴ層	LY50	磁器	香炉	肥前系	18世紀	外青磁
209	第46図	B	Ⅰ層	MB50	磁器	筒型碗	肥前系	18後－19初	染付
210	第46図	B	Ⅰ層	LZ50	磁器	皿	肥前系	18世紀後期	染付
211	第46図	B	Ⅰ層	LR－LZ50	磁器	皿	不明	明治以降	染付
212	第46図	B	Ⅰ層	LY50	磁器	蓋（端反碗）	肥前系	1810－60	染付
213	第46図	B	Ⅰ層	LZ50	磁器	小坏	瀬戸美濃系	1810－60	染付
214	第46図	B	表採		磁器	皿	肥前系	18世紀	染付、「大明年製」銘 コンニャク印判の五弁花
215	第46図	B	表採		土器	灯火具（ひょうそく）	不明		
216	第46図	B	撹乱	LS-LT50	陶器	碗	肥前系	17後－18前	銅緑釉
217	第46図	B	撹乱	LS50	磁器	皿	肥前系	17後－18前	白磁、蛇ノ目釉剥ぎ
218	第46図	B	撹乱	LR-LS50	磁器	皿	肥前系	19世紀中葉	色絵
219	第46図	B	撹乱	LR-LS50	磁器	油壺	不明	幕末	色絵



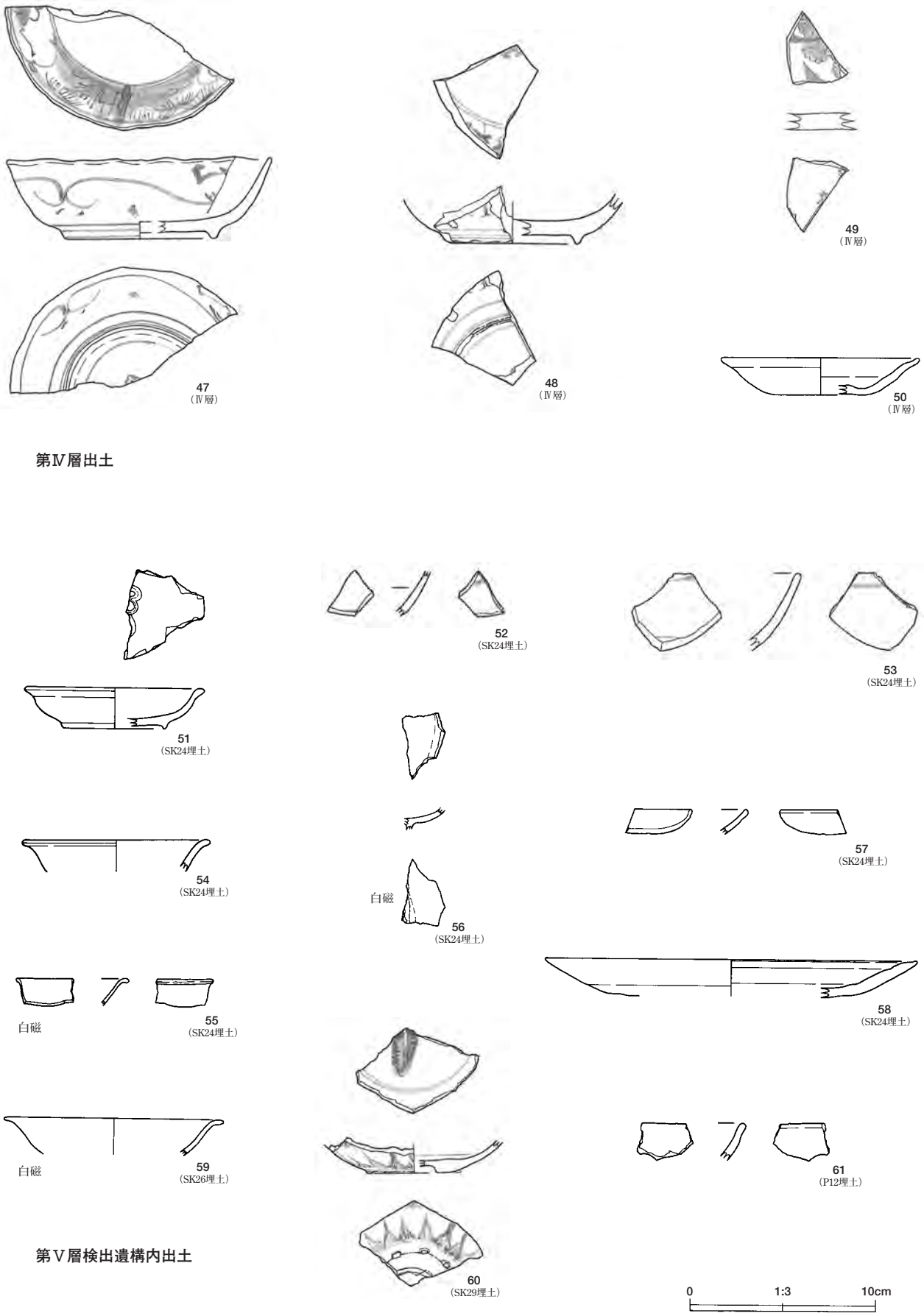
第29図　Ａ区　土器・陶磁器（第Ⅲ層出土①）



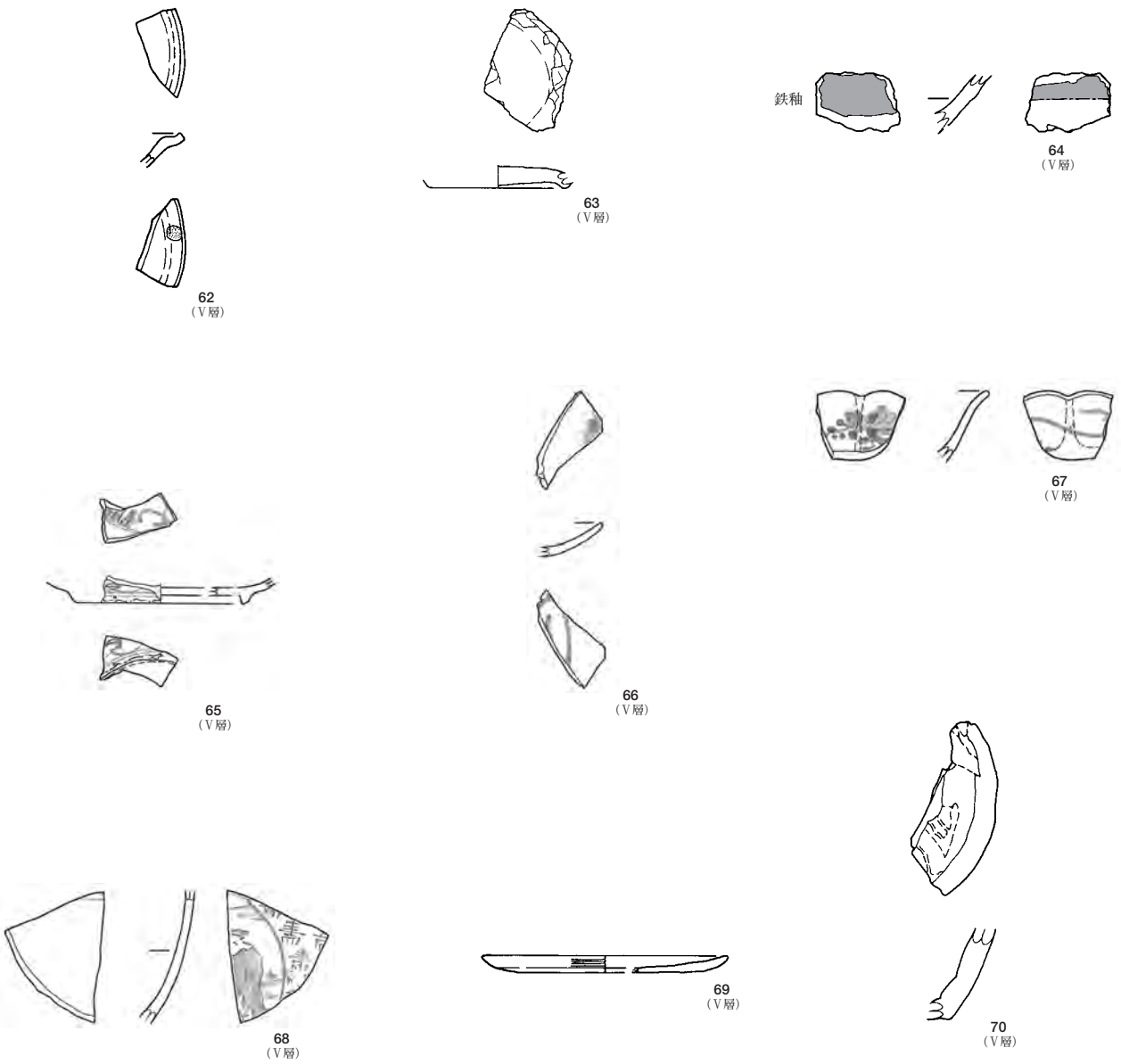
第30図　Ａ区　土器・陶磁器（第Ⅲ層出土②）



第31図　Ａ区　土器・陶磁器（第Ⅳ層検出遺構内、第Ⅳ層出土①）

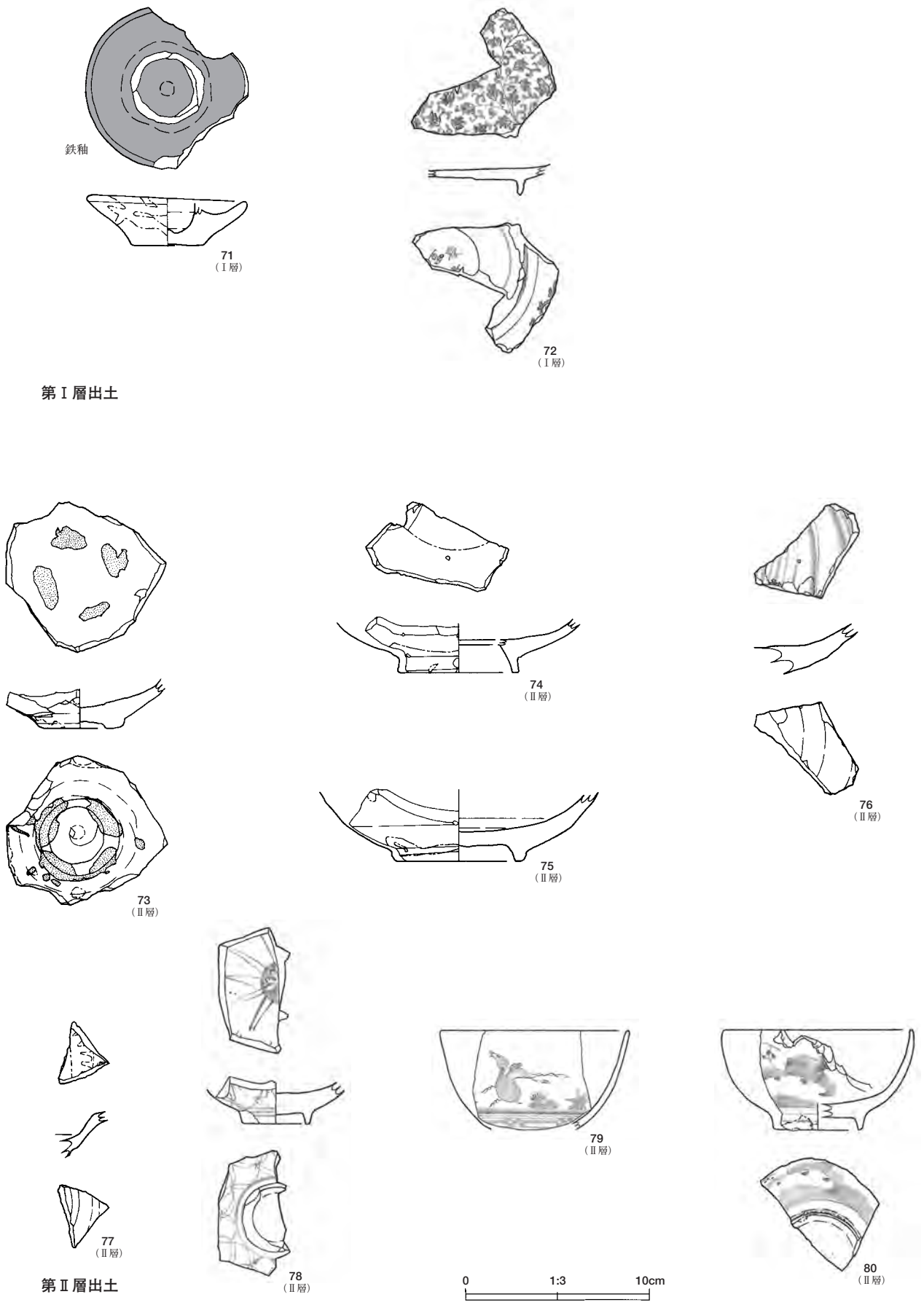


第32図　Ａ区　土器・陶磁器（第Ⅳ層②、第Ⅴ層検出遺構内出土）

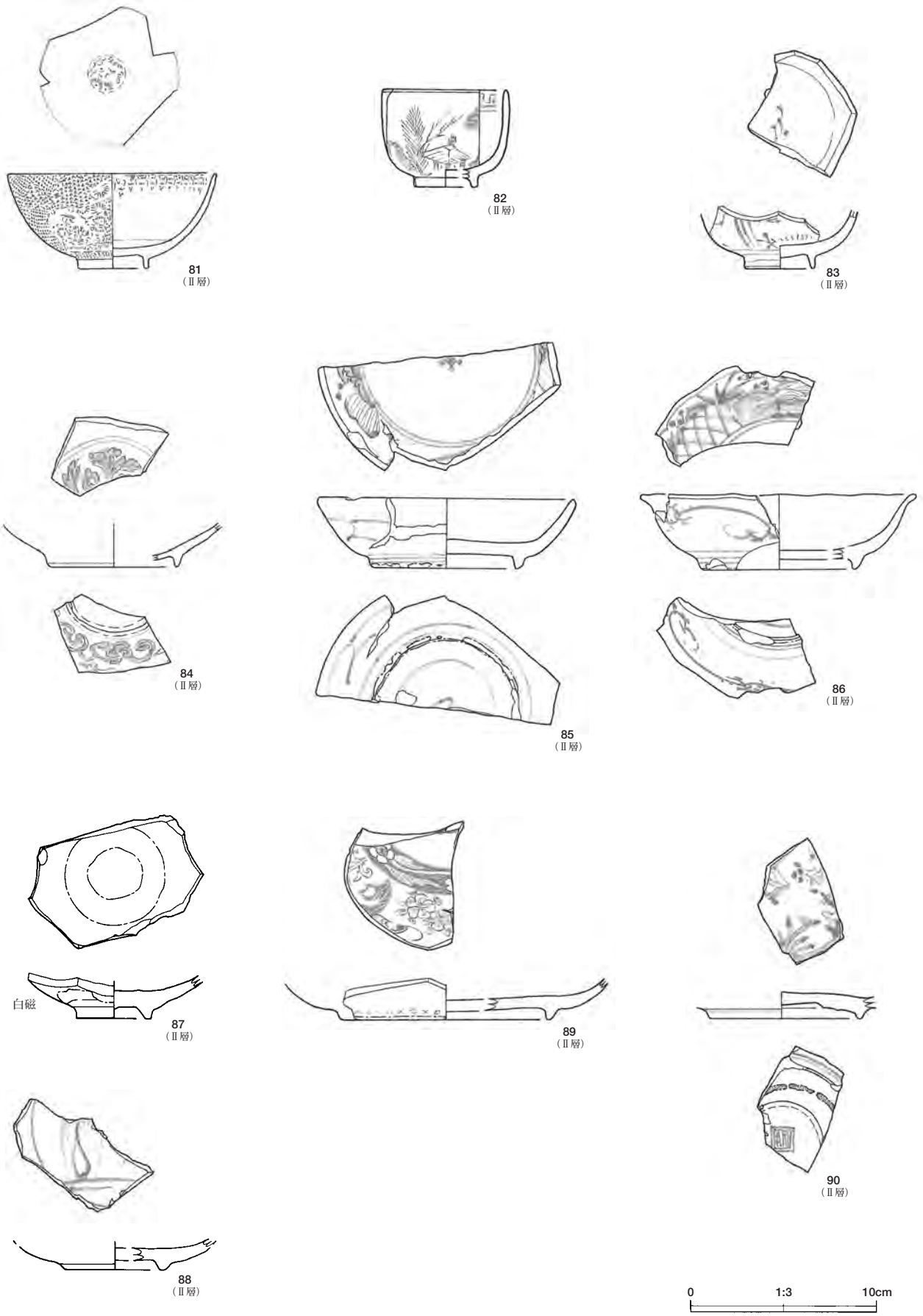


0　1:3　10cm

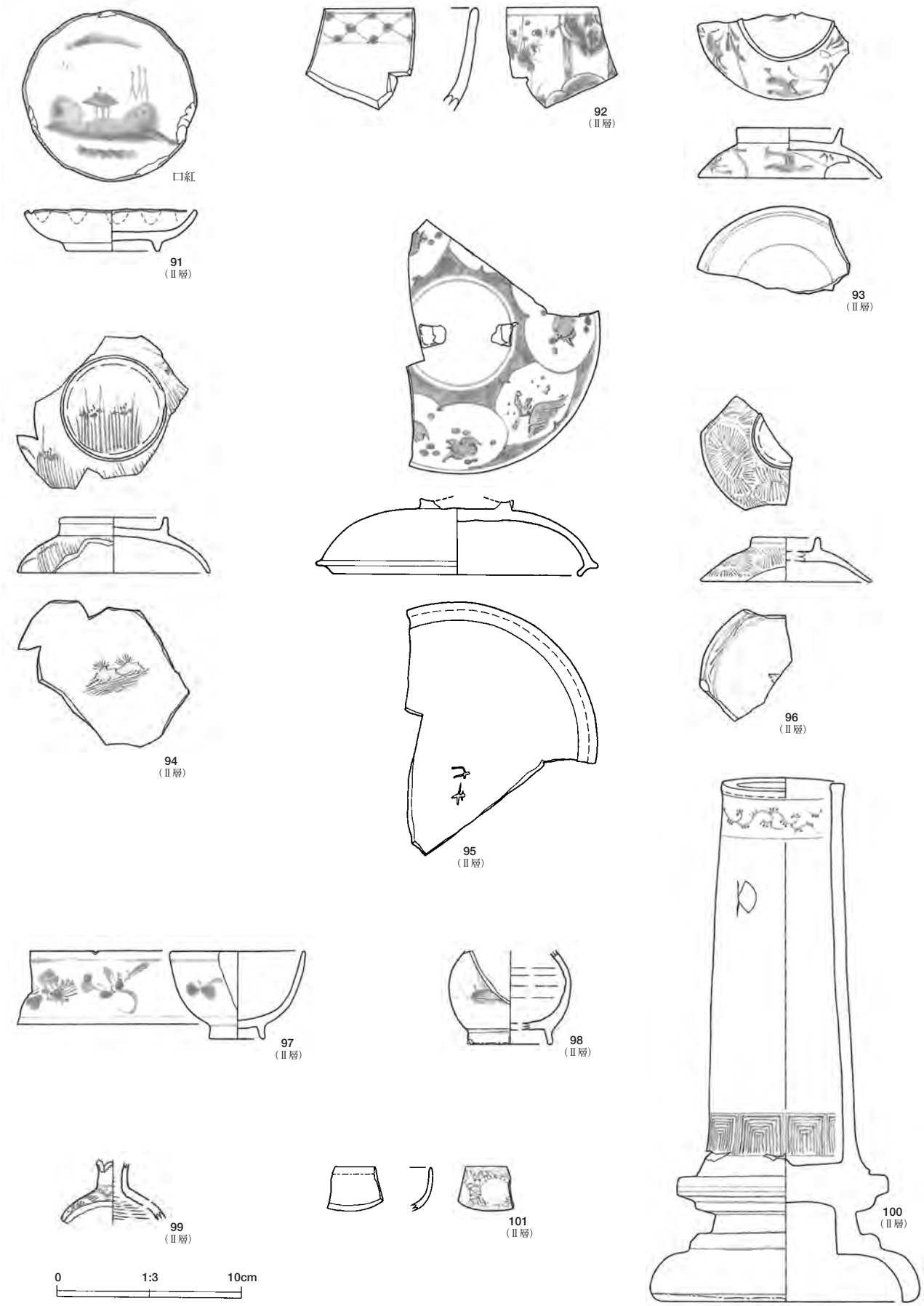
第33図　Ａ区　土器・陶磁器（第Ⅴ層出土）



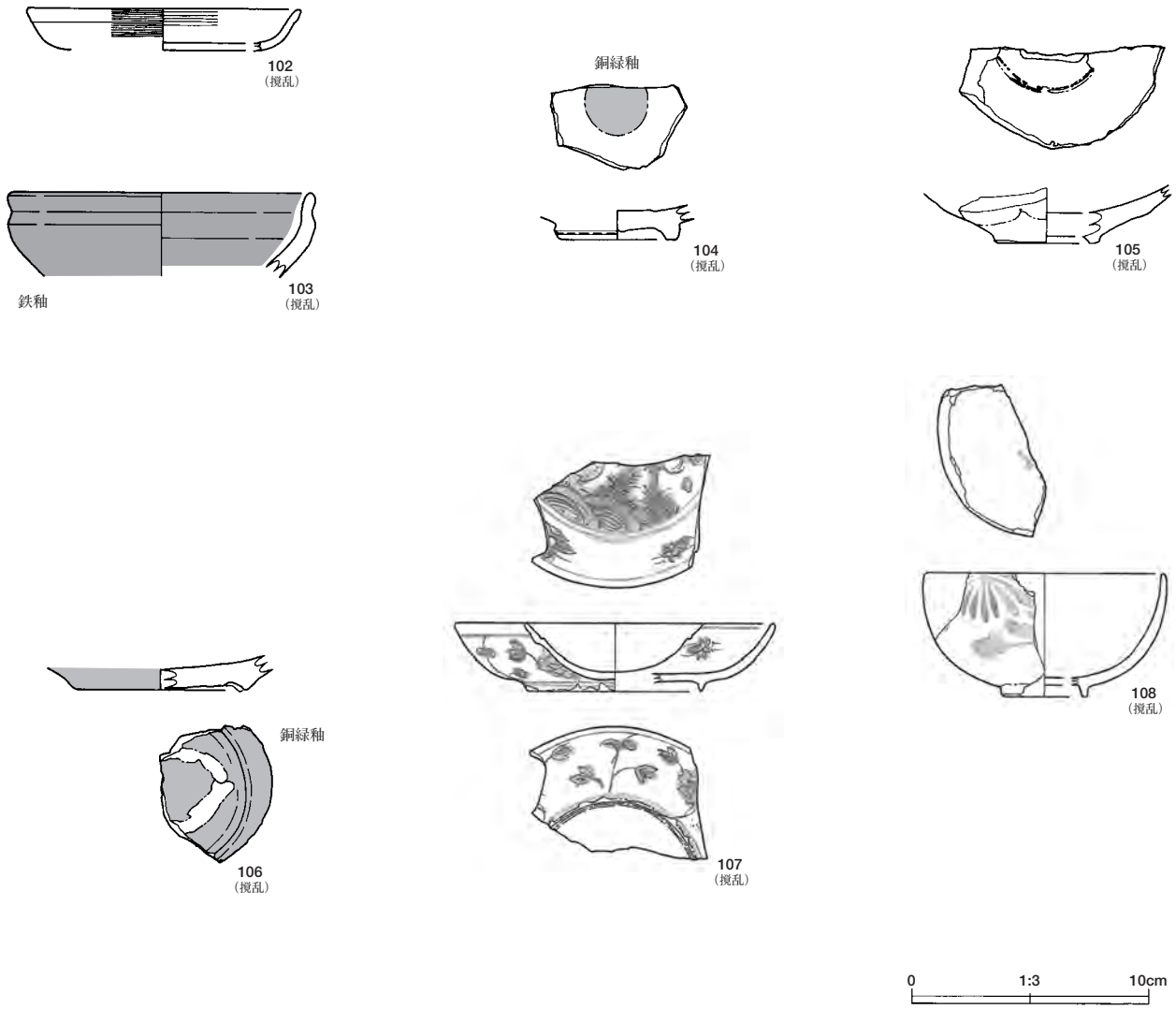
第34図　Ａ区　土器・陶磁器（第Ⅰ層、第Ⅱ層出土①）



第35図　Ａ区　土器・陶磁器（第Ⅱ層出土②）



第36図　Ａ区　土器・陶磁器（第Ⅱ層出土③）



第37図　Ａ区　土器・陶磁器（遺構外出土）

表７　Ａ区土製品属性一覧

番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	分類	素材	長さ（cm）	最大幅（cm）
1	第38図	A	SK24・Ⅴ層		土錘	土師質	4.6 3.3	
2	第38図	A	Ⅱ層	LV50	面子	土師質		3.8

表８　Ａ区金属製品一覧

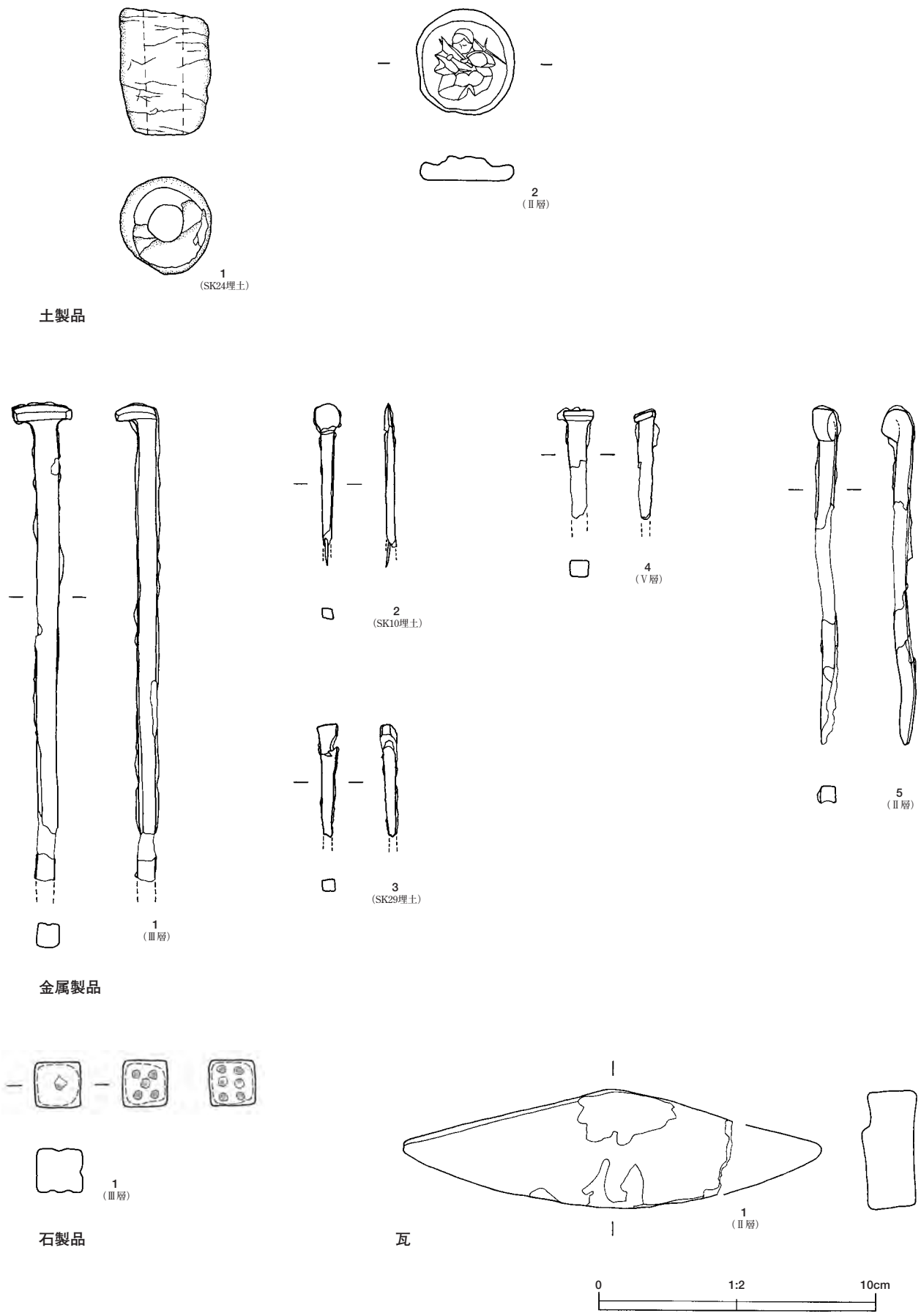
番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	器種	素材
1	第38図	A	Ⅲ層	LT50	釘	鉄
2	第38図	A	SK10・Ⅴ層		釘	鉄
3	第38図	A	SK29・Ⅴ層		釘	鉄
4	第38図	A	Ⅴ層	LZ50	釘	鉄
5	第38図	A	Ⅱ層	LU50	釘	鉄

表９　Ａ区石製品属性一覧

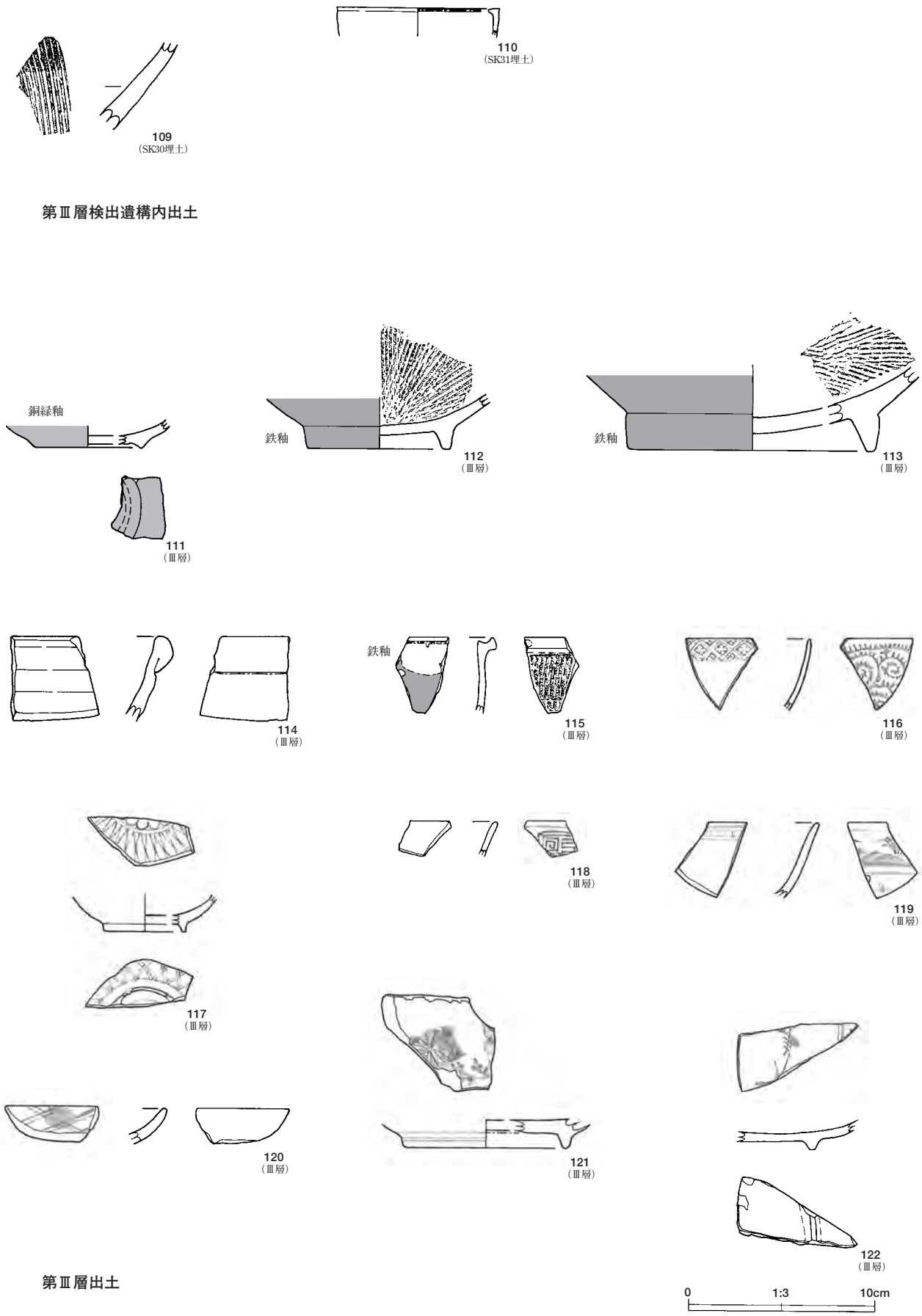
番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	器種
1	第38図	A	Ⅲ層	MF50	賽

表10　Ａ区瓦属性一覧

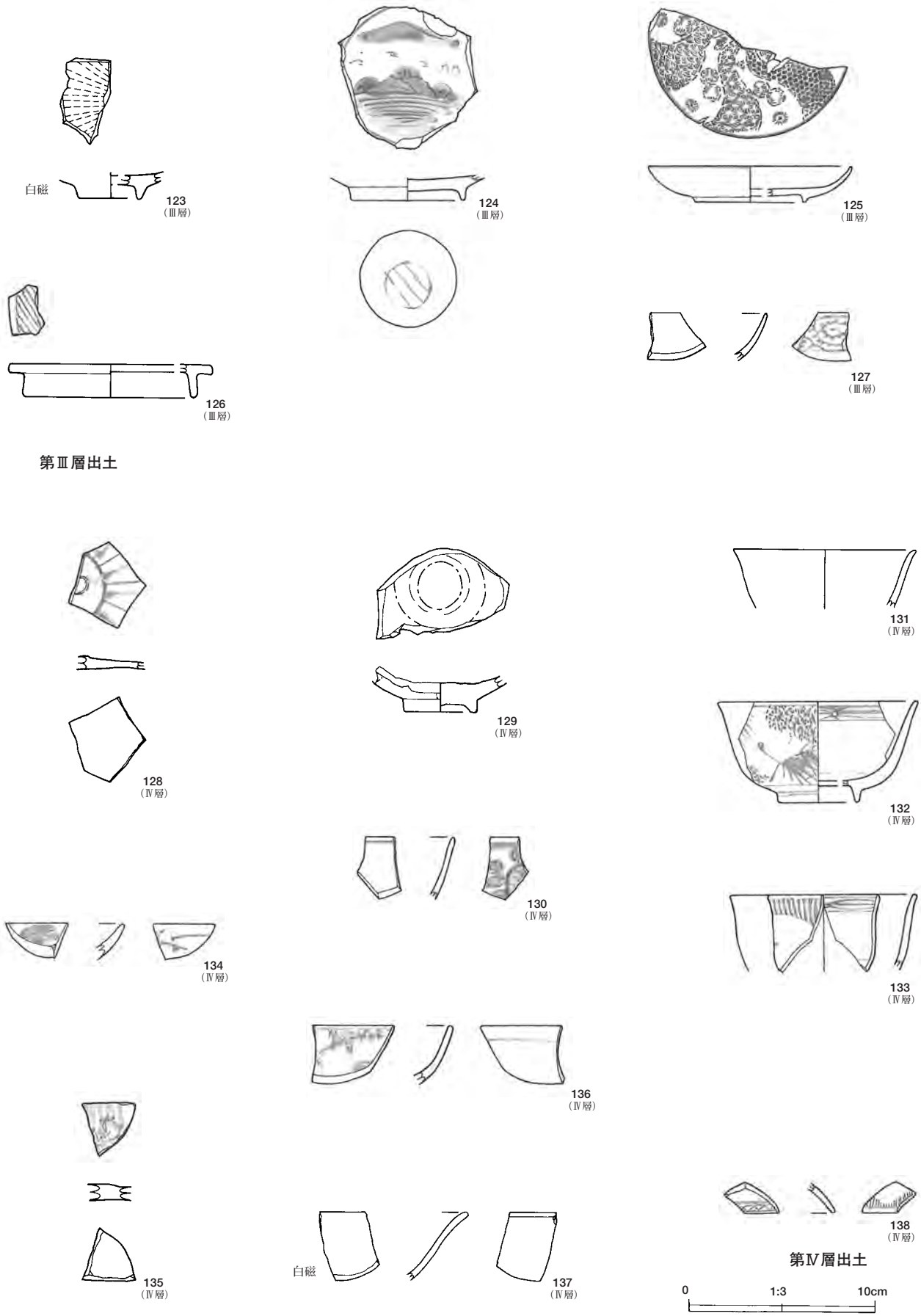
番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	分類
1	第38図	A	Ⅱ層	LX50	道具瓦（面斗瓦）



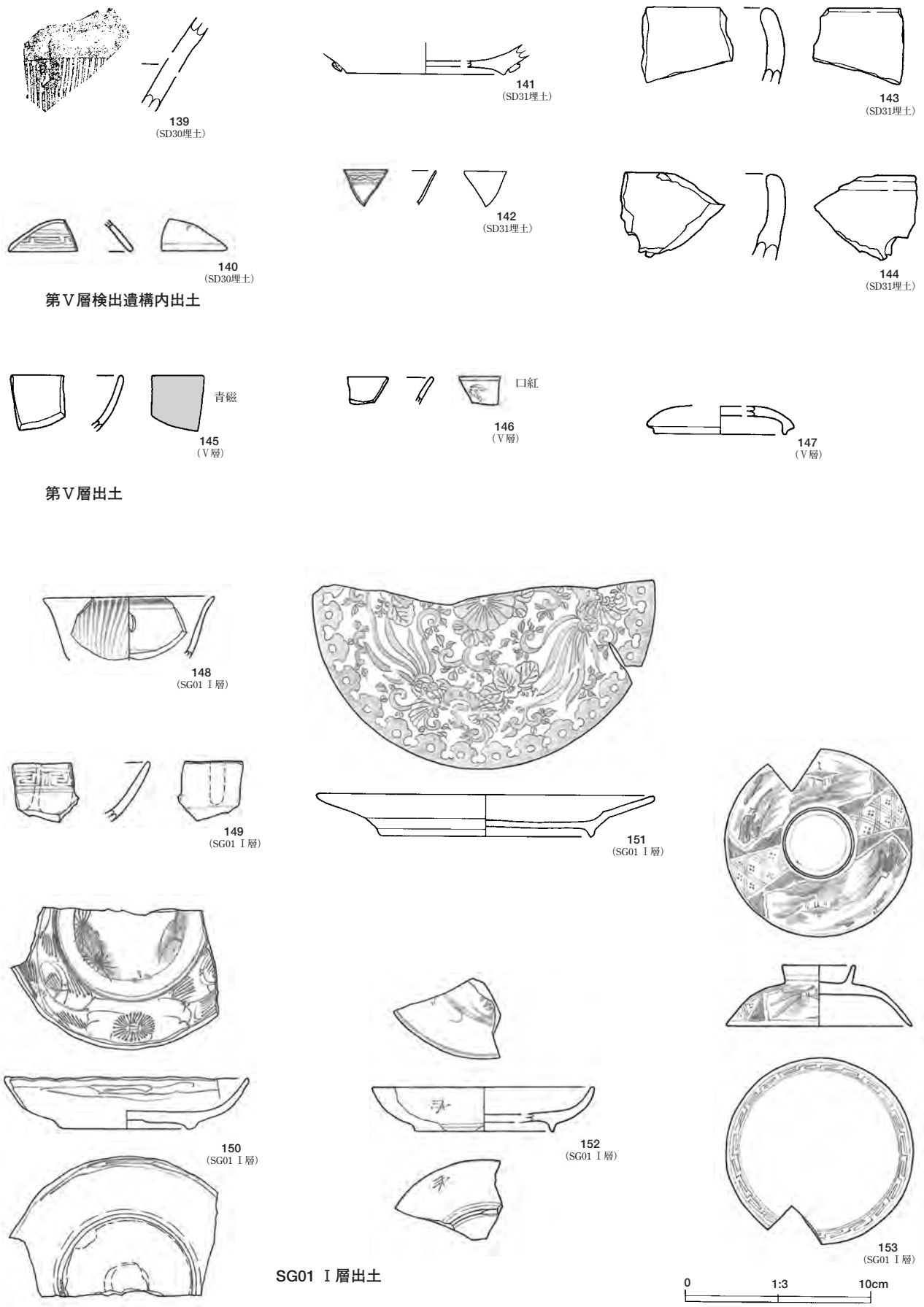
第38図　Ａ区　土製品、金属製品、石製品、瓦



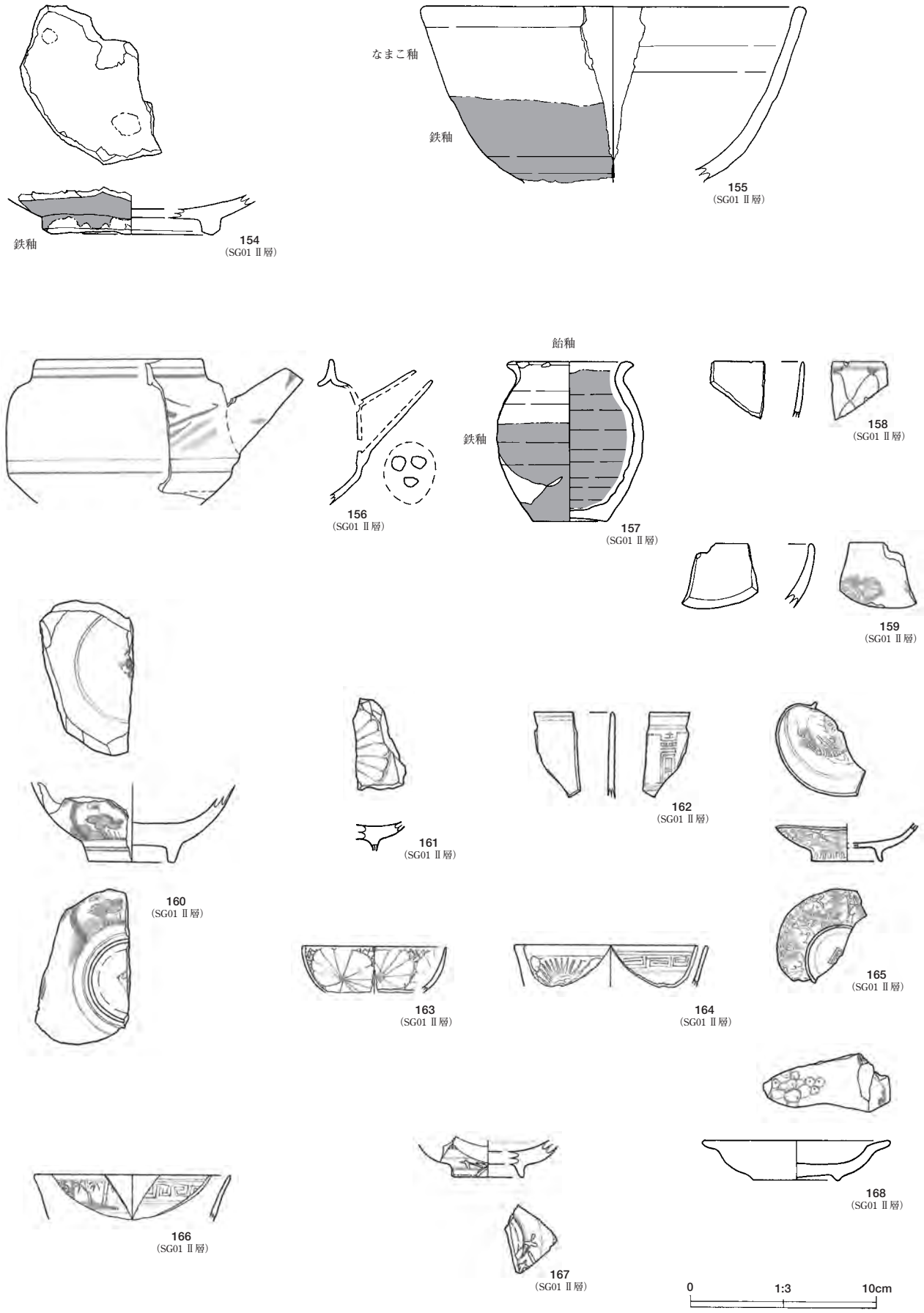
第39図　Ｂ区　土器・陶磁器（第Ⅲ層検出遺構内、第Ⅲ層出土①）



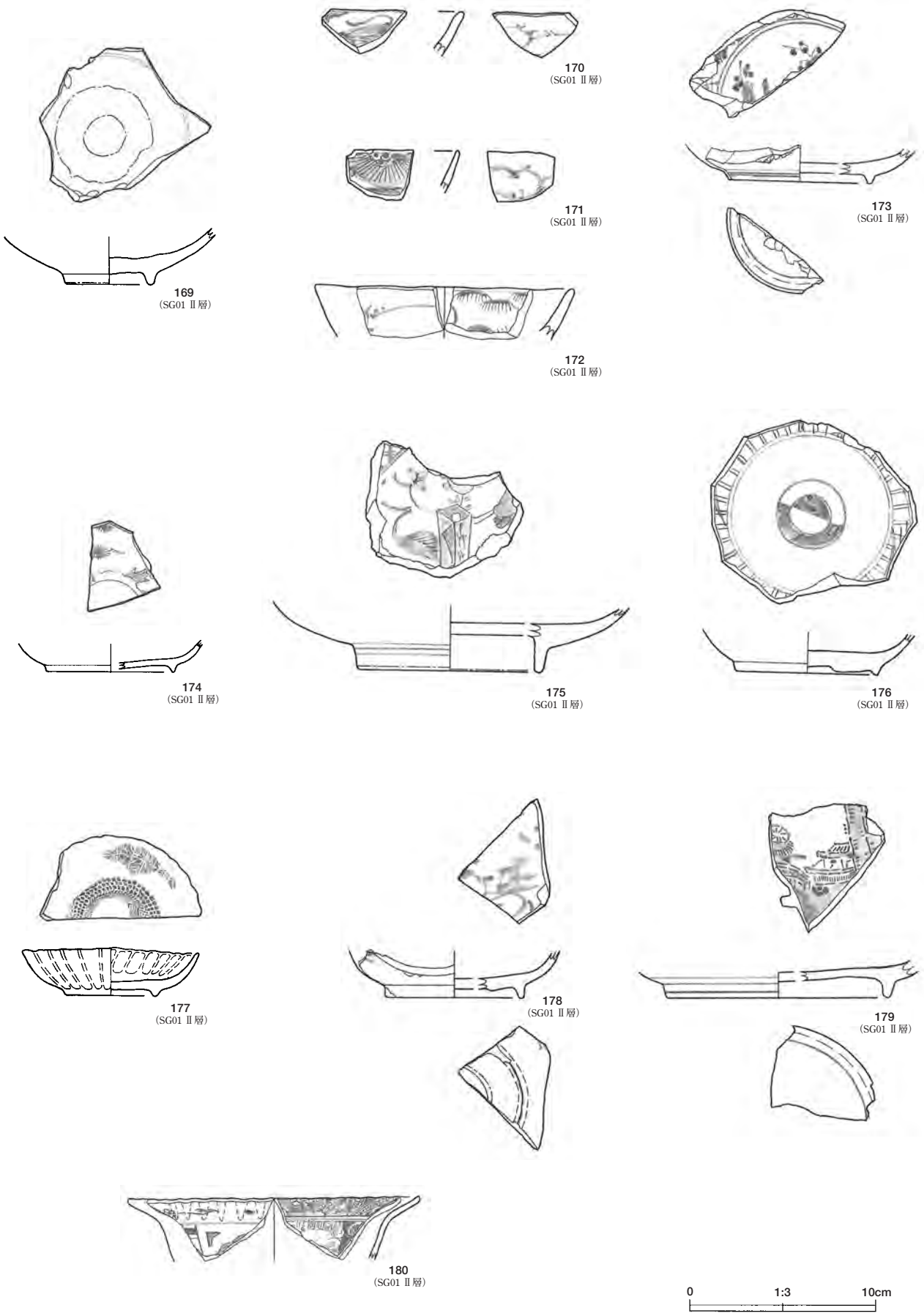
第40図　Ｂ区　土器・陶磁器（第Ⅲ層出土②、第Ⅳ層出土）



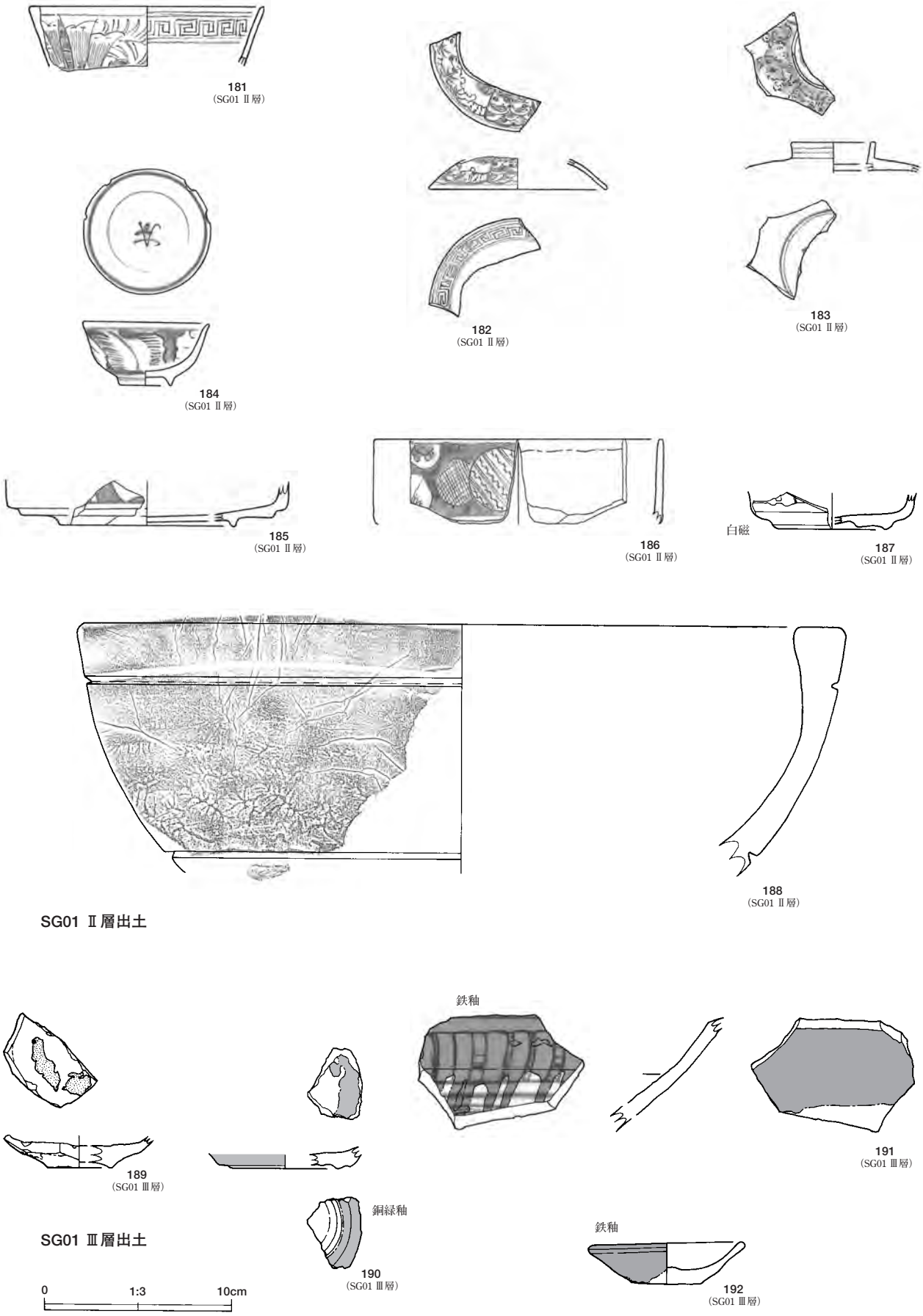
第41図　Ｂ区　土器・陶磁器（第Ⅴ層検出遺構内、第Ⅴ層、SG01 Ⅰ層出土）



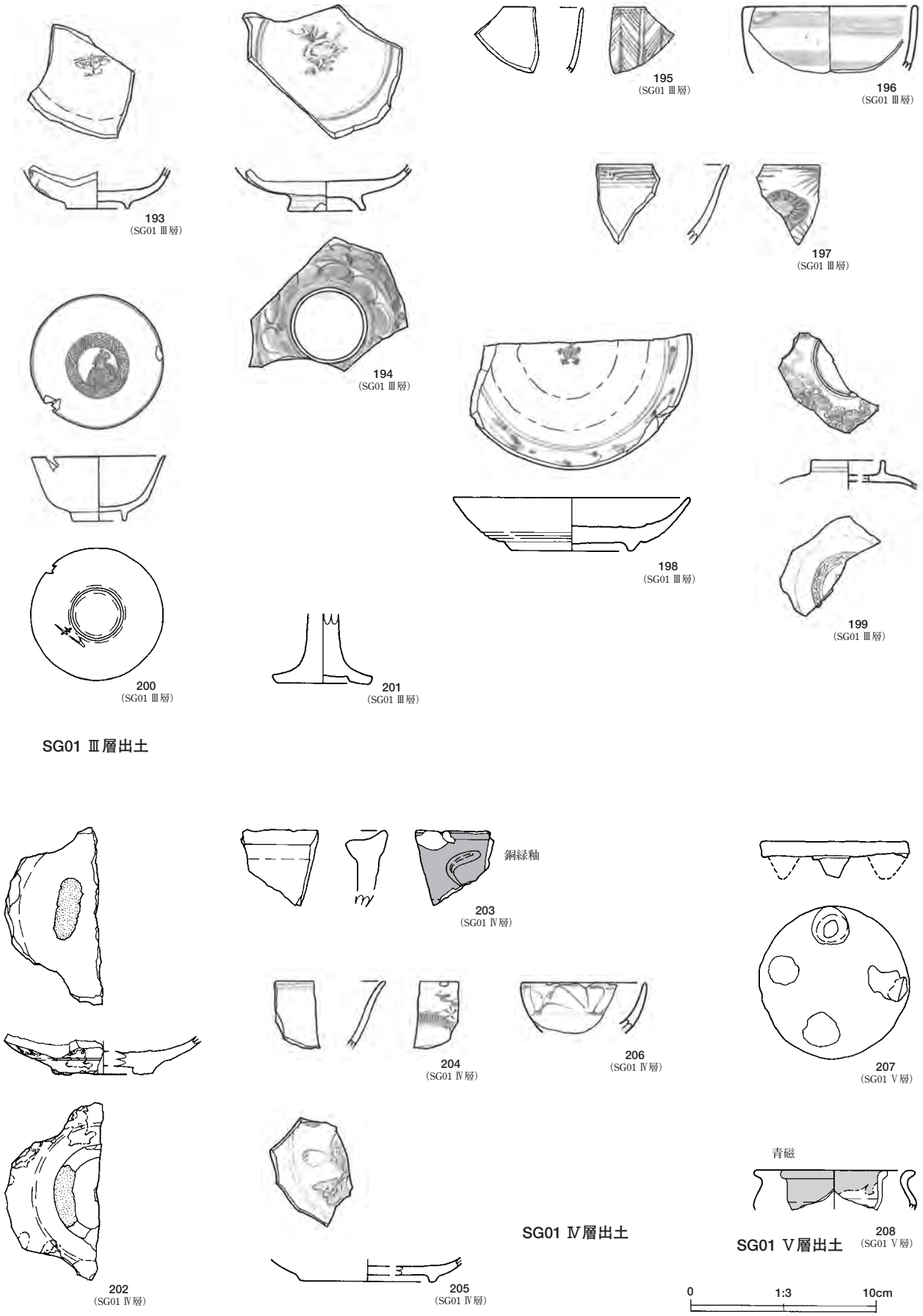
第42図　Ｂ区　土器・陶磁器（SG01 Ⅱ層出土①）



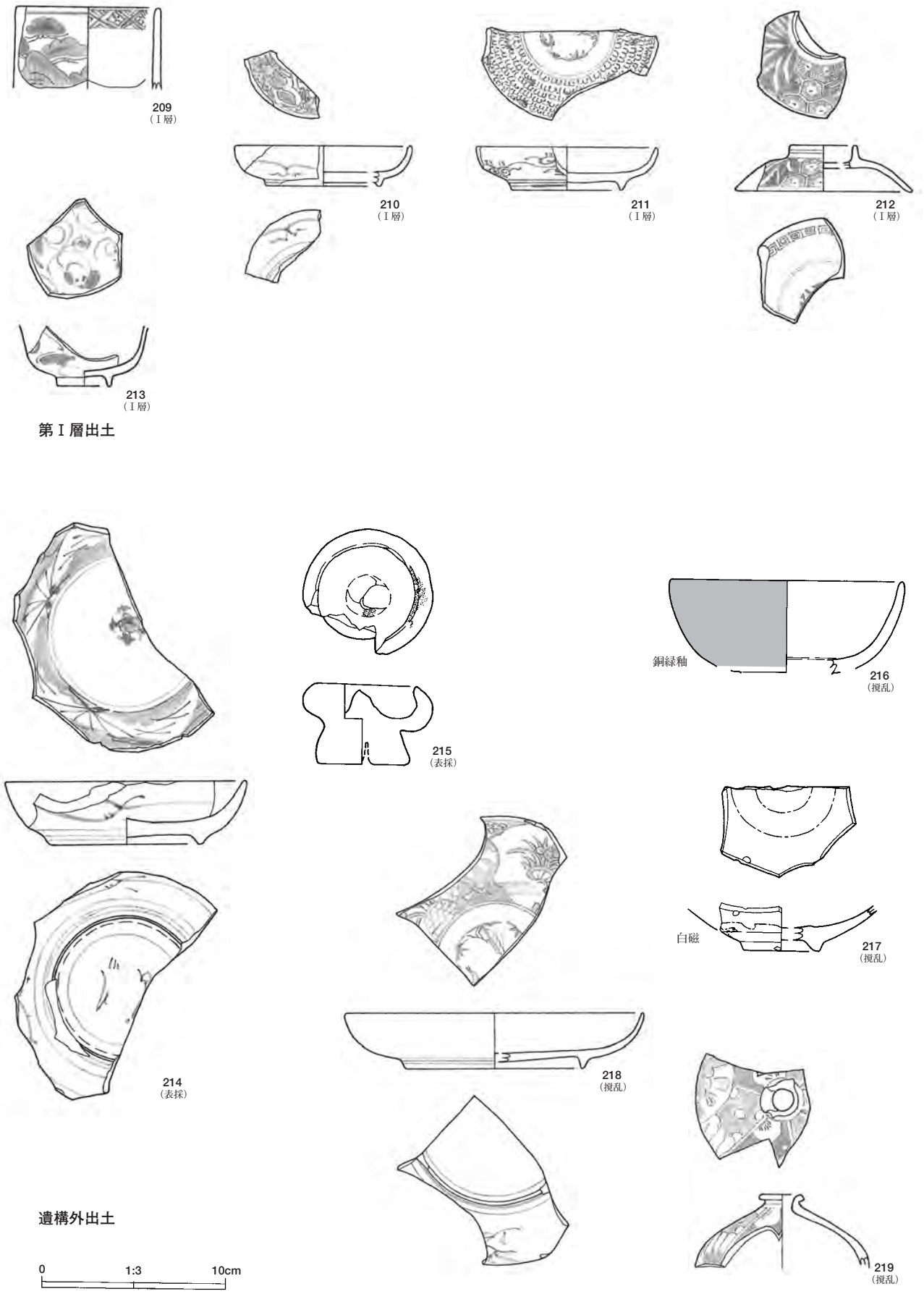
第43図　Ｂ区　土器・陶磁器（SG01 Ⅱ層出土②）



第44図　Ｂ区　土器・陶磁器（SG01 Ⅱ層③、Ⅲ層出土①）



第45図　Ｂ区　土器・陶磁器（SG01 Ⅲ層②、Ⅳ層、Ⅴ層出土）



第46図　Ｂ区　土器・陶磁器（第Ⅰ層、遺構外出土）

表11　Ｂ区木製品属性一覧

番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	器種	備考
1	第47図	B	SG01上面	LS50	刳り下駄	
2	第47図	B	SG01上面	LU50	連歯下駄	鋲を打った跡あり
3	第47図	B	SG01上面	LU50	曲物蓋	中央に穴あり、両面赤漆
4	第47図	B	SG01.1	LW50	椀	内側赤漆、外側黒漆
5	第47図	B	SG01.1	LX50	椀	黒漆
6	第47図	B	SG01.1	LW50	箸	
7	第47図	B	SG01.1	LW50	箸	
8	第47図	B	SG01.1	LT50	箸	
9	第47図	B	SG01.1	LT50	箸	
10	第47図	B	SG01.1	LT50	箸	
11	第48図	B	SG01.1	LT50	箸	
12	第48図	B	SG01.1	LT50	箸	
13	第48図	B	SG01.1	LX50	箸	
14	第48図	B	SG01.1	LX50	箸	
15	第48図	B	SG01.1	LT50	箸	
16	第48図	B	SG01.1	LW50	桶蓋	木釘で継ぎ足している
17	第48図	B	SG01.1	LV50	桶蓋	3カ所木釘跡あり
18	第48図	B	SG01.1	LT50	蓋	取っ手部分欠損
19	第49図	B	SG01.1	LX50	蓋	焼きゴテで四角内に「さ」、周り三カ所に釘穴あり
20	第49図	B	SG01.1	LX50	蓋	焼きゴテで「あさ？」
21	第49図	B	SG01.1	LX50	連歯下駄	歯に鋲跡（前後各6カ所）
22	第49図	B	SG01.1	LT50	連歯下駄	
23	第49図	B	SG01.1	LT50	浮子	
24	第49図	B	SG01.1	LV50	杭	真ん中に木釘あり
25	第49図	B	SG01.1	LV50	不明	
26	第50図	B	SG01.2	LR50	椀	見込赤漆、高台内黒漆、他飴色漆
27	第50図	B	SG01.2	LX50	箸	
28	第50図	B	SG01.2	LT-LU50	杭	
29	第50図	B	SG01.3	LZ50	不明	
30	第50図	B	SG01.3	LY50	不明	
31	第50図	B	SG01.4	LU50	不明	墨字で「十番」
32	第50図	B	撹乱	LW50	連歯下駄	裏に鋲あり
33	第50図	B	撹乱	LR-LS50	不明	

表12　Ｂ区土製品属性一覧

番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	分類	素材	長さ（㎝）	最大幅（㎝）
3	第51図	B	Ⅳ層	MG50	土錘	土師質	4.4	
4	第51図	B	SG01 Ⅱ層	LX50	土錘	土師質	3.7	2.9
5	第51図	B	SG01 Ⅱ層	LW50	陶錘	陶器	7.0	5.1
6	第51図	B	SG01 Ⅳ層	LZ50	土錘	土師質		
7	第51図	B	撹乱	LS50	土錘	土師質	5.0 2.9	
8	第51図	B	Ⅰ層	ME50	面子	土師質		2.8
9	第51図	B	Ⅰ層	MG50	面子	土師質		2.6

表13　Ｂ区金属製品一覧

番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	器種	素材
6	第51図	B	SK31・Ⅲ層		鎌	鉄
7	第51図	B	Ⅳ層	LY50	釘	鉄
8	第51図	B	Ⅳ層	LY50	不明	鉄
9	第51図	B	Ⅴ層	ME50	釘	鉄
10	第51図	B	撹乱	MA50	火箸	真鍮

表14　Ｂ区銭貨属性一覧

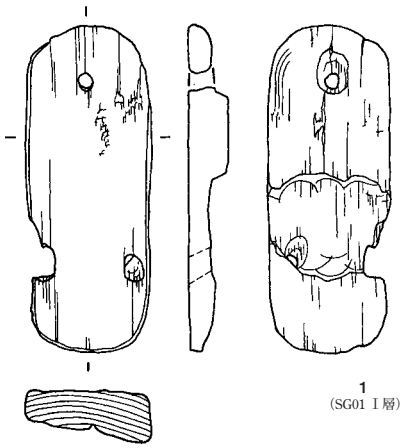
番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	銭貨名	分類	素材
1	第52図	B	SG01 Ⅱ層	LX50	寛永通寶	新寛永	銅
2	第52図	B	SG01 Ⅱ層	LS50	寛永通寶	新寛永	銅
3	第52図	B	撹乱	LR-LS50	寛永通寶	新寛永	銅

表15　Ｂ区石製品属性一覧

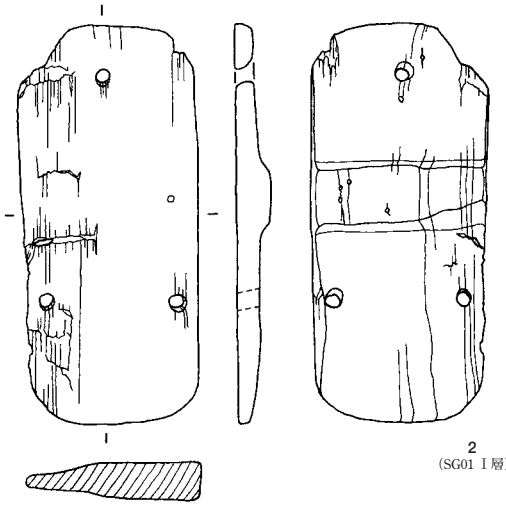
番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	器種
2	第52図	B	撹乱	LS-LT50	砥石

表16　Ｂ区骨製品属性一覧

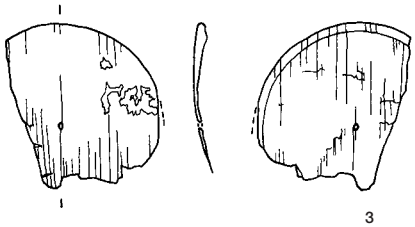
番号	図番号	調査区	出土地点・層位	グリッド	器種
1	第52図	B	SG01 Ⅰ層	LT50	不明



1
（SG01 Ⅰ層）



2
（SG01 Ⅰ層）

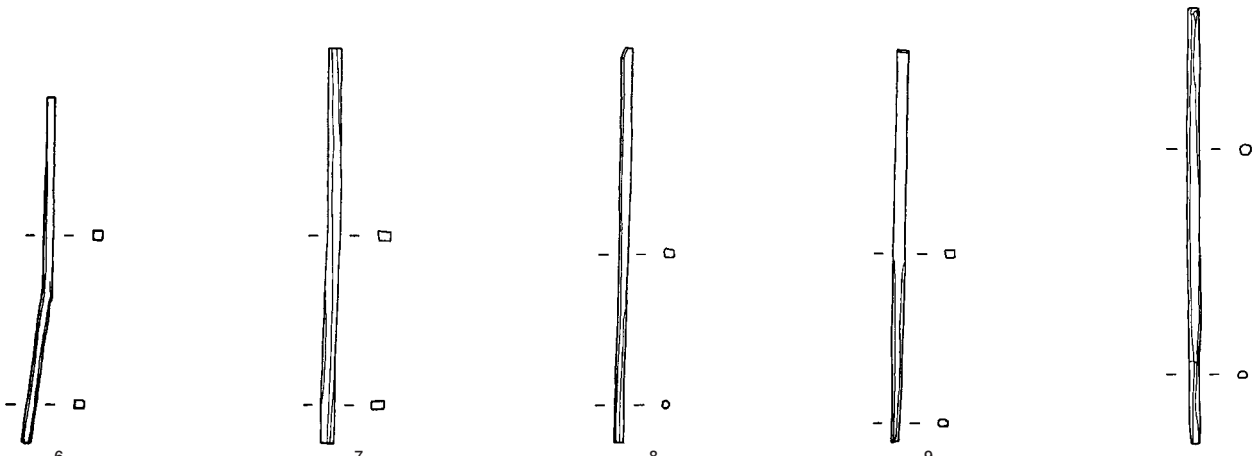


3
（SG01 Ⅰ層）

SG01 Ⅰ層出土

4
（SG01 Ⅱ層）

5
（SG01 Ⅱ層）



6
（SG01 Ⅱ層）

7
（SG01 Ⅱ層）

8
（SG01 Ⅱ層）

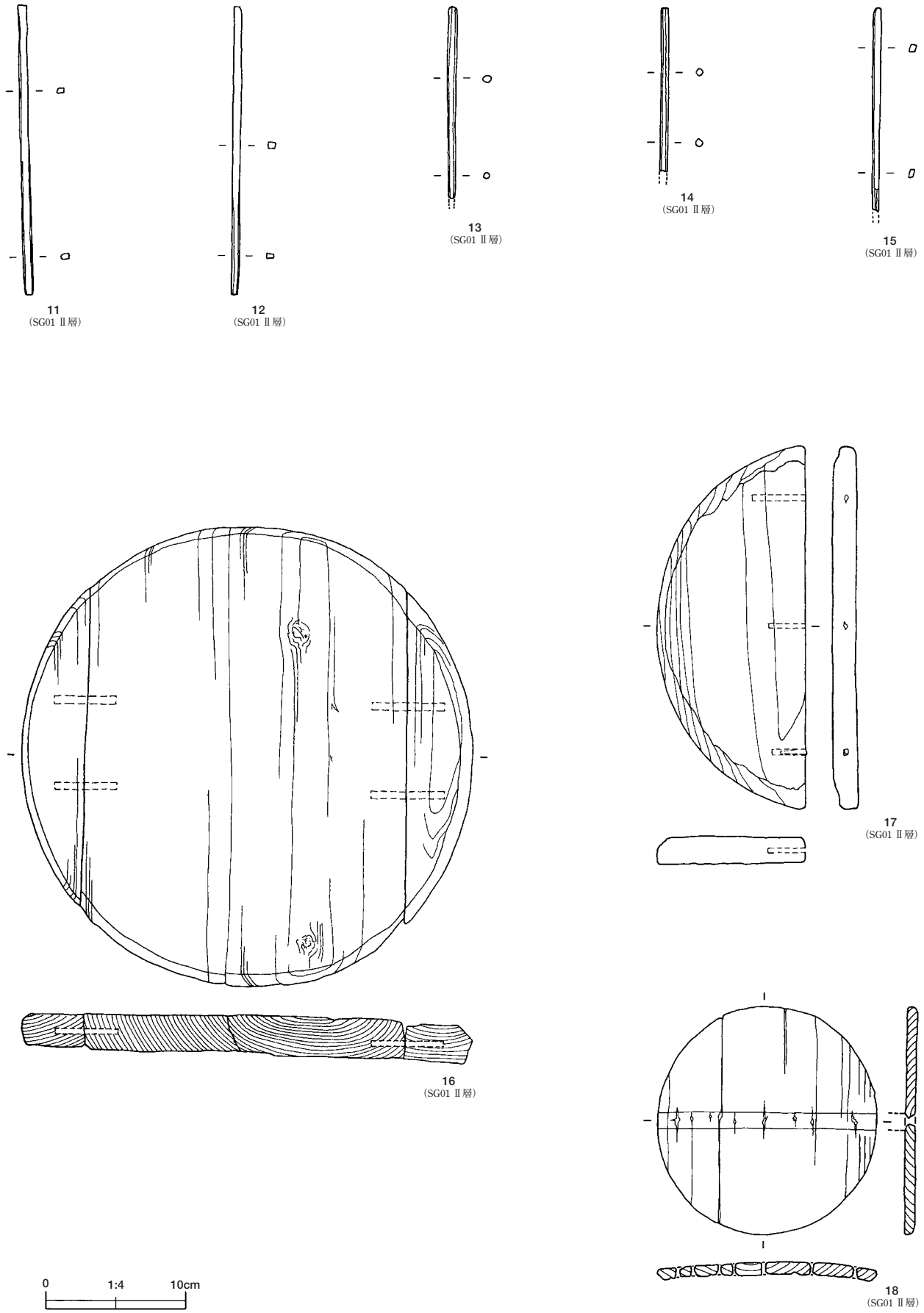
9
（SG01 Ⅱ層）

10
（SG01 Ⅱ層）

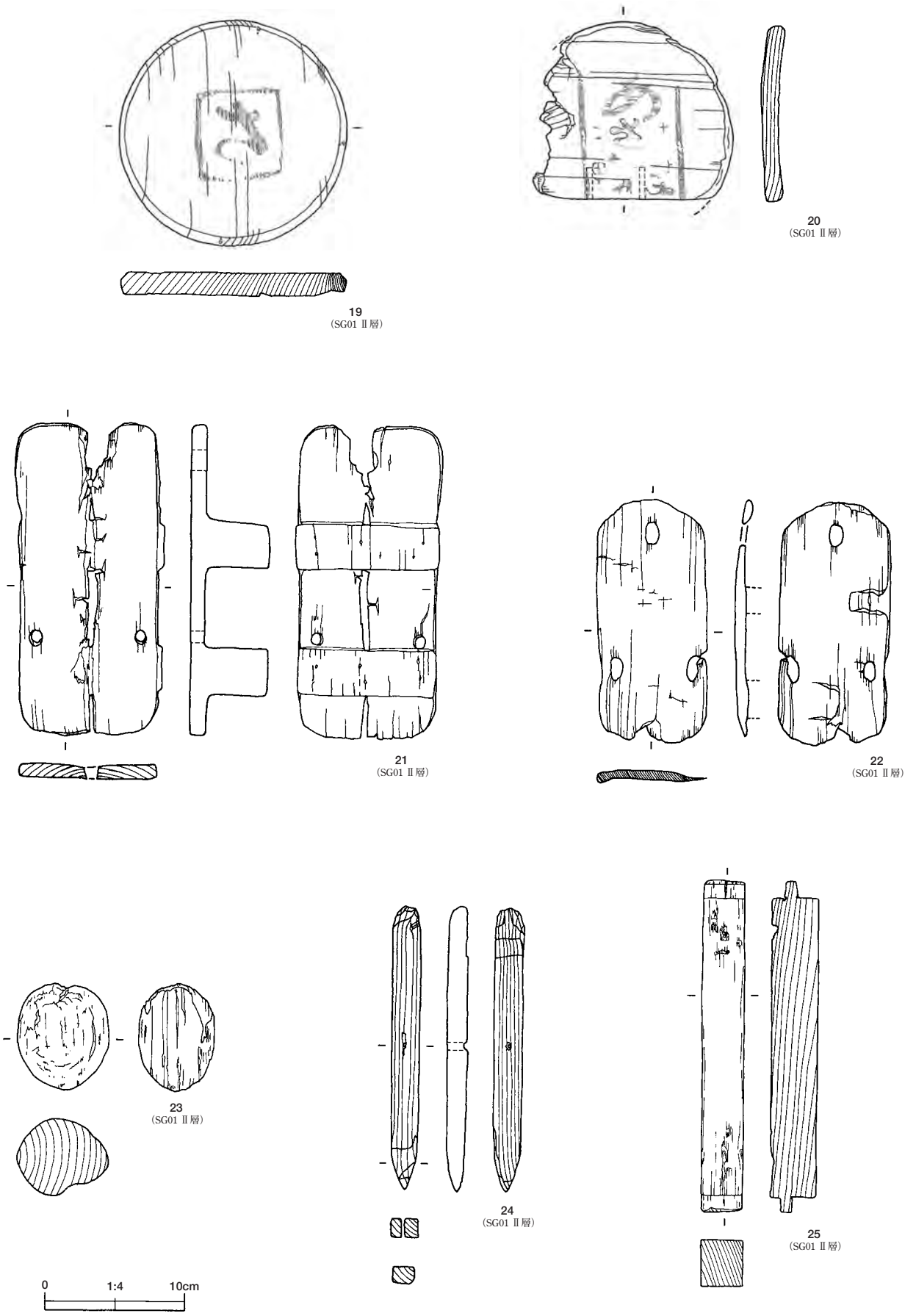
SG01 Ⅱ層出土

0　1:4　10cm

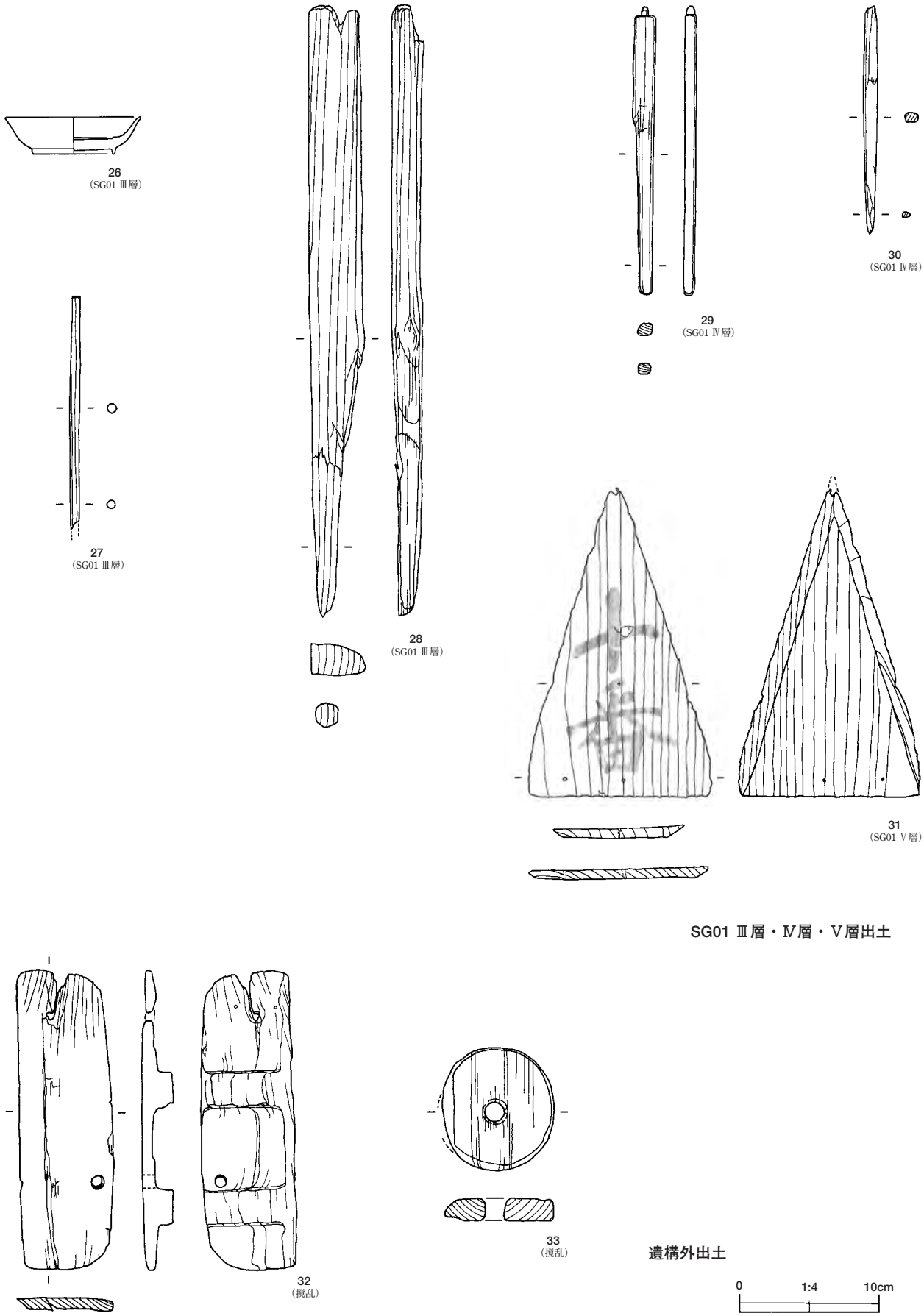
第47図　Ｂ区　木製品（SG01 Ⅰ層、Ⅱ層出土①）



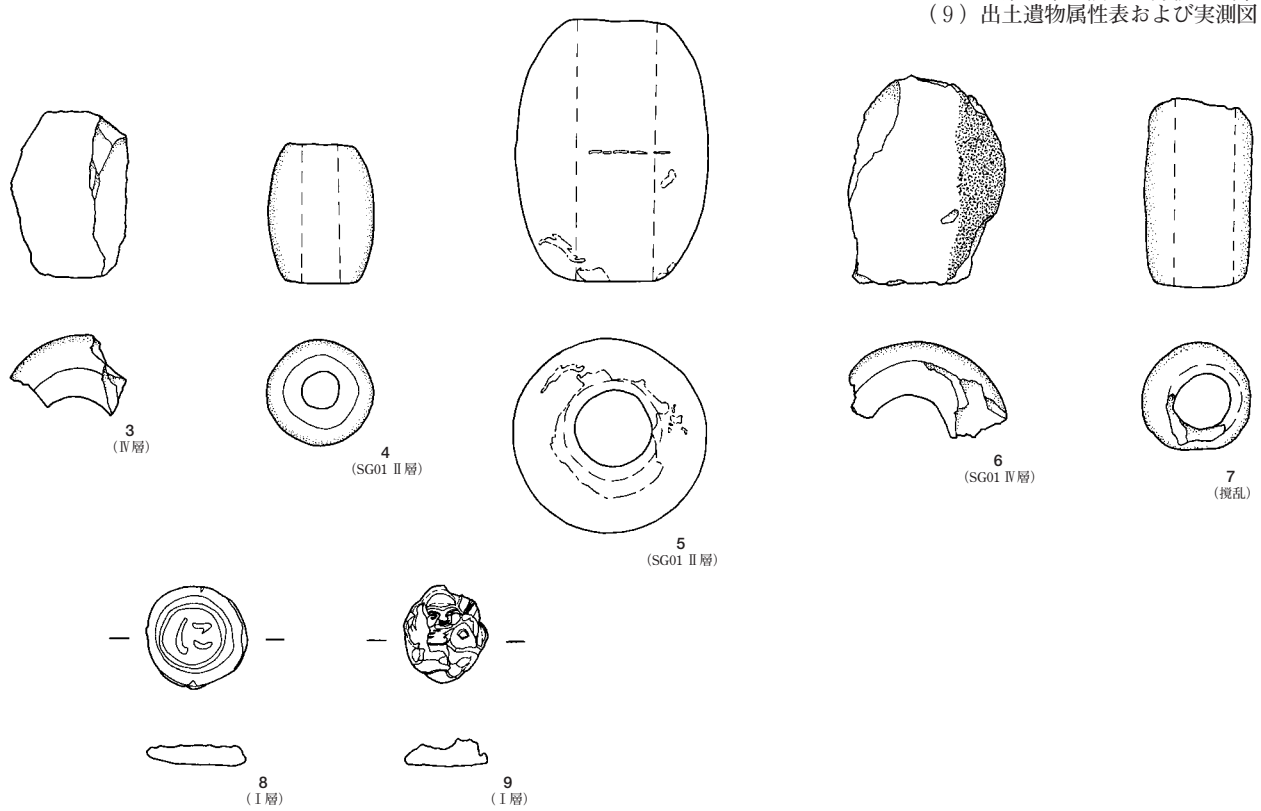
第48図　Ｂ区　木製品（SG01 Ⅱ層出土②）



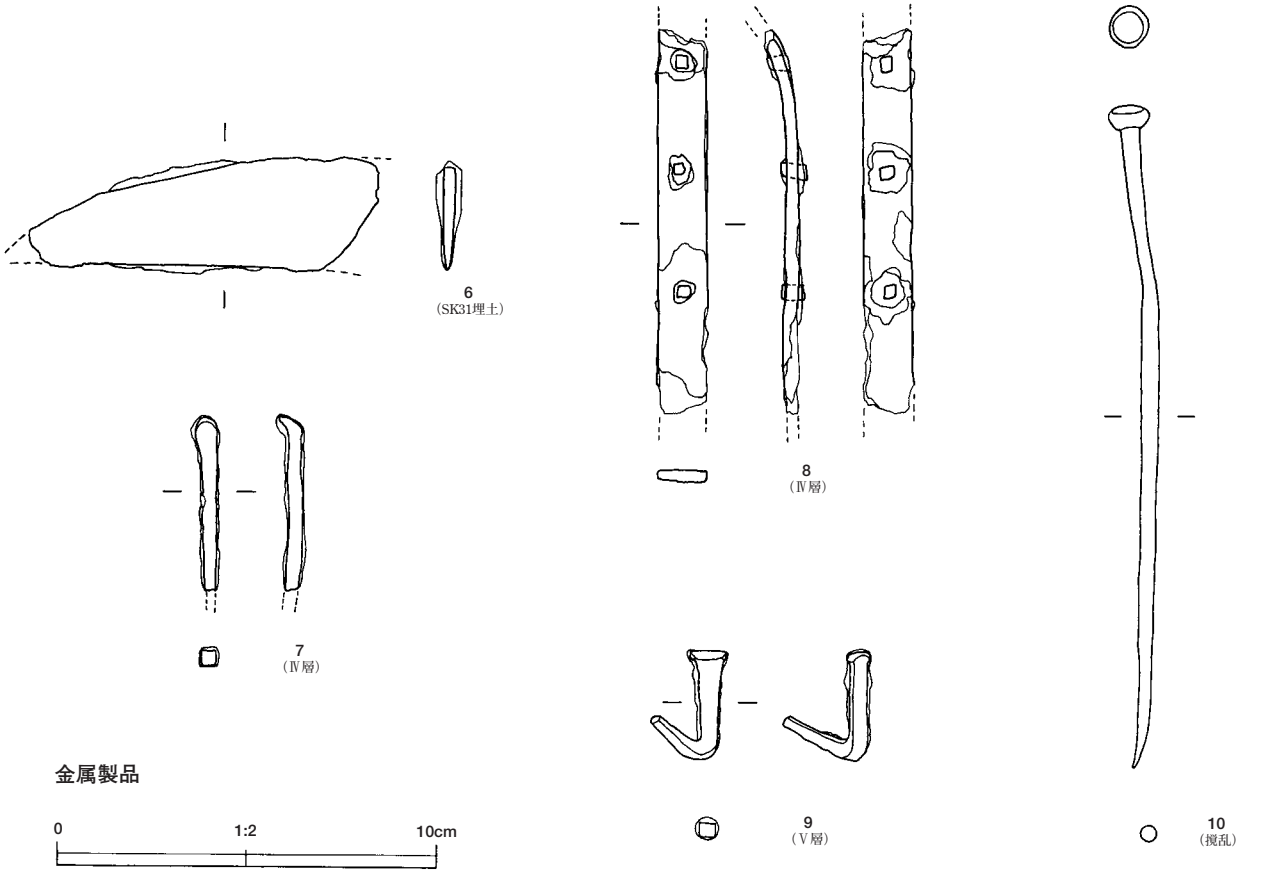
第49図　Ｂ区　木製品（SG01 Ⅱ層出土③）



第50図　Ｂ区　木製品（SG01 Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層、遺構外出土）



土製品



金属製品

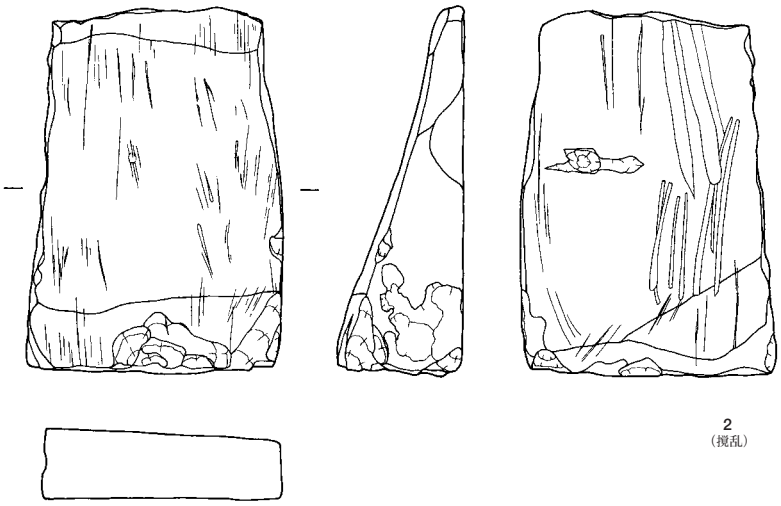
第51図　Ｂ区　土製品、金属製品

1
（SG01 Ⅱ層）

2
（SG01 Ⅱ層）

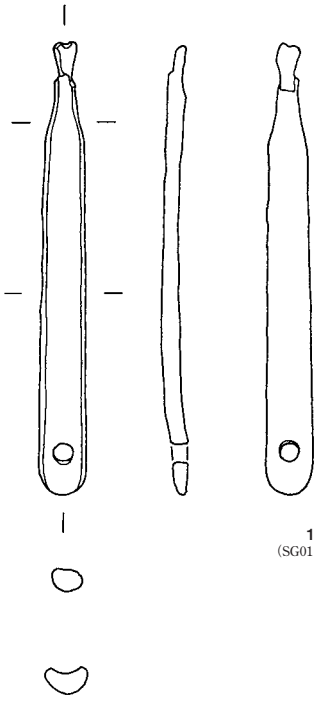
3
（撹乱）

銭貨



2
（撹乱）

石製品



1
（SG01 Ⅰ層）

骨製品

0　1:2　10cm

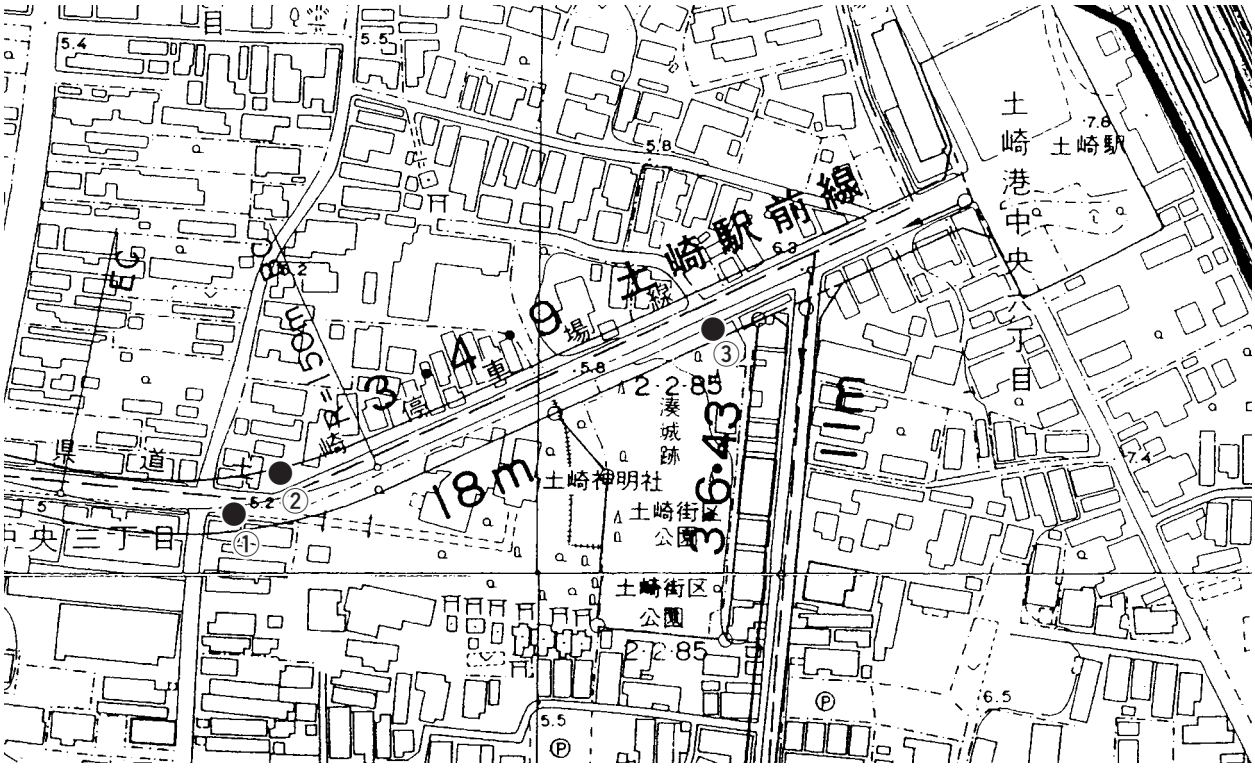
第52図　Ｂ区　銭貨、石製品、骨製品

（10）ボーリング調査について

発掘調査に関連して、平成19年２月５日～７日に調査地周辺でボーリング調査を実施した。実施箇所を３カ所（①～③）設定し、地下５ｍまでボーリングを行った（第53図）。本調査は、湊城の内堀の位置を確認するためであり、発掘調査で確認できなかった内堀東側の西岸と（調査箇所③）、内堀西側の位置を確認するためである（調査箇所①、②）。各地点ごとの調査結果を記述する。

調査地①（標高　4.98ｍ）

深度（㎝）	土質
GL～25	灰褐色砂混じり礫
25～130	灰褐色砂質土
130～160	暗褐色砂質土（やや有機質）
160～180	暗灰色砂質土（有機物混じる）
180～200	暗褐～灰褐色有機物混じり砂質土（粘土有機物混じる）
200～235	褐灰色砂質土（有機質土の薄層を挟む）
235～330	褐灰砂
330～490	灰黄～黄褐色砂
490～500	黄褐色砂



第53図　ボーリング調査位置図①～③（S=1/2,500）

調査地①は、ボーリング調査と平成17年度湊城跡発掘調査の結果と合わせて検討すると、深さ130～235㎝は中近世の整地層である。深さ235㎝以下は有機物がなく、固く締まった砂のみが確認されたことから、地山飛砂層と考えられる。この地点において、湊城の内堀と考えられる痕跡は確認できなかった。

調査地②（標高　5.30ｍ）

深度（㎝）	土質
GL～10	砕石
10～40	黄褐色砂
40～110	灰褐色砂質土（やや有機質）
110～140	黒色砂質土（やや有機物、炭化物混じる）
140～150	褐灰色砂
150～290	黄灰色砂（200～220で有機物混じる）
290～500	黄褐色砂

調査地②は、深さ110～140㎝は近世以降の整地層と考えられる。深さ140㎝以下は固く締まった砂のみが確認されたことから、地山飛砂層と考えられる。この地点において、湊城の内堀と考えられる痕跡は確認できなかった。

調査地③（標高　6.17ｍ）

深度（㎝）	土質
GL～110	灰褐色砂質土（発掘調査済み）
110～158	灰褐～褐色砂質土（有機物含む）
158～170	灰褐～黒色有機質土（未分解の有機質土）
170～245	灰褐色砂（下部で有機物混じる）
245～260	黒色腐植土（未分解の有機物が多量に混じる）
260～310	褐色有機物混じり砂（有機物混じる）
310～330	褐灰色砂
330～500	黄褐色砂

調査地③は、ボーリング調査と平成18年度発掘調査の結果から、深さ110～158㎝は近世の整地層および堀の埋土と考えられる。深さ158～260㎝は徐々に埋まった埋土と考えられる。さらに、深さ310㎝以下は有機物が混じらないことから、深さ260～310㎝が当初の堀の底部であり、湊城内堀の底部と考えられる。

ボーリング調査の結果、湊城の内堀の深さは確認されたが、当初の目的である内堀西側および湊城当時の内堀東側西岸は確認できなかった。しかし、平成18年度発掘調査において、Ｂ区MB50グリッド内では標高約4.9ｍで地山飛砂層が確認され堀跡の範囲外であったこと、LZ50グリッド内において内堀底部が標高3.07～3.57ｍであることなどから、MA50グリッド内に湊城の堀東側西岸があると考えられる。

第４章　まとめ

第１節　検出遺構とその年代について

Ａ調査区およびＢ調査区の第Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ層面で遺構が検出された遺構と、出土遺物の年代から、その性格について考察したい。

（１）Ａ区

①第Ⅲ層について

第Ⅲ層からは、土坑１基のみ検出されたが、遺物が出土しなかったことから年代は不明である。また、他に遺構が検出されないこともあり、第Ⅲ層の性格は不明である。

第Ⅲ層の年代は出土遺物より、19世紀後半以降と考えられるが、近代の遺物も混じることから後世に造成工事等で撹乱、削平された江戸時代末期から明治時代の造成土と考えられる。

②第Ⅳ層について

第Ⅳ層からは、溝跡25条、土坑４基、ピット4基が検出された。遺構内で出土した遺物から、遺構廃絶年代は19世紀前葉～中葉と考えられる。検出遺構の特徴は、同方向・同規模の溝跡で、１～17号および22～24号溝跡は南北方向、19～21号および25号溝跡は東西方向に並び、幅は15～45㎝で、同様の断面形を呈することから、江戸時代以降の畑の畝跡と考えられる。第Ⅲ、Ⅳ層は近代以降の撹乱により発見されない場所が多く、Ａ区東側ではほとんど遺構は認められなかった。

第Ⅳ層の年代は、出土遺物から18世紀後半～19世紀前半で、『元文年中湊古絵図』（1730～1740年）（第５図）から推定される調査地が畑として描かれている。

③第Ⅴ層について

第Ⅴ層からは、土坑24基、ピット15基が検出され、その内、径２ｍ弱の土坑が４基（SK24～26、29）検出された。25号土坑では遺物は出土しなかったが、他の３基の出土遺物は、16世紀中葉から17世紀前葉の明朝時代の中国産貿易陶磁器や、白色系から淡褐色を帯び浅身の京都系手ずくねかわらけが出土している。24号土坑出土のかわらけの特徴は、口径が約20㎝、器高が1.9㎝、口縁部が外反せず直線的で、口縁端部から１㎝くらい下の器肉が0.5～0.6㎜の厚手となっている。これらの特徴は京都出土のいわゆる土師器Ⅲの編年によると「16世紀中葉には口縁部は外反せず直線的、体部には二段の強いヨコナデが施されている。同後葉には一段ナデとなり、口縁端部から１㎝くらい下の厚さは0.5㎜となり厚手である」（伊野1995）とされる。また、京都産の口径は16.8㎜、13.2㎜、10㎜の三つに分けられる。湊城跡出土のかわらけは、全体がやや摩滅しているものの、ナデは見られず、口径も京都産の規格にはあてはまらないことから京都産土師器Ⅲを模倣したものと考えられる。かわらけの用途は、「饗宴の器としての使用法が強調されているが、別の用途として灯明Ⅲ、酒器、おかず入れ（塩入れや味噌入れなどを含む）などに使用され、また墨書によって祭祀に使用されたことが明らかな物がある」（伊野1995）とされている。今回出土したものの中には煤状の付着物が見られたことから灯明Ⅲへの転用が考えられる。

第Ⅴ層の年代は出土遺物から安土桃山時代～江戸時代初頭と考えられる。

（２）Ｂ区

①第Ⅲ層について

第Ⅲ層からは土坑が２基検出されたが、年代は不明である。また、ほかに遺構が検出されないこともあり、遺構の性格も不明である。

第Ⅲ層の年代は、Ａ区と同様に出土遺物から19世紀以降と考えられるが、近代の遺物も混じることから江戸時代末期から明治時代を通じた整地層であり、後の時代に造成工事を行う際などに撹乱・削平されたと考えられる。

また、Ｂ区LR～LY50グリッドにおいて１号堀跡を検出したが、詳細についてはまとめて後述する。

②第Ⅳ層について

第Ⅳ層からは、溝跡が４条、箱状遺構が１基検出された。溝跡は、Ａ区で検出されたものと類似しており、同様な畑の畝跡かつ同時代のものと推測される。箱状遺構は埋設された状態で検出されたが、周りに明確な掘り方は確認できなかった。畑に関係して使用されたものか、堀の側で使用するためのものかは不明である。

第Ⅳ層の年代は、Ａ区と同様に出土遺物や絵図から18世紀～19世紀前半と考えられる。

③第Ⅴ層について

第Ⅴ層からは、溝跡３条、土坑５基が検出された。溝跡は全て東西方向に延びている。

第Ⅴ層の年代は、出土遺物が少ないため明確ではないが、17世紀以前と考えられる。

（３）堀跡

調査区Ｂ区東側は、昭和30年代まで一部分に水をたたえて池のようになっており、絵図で描かれている湊城の堀の痕跡が残っていた。その後埋め立てられて道路になっている場所である。

LR～LZ50グリッドで第Ⅰ層を除去して検出した。この時点では、LY50グリッド軸付近で土色が変わり、堀の西岸と考えた。昭和30年代まで残存していた東側堀の護岸用に組み合わされた縦に打ち込まれた杭とその杭に番線によって縛られた横木が検出されたが、それぞれの横材はボルトによって連結されていた。この護岸用杭から東側では、コンクリート護岸が上層に現れ、その両側には堀を埋立てる過程で廃棄された近・現代の生活用品、江戸期の陶磁器、木製品等が大量に廃棄されていた。

しかし、近代の護岸設備を取り除いて掘り進めた結果、以前の堀はさらに幅の広いものであったことが確認された。LR～LX50グリッドの全体に広がっていた植物堆積層が、LY～LZ50グリッドにも続いていることが確認され、この植物堆積層は水の底に植物が堆積したものであり、この場所が当時底であったことを物語っている。堀跡の両岸および埋土の堆積状況確認のため、LR～LZ50グリッドにおいて北側半分にトレンチを設定して掘り進めた。西岸は、LZ50グリッド付近で植物堆積層の立ち上がりが確認され、この深さの時点で湧水が激しく、壁の崩落部分が増えてきたため調査の続行は困難と判断し終了した。しかし、その後のボーリング調査（前述）で、立ち上がりと思われた部分の下層にさらに植物堆積層が存在し、約1.5ｍ下まで続いていることが確認され、さらに西側に広がっていることがわかった。しかし、湊城当時の堀跡西岸の場所を確定することはできなかった。なお、調査区Ｂ区MB50グリッドでは植物堆積層は検出されず、最下層で地山飛砂層が確認されたため、MA50グリッド付近に西岸があったと考えられる。調査区の南側にある土崎街区公園の東側には、土塁状の高まりがある。これと調査区の状況を勘案すると、湊城当時の堀西岸と推定される場所は土塁の西端付近まで広がっていたので、

この土塁は湊城当時に造られたものではないと考えられる。造成時期は不明だが、土塁の東端は標高約4.6ｍで検出された２段階目の堀西岸の場所とほぼ一致するため、神明社の境内地を広げるにあたり、堀の一部を埋め立て、そのときに護岸のために造られたと考えられる。

東岸については、明黄褐色砂の層がLR50グリッド内標高約4.9ｍ付近で検出され、LT50グリッド以降は検出されなかったことからLT50グリッド付近が東岸かと考えられたが、さらに下層から植物堆積の混じった層が検出されたことから、この明黄褐色砂層は地山飛砂層ではなく堀埋土である。LT50グリッド付近の立ち上がりは、昭和期の堀跡や２段階目の堀跡のものかは不明であるが、湊城当時の堀跡東岸は確認できなかった。しかし、植物堆積が混じる層は調査区外に延びているが、はっきりとした植物堆積層ではないため東岸はこの付近であると考えられる。

現在の状況と比べると、土塁部分、公園東側の民家の列、その隣の道路部分の３つの範囲が湊城当時の堀跡の幅と推測される。また、調査区北側に同じ程度の幅の区画で、不自然に曲がっている部分があり、堀跡の名残と考えられる（第２図）。

今回の発掘調査で、『元文年中湊古絵図』（第５図）や『湊町古絵図』（第６図）で描かれている堀、『出羽国風土略記』の記述にある水堀の存在を確認することができた。また、調査地内においての堀跡の範囲を確定することはできなかったが、大体の幅を把握することができた。さらにボーリング調査によって、西岸に近い場所とはいえ、湊城当時の堀跡の底が標高約3.0ｍであり、当時の深さが1.5ｍ以上の深さがあったことがわかった。

第２節　出土遺物について

遺物の種類は、土器・陶磁器・木製品・土製品・金属製品・銭貨・石製品・瓦・骨製品・動物遺存体などが出土している。全体の出土量は、整理作業後の収納時で、コンテナ（54×34×15㎝）で30箱であり、そのうち陶磁器は特に多く16箱で全体の約53％を占める。種別ごとの器種構成や様相については、以下のように概括される。

（１）土器・陶磁器について

陶器は灰釉や鉄釉等の施釉陶器などが出土している。磁器は染付・色絵・青磁・白磁等が出土している。器種構成としては、碗・皿・鉢類などの食膳具、瓶類などの貯蔵具、火入・火鉢・土風炉などの火具、ひょうそく・灯明皿などの灯火具、香炉・仏飯器・かわらけ等の祭祀具もしくは調度品などがあり、多種多様なものがみられる。

陶磁器類については、年代を問わず生産地の同定が可能なものについて分類を行うと以下のようになる。

①中国産

明朝時代の中国産貿易陶磁器である。

磁器は、白磁・染付が出土している。白磁は、白磁Ｃ群（小野1982）に比定すると考えられる白磁皿などがみられる。染付は、碗や皿があり、染付皿Ｅ群（小野1982）に比定されるものがみられる。これらの貿易陶磁器は、大部分が調査区Ａ区の第Ⅴ層及び第Ⅴ層検出遺構において確認されている。

②肥前系（唐津系）

九州肥前系地方の窯で生産されたもの及び肥前の技術・技法を直接取り入れて生産されたものであ

る。陶磁器の中ではもっとも出土量が多く、大半を占める生産地である。

陶器は、1610～1630年頃の砂目積み痕のある灰釉溝縁皿に始まり、18世紀代の蛇ノ目釉剥ぎを施す灰釉皿までみられる。その中でも17世紀前半にみられる灰釉溝縁皿が最も出土量が多い。器種構成としては、碗・皿・鉢などがある。

磁器は、17世紀前半の染付碗・皿に始まり、19世紀中葉の端反碗・蓋までみられる。その中でも18世紀代の碗・皿が最も出土量が多い。器種構成としては、碗・皿・鉢・蓋・段重・仏飯器・小坏・香炉などがあり、豊富である。種類としては、染付を主体とし、青磁・白磁・色絵がある。波佐見周辺の雑器窯の製品が多く、有田周辺窯のものも少量みられる。

③瀬戸美濃系

美濃を含めた愛知県瀬戸地方周辺で生産されたものである。

陶器は、1480～1530年頃の大窯期の端反皿、16世紀後期の天目茶碗、銅緑釉皿などが少量出土している。

磁器は、19世紀前半の染付小碗・小坏が少量出土している。

④京信楽系

京都地方及び信楽地方などの京都周辺で、京焼の影響を受けて生産されたものである。黄褐色の地に色絵を施す磁器碗などが出土している。

⑤寺内窯

秋田市寺内所在の在地の地方窯で、白岩窯から工人が移動し天明７年(1787)に陶器生産を開始したとされる。天保８年(1736)頃には肥前の技術を間接的に導入し、磁器生産も開始したとされる（小松・日野1991）。明治時代初め(1870年前後)頃まで操業した。陶器は鉢・土瓶、磁器は皿等が出土している。

⑥その他

産地不明陶器・磁器のなかで、東北地方の近世在地窯産のものが含まれている可能性がある。また、土器についても産地の同定は不可能であったが、大部分が近隣で製作されたものと考えられ、寺内窯製品も一定量含まれている可能性がある。土器の中には、京都系手づくねかわらけも確認されている。

出土遺物は肥前系陶磁器が全体の多くを占めている。ＡＢ両区の第Ⅲ、Ⅳ層では、この他に瀬戸美濃系、京信楽系が少量確認されている程度である。しかしＡ区第Ⅴ層においては、肥前系と中国産磁器が同程度を占め、瀬戸美濃系陶器も確認されている。このことは、織豊期から江戸時代初期にかけては中国産磁器や瀬戸美濃系陶器も多く流通していたが、その後江戸期を通して肥前系陶磁器が流通の大部分を占めていく様子を顕著に表している。江戸期のこのような様相は、羽柴氏が指摘するように、北東北日本海側では肥前系が主体となるという流通消費状況と一致すると言える（羽柴1994）。

（２）木製品について

木製出土遺物は比較的多く、飲食器としての椀・箸、容器としての曲物・蓋、履物としての下駄、その他漁業用の浮子などが出土している。下駄は一木下駄が確認され、連歯下駄と刳り下駄のタイプがみられる。椀は漆が塗布されているものがあり、赤漆・黒漆の両者がみられる。その他、堀の土留めを構成する一部として木材が多数出土している。

（３）金属製品について

農具の鎌、建築部材等の接合具である釘、その他火箸などが出土している。昨年度の調査で多数出土した煙管は出土していない。使用される素材は鉄、真鍮がみられる。

（４）銭貨について

３点のみ出土し、すべて新寛永通寶（初鋳1697年）である。

（５）土製品について

土製品は土錘、面子がある。土錘は土師質のものが多く、一つだけ陶質の土錘がある。なお、網漁法で土錘とともに用いられたと考えられる木製品の浮子が出土している。面子は七福神と思われる人物などが描かれているものや、平仮名の「に」が描かれているものある。

（６）石製品について

出土量は少なく、賽と砥石が１点ずつ出土している。

第３節　湊城について

平成18年度調査区からは、ＡＢ両区ともに第Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ層の３層において遺構・遺物が確認された。第Ⅲ層はＡ、Ｂ区ともに19世紀中葉以降の遺構面、第Ⅳ層はＡ、Ｂ区ともに18世紀～19世紀前半の遺構面、Ａ区の第Ⅴ層は16世紀～17世紀の遺構面であることがわかった。しかしＢ区の第Ⅴ層は出土遺物が少なく遺構面の年代は不明である。

平成17年度調査区は、江戸期の町屋敷や湊城の城館の一部が確認され、遺物も多量に発見されている。しかし今年度の調査では町屋敷跡は検出されず、遺物も量が少なかった。このことは、1620年に湊城の跡地に土崎神明社が移ったことや絵図に描かれているものと併せて考えると、この場所は江戸時代に神明社の境内地もしくは隣接する畑で町人の住む場所ではなかったことを示している。そして、湊城期に関する遺構は、土坑や溝跡が確認されたが、城館に関係するものと断定することはできない。ただ、遺構内で15世紀後半～16世紀の遺物が確認され、中国明朝時代の製品やかわらけなど希少価値のあるものが多くを占め、上級社会の拠点があった可能性を示している。

今回確認された堀跡は、上層部分のみの発掘調査であることから、堀造成時の年代を示す底部の遺物を調査することはできなかった。そのため、『出羽国風土略記』にある水堀にあたるのかは確認できなかった。ただ、発掘調査の結果、当初の堀の大きさは深さ1.5ｍ以上、幅30ｍ以上あったと考えられるため、大規模な造成工事であったことは確かである。土崎神明社は絵図等の資料から江戸時代前期以降現在と同じ場所にあるが、水堀を作る必要性があったとは考えられず、反対に境内地を増やすために埋め立てた形跡がある。江戸時代以前に造られたとすればこの地に拠点を置いたとされる安東氏が湊城とともに造成した可能性が高い。しかし、今回の発掘調査地は狭小なこともあり、この地に拠点を置いた時期を断定する遺構・遺物は確認されなかった。今後の調査では、周知の遺跡「湊城跡」に湊城が置かれた時期を確認していく必要がある。

第４節　おわりに

今回の調査は、前年度に引き続き湊城跡の中心部での発掘調査であったが、遺構・遺物ともに前回に比べて少なかった。これは、近接地であっても、町屋敷と神明社の境内地や湊城城館範囲という違いを示していると考えられる。また、堀の形状が狭い範囲にしろ一部分を解明することができたことは今回の調査の大きな成果である。

〔引用・参考文献〕

江戸遺跡研究会編　2001『図説　江戸考古学研究事典』柏書房

大橋康二　2000『肥前陶磁』ニューサイエンス社

小野正敏　1982「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』２ pp.71-88

加藤助吉　1941『土崎港町史』秋田市役所土崎出張所

九州近世陶磁学会編　2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』

小松正夫・日野久 1991『寺内焼窯跡－寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査－』秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所

塩谷順耳他　1999『秋田市史 第八巻 中世 史料編』秋田市

瀬戸市史編纂委員会　1993『瀬戸市史　陶磁史編４』

瀬戸市史編纂委員会　1998『瀬戸市史　陶磁史編６』

瀬戸市埋蔵文化財センター編　2001『瀬戸大窯とその時代』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念企画展図録

瀬戸市埋蔵文化財センター編　2002『江戸時代の瀬戸窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録

瀬戸市埋蔵文化財センター編　2003『江戸時代の美濃窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録

瀬戸市埋蔵文化財センター編　2004『江戸時代の瀬戸・美濃窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録

瀬戸市埋蔵文化財センター編　2006『江戸時代の瀬戸・美濃－三都と名古屋－』平成17年度瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録

田口昭二　1983『美濃焼』ニューサイエンス社

伊野近富　1995「〔３〕中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 pp.225-244

續伸一郎　同上 pp.485-501

東北陶磁文化館編　1987『東北の近世陶磁』

東北中世考古学会編　2003『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院

東北中世考古学会編　2005『海と城の中世』高志書院

羽柴直人　1994「東北地方北部における近世陶磁器の様相－1690～1780の消費状況の集成－」『(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』ⅩⅣ pp.95-118

安田忠市他　2002『藩校明徳館跡－市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書－』秋田市教育委員会

写 真 図 版

湊城跡遠景（南東から）

湊城跡全景（南から）

図版 1

調査地全景

A区第Ⅲ層全景（西から）

図版 2

A区第Ⅳ層調査区西側（西から）

A区第Ⅳ層全景（西から）

A区第Ⅴ層全景（西から）

図版 3

A区調査区中央土層断面西側（西から）

B区第Ⅲ層全景（西から）

B区第Ⅲ層調査区東側（西から）

図版 4

Ｂ区第Ⅴ層全景（東から）

Ｂ区北壁土層断面（南から）

Ｂ区堀土層断面（南から）

図版 5

Ｂ区堀西側岸土層断面（北東から）

ボーリング調査コア写真

図版 6

A区出土遺物

B区出土遺物

図版 7

１号土坑完掘状況（南から）

１～６号溝跡完掘状況（東南から）

７・８号溝跡完掘状況（東から）

Ａ区調査区東側全景（西から）

18・25号溝跡完掘状況（北西から）

19～21号溝跡完掘状況（北から）

22・23号溝跡完掘状況（南から）

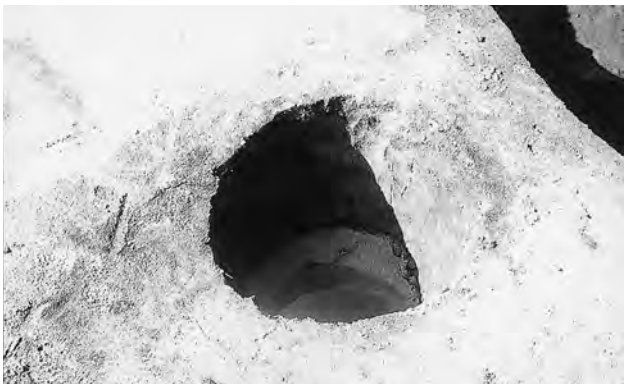
24号溝跡完掘状況（北から）

図版８　Ａ区第Ⅲ、第Ⅳ層①検出遺構

2号土坑完掘状況（南から）

3号土坑完掘状況（南から）

4号土坑半截状況（西から）



6号土坑完掘状況（南から）

20号土坑完掘状況（西から）

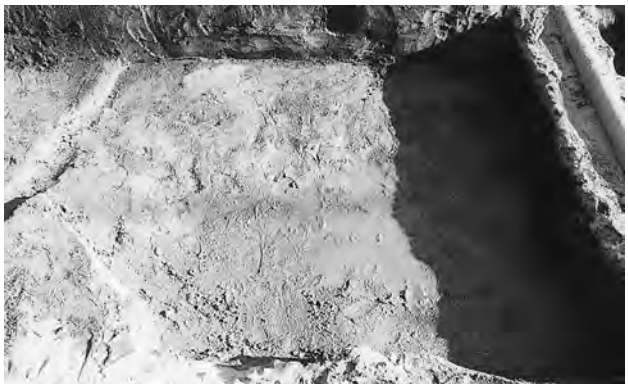
24号土坑半截状況（東から）

24号土坑完掘状況（北から）

25号土坑完掘状況（南から）

図版9　A区第Ⅳ層②、第Ⅴ層①検出遺構

26号土坑完掘状況（西から）



29号土坑完掘状況（北から）

12号ピット半截状況（西から）

30号土坑完掘状況（南から）

31号土坑半截状況（北から）

26～29号溝跡完掘状況（西から）

第Ⅳ層木箱出土状況（南東から）

動物遺存体出土状況（東から）

図版10　A区第Ⅴ層②、B区第Ⅲ層、第Ⅳ層検出遺構

30号溝跡完掘状況（東から）

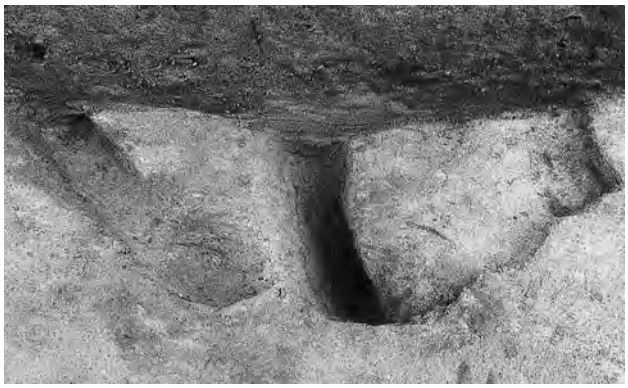
31号溝跡西側完掘状況（西から）

31号溝跡東側完掘状況（東から）

B区31号溝跡内木桶出土状況（北から）

32号溝跡完掘状況（西から）

32号土坑完掘状況（南から）



34号土坑完掘状況（北から）

35号土坑完掘状況（北から）

図版11　B区第Ⅴ層検出遺構①

36号土坑半截状況（南から）

Ｂ区堀土層断面（南から）

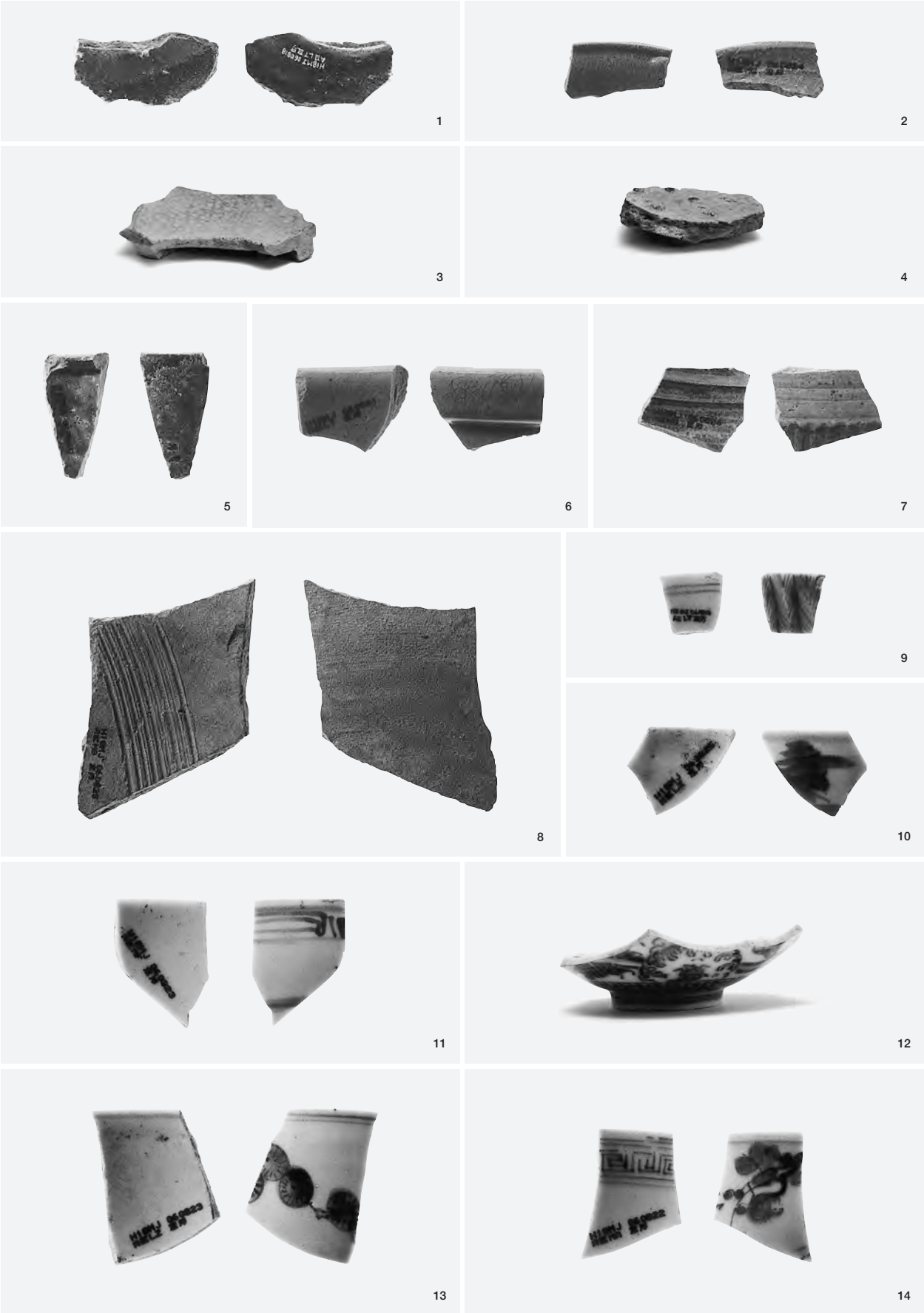
Ｂ区堀西側岸土層断面①（北東から）

Ｂ区堀西側岸土層断面②（北東から）

Ｂ区北壁土層断面（南から）

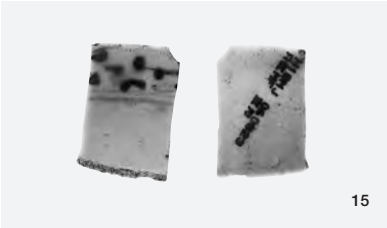
Ｂ区第Ⅴ層全景（西から）

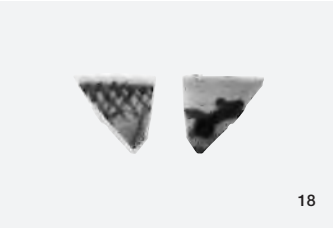
図版12　Ｂ区第Ⅴ層検出遺構②



1～14　A区土器・陶磁器（第Ⅲ層）

図版13


15


18

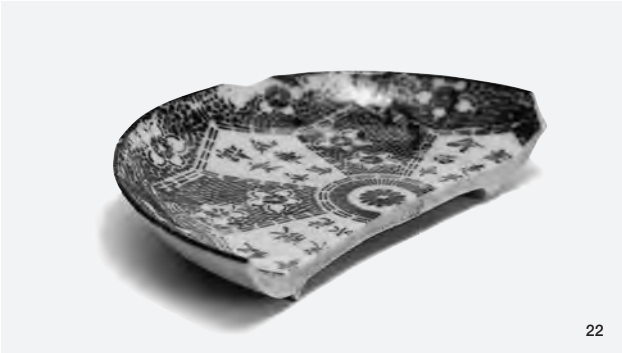
19

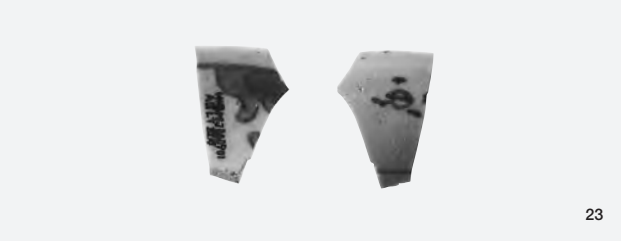
16

20

17

21


22


23

24

25

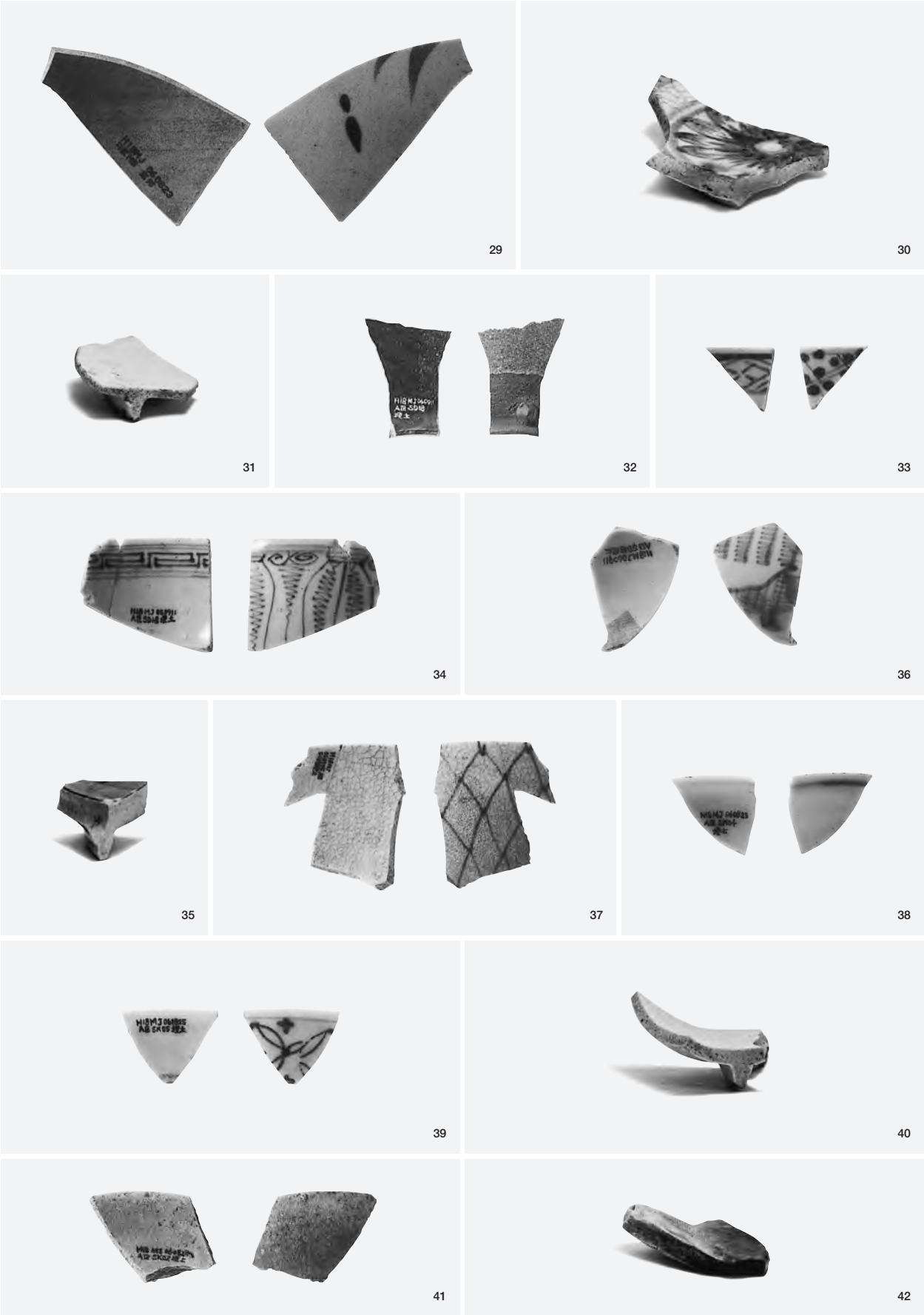
26

27

28

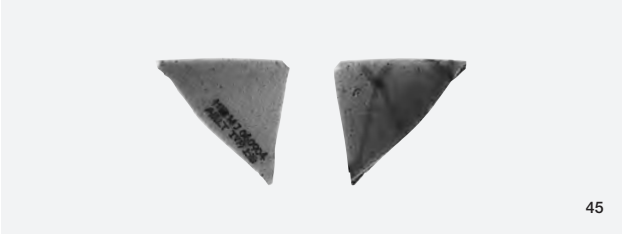
15～28　A区土器・陶磁器（第Ⅲ層）

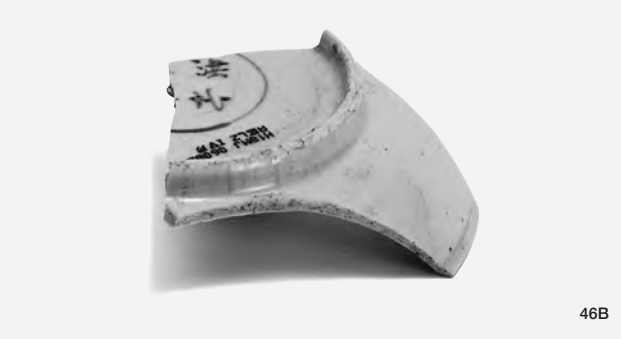
図版14

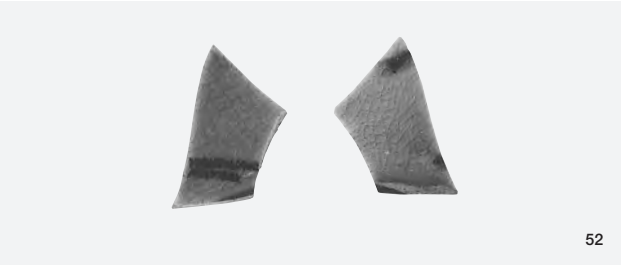


29　A区土器・陶磁器（第Ⅲ層）、30～40　A区土器・陶磁器（第Ⅳ層遺構内）
41・42　A区土器・陶磁器（第Ⅳ層）

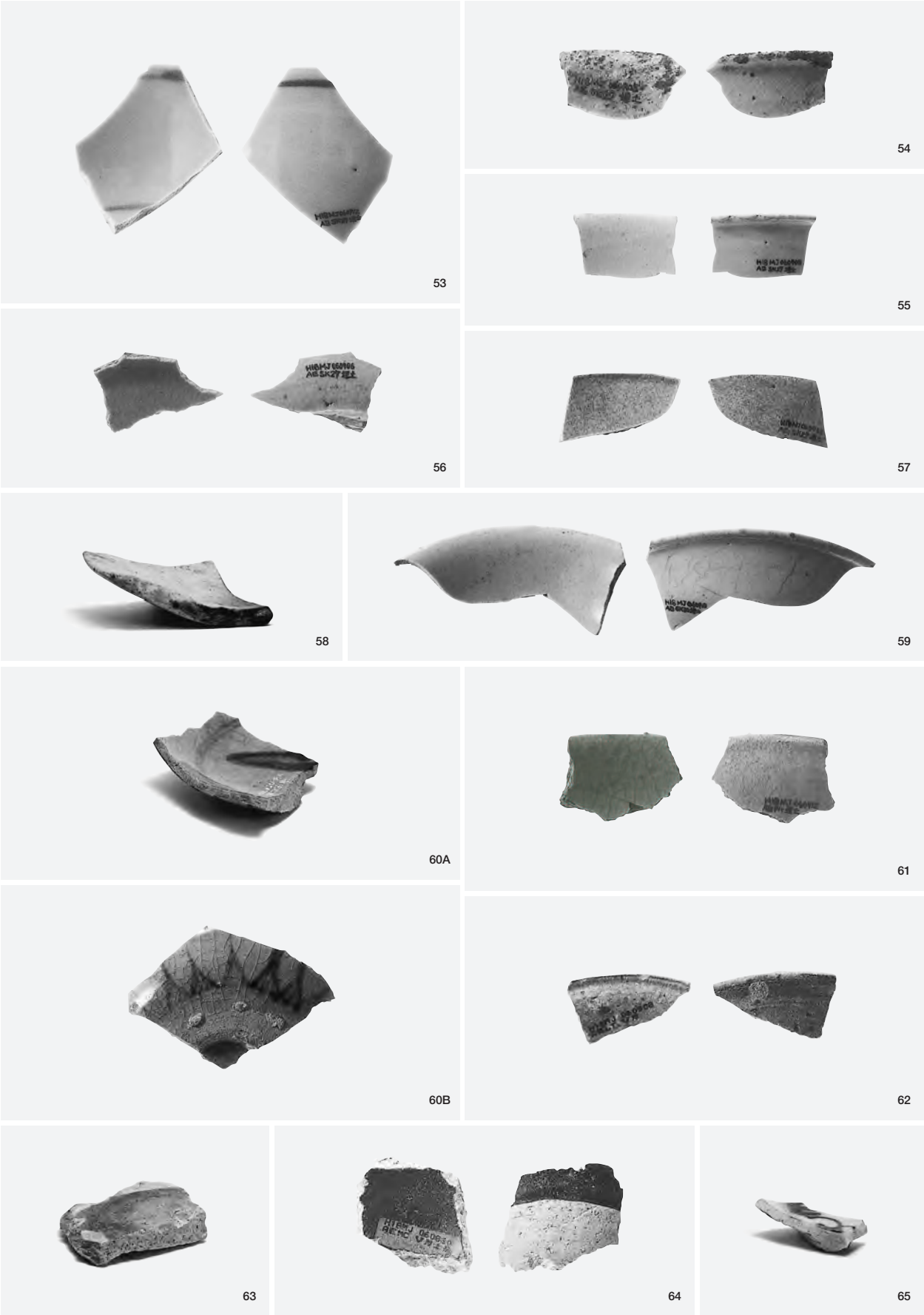
図版15





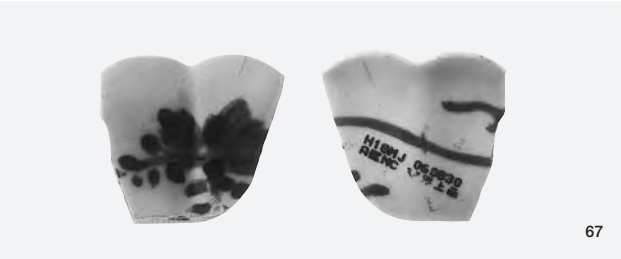


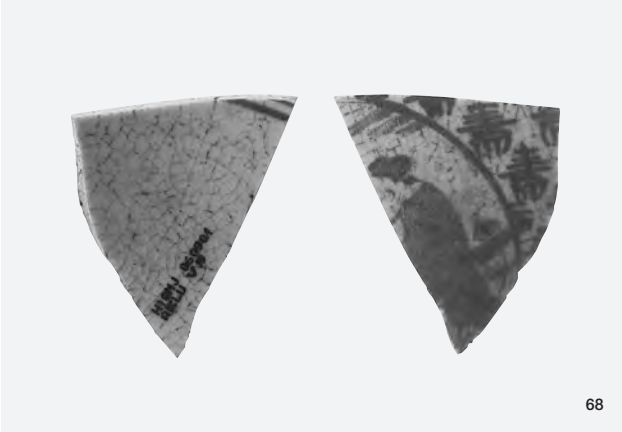
図版16　43～50　A区土器・陶磁器（第Ⅳ層）、51・52　A区土器・陶磁器（第Ⅴ層遺構内）



53～61　A区土器・陶磁器（第Ⅴ層遺構内）、62～65　A区土器・陶磁器（第Ⅴ層）

図版17



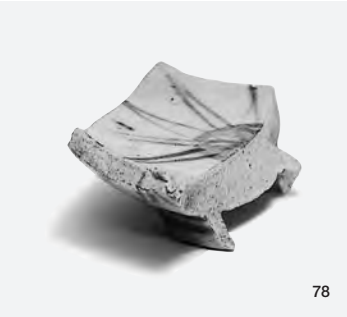


図版18

66～70　A区土器・陶磁器（第Ⅴ層）、71・72　A区土器・陶磁器（第Ⅰ層）
73～75　A区土器・陶磁器（第Ⅱ層）

76

77


78

79

80

81

82

83

84

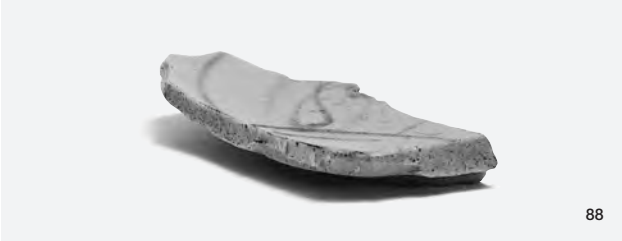
85

86

76～86　A区土器・陶磁器（第Ⅱ層）

図版19

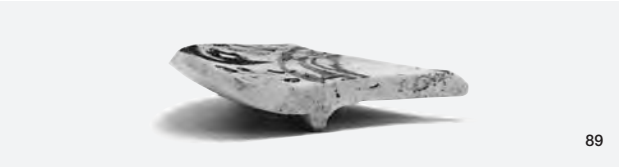
87

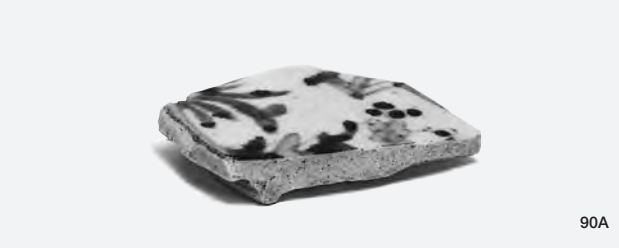

88

91A

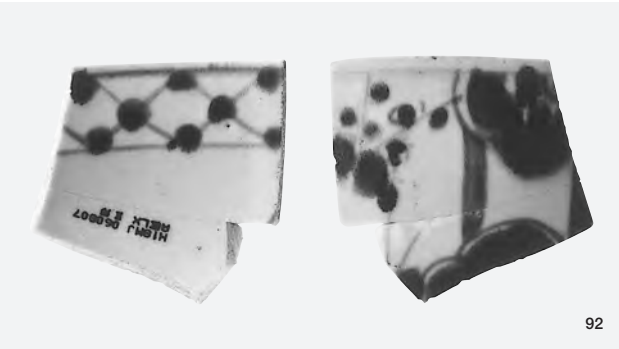
91B

93


89


90A

90B


92

94A

94B

87～94　A区土器・陶磁器（第Ⅱ層）

図版20

95A

95B

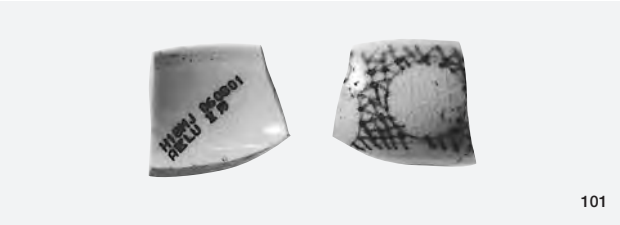
98

99

96

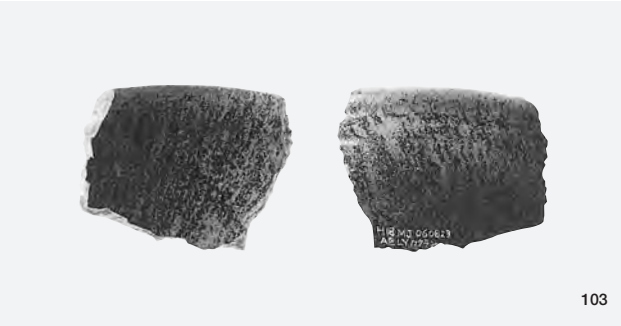
97

100


101

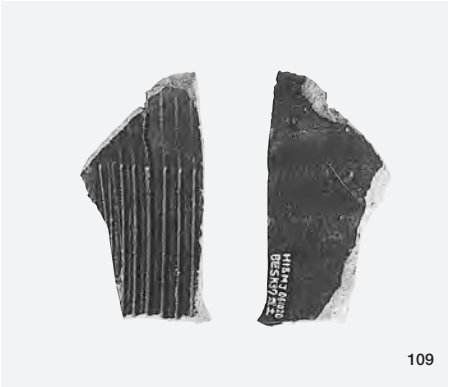
95～101　A区土器・陶磁器（第Ⅱ層）

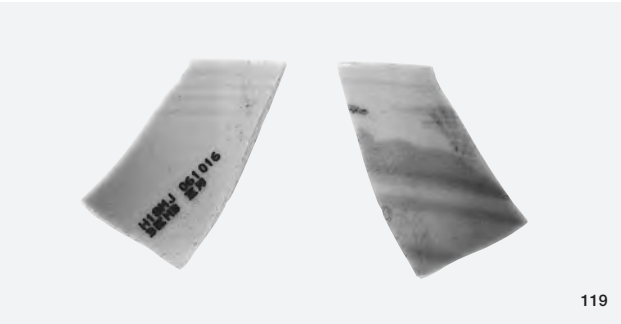
図版21



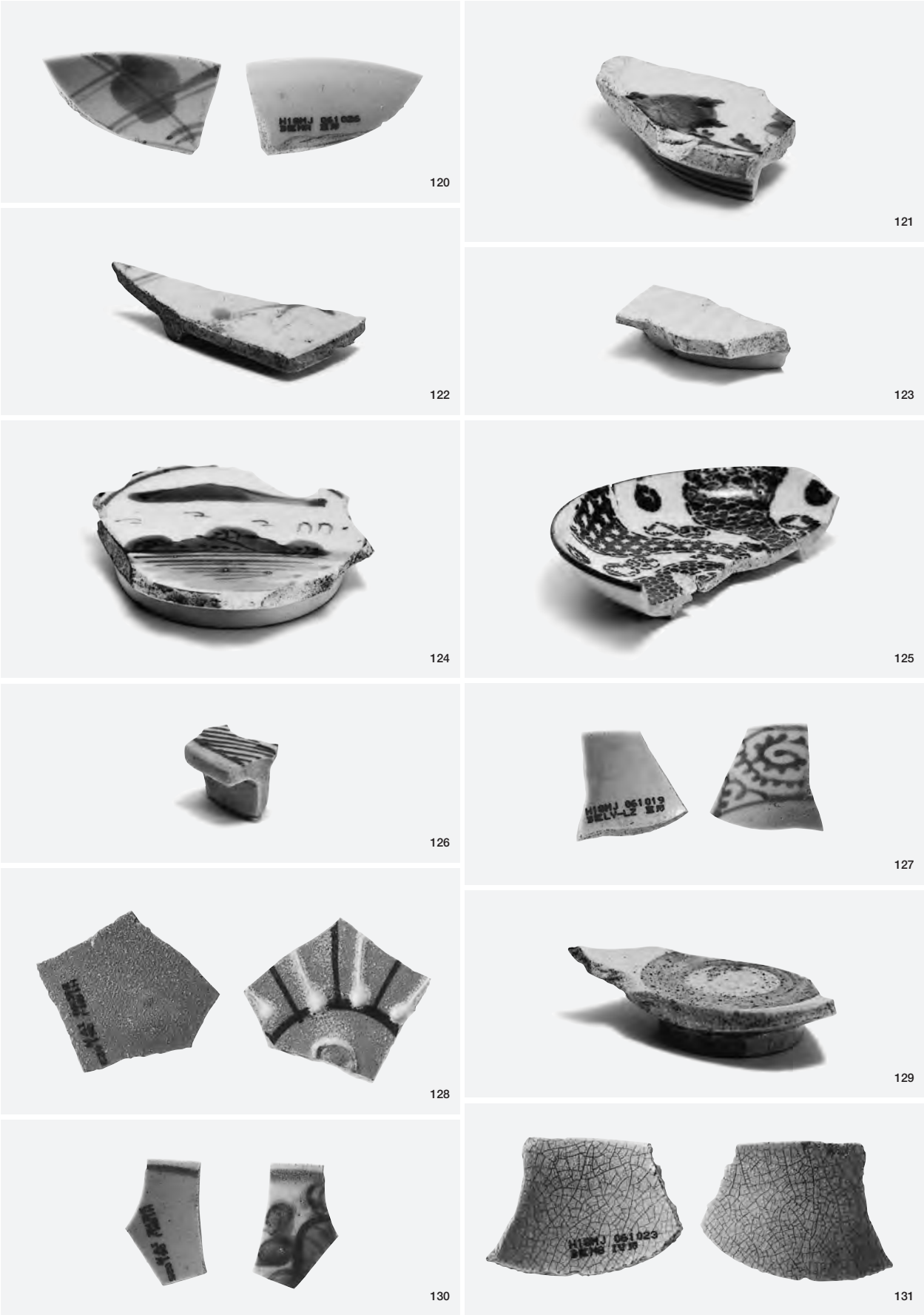
102～108　A区土器・陶磁器（遺構外）、①　A区土製品、②　A区金属製品
③　A区石製品、④　A区瓦

図版22



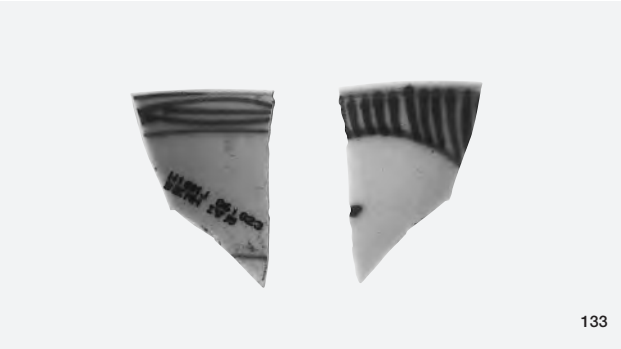


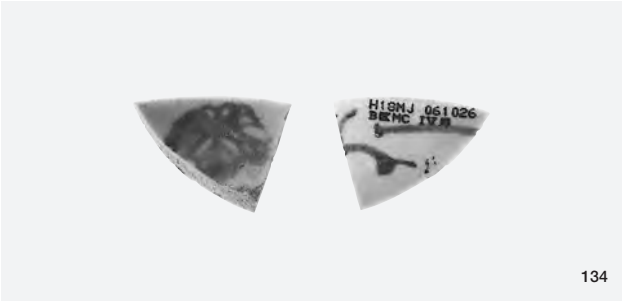
図版23　109・110　B区土器・陶磁器（第Ⅲ層遺構内）、111～119　B区土器・陶磁器（第Ⅲ層）

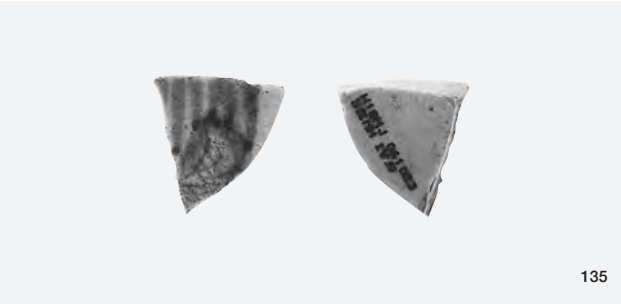


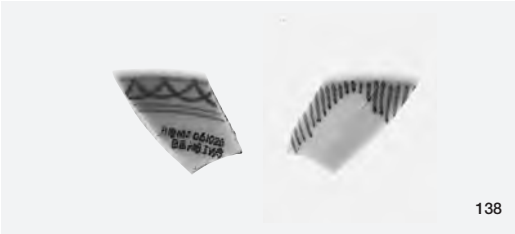
120～127　B区土器・陶磁器（第Ⅲ層）、128～131　B区土器・陶磁器（第Ⅳ層）

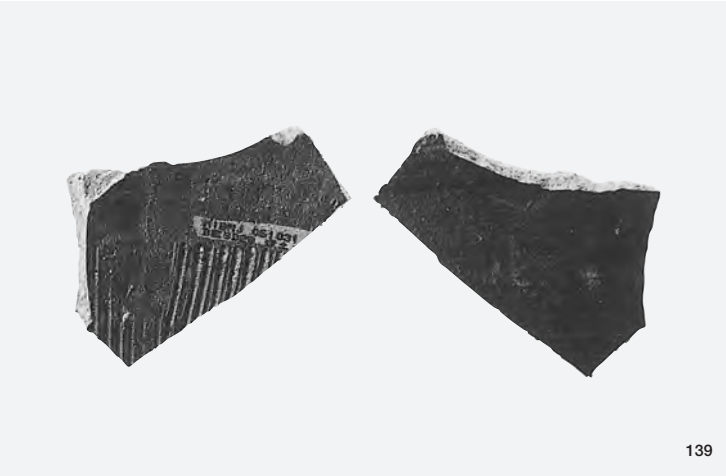
図版24





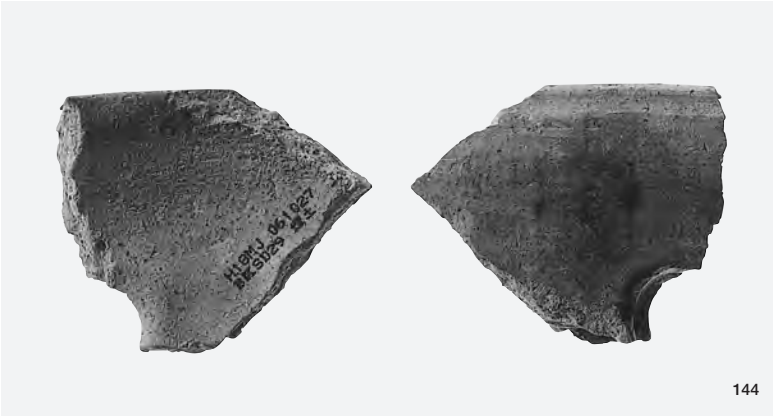


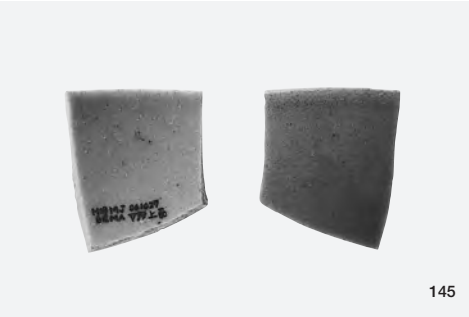




図版25　132～138　B区土器・陶磁器（第Ⅳ層）、139～142　B区土器・陶磁器（第Ⅴ層遺構内）

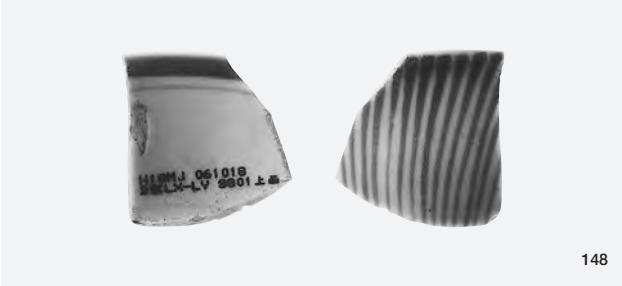
143


144


145

146

147


148

149

150

152

151

153

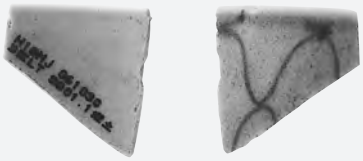
図版26　143・144　B区土器・陶磁器（第Ⅴ層遺構内）、145～147　B区土器・陶磁器（第Ⅴ層）

155

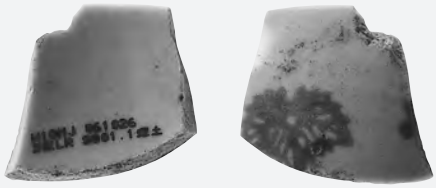
154

156

157



158

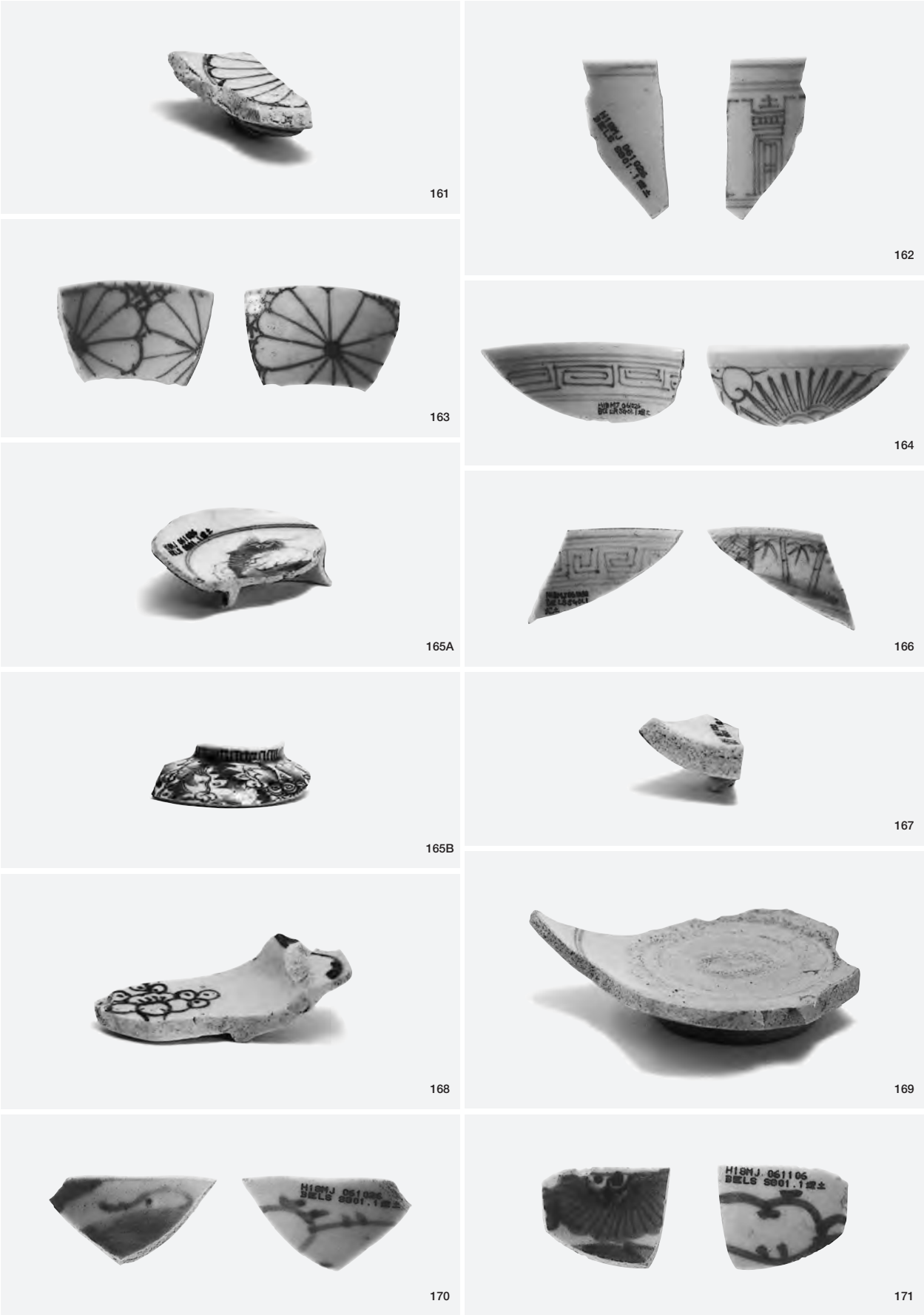


159

160

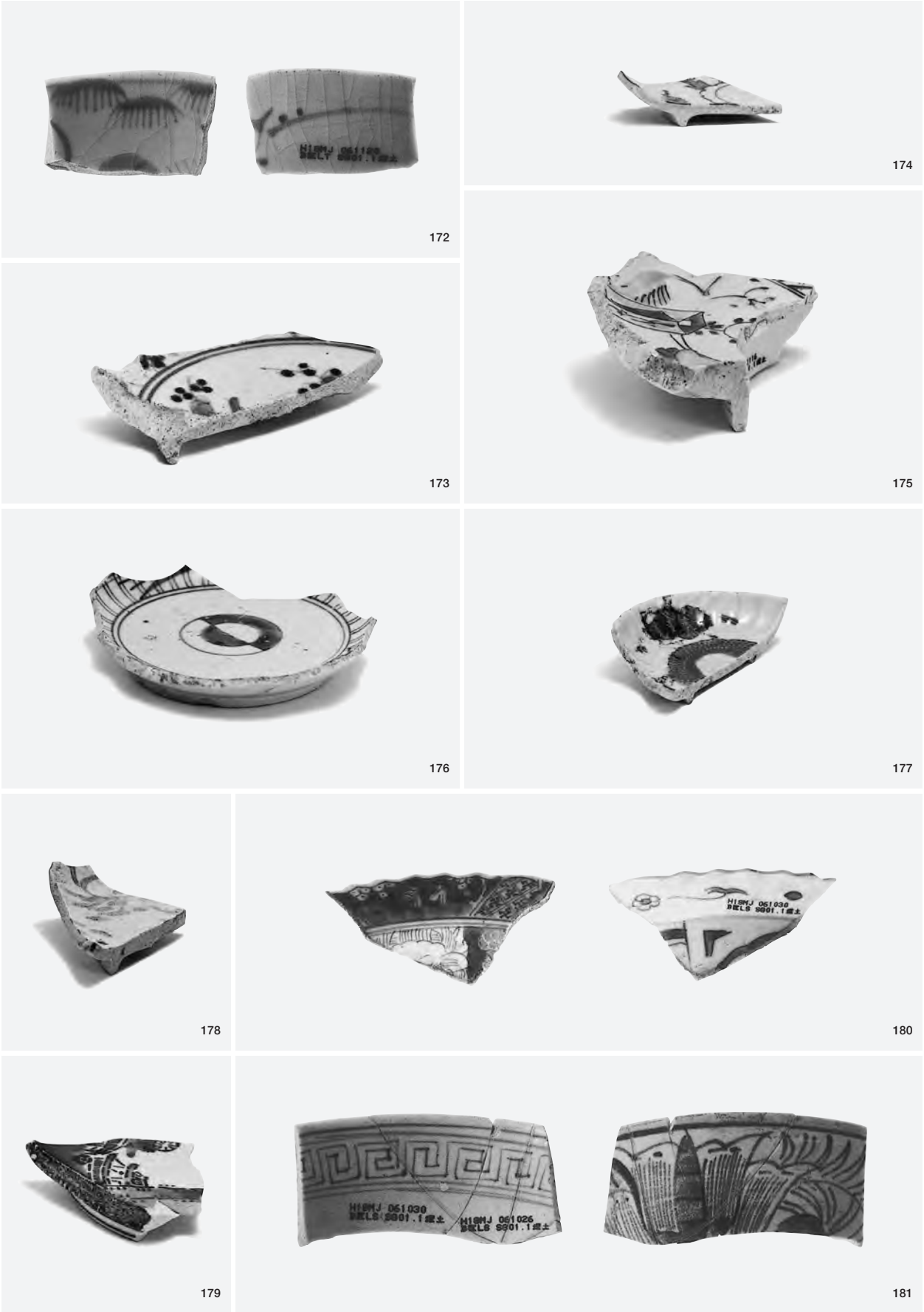
154～160　B区土器・陶磁器（SG01Ⅱ層）

図版27



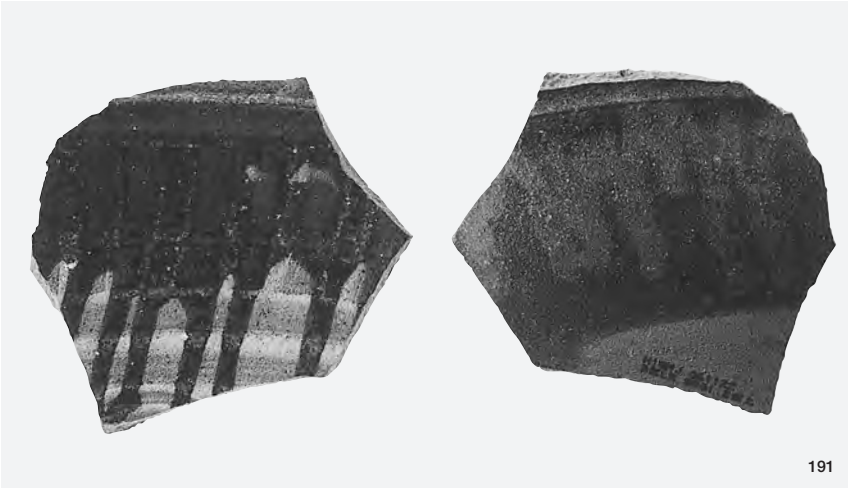
161～171　B区土器・陶磁器（SG01Ⅱ層）

図版28



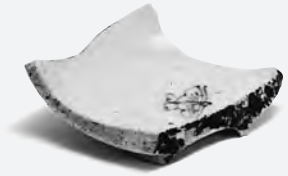
172～181　B区土器・陶磁器（SG01Ⅱ層）

図版29



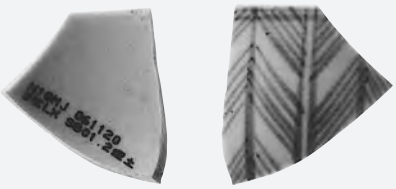
図版30　182～188　B区土器・陶磁器（SG01Ⅱ層）、189～191　B区土器・陶磁器（SG01Ⅲ層）

192



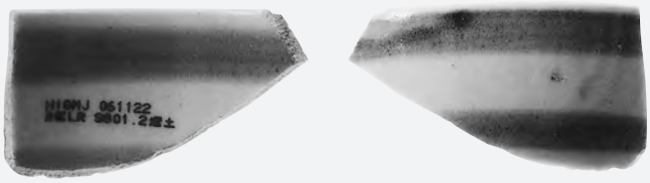
193

194A



195

194B



196

199A

197

199B

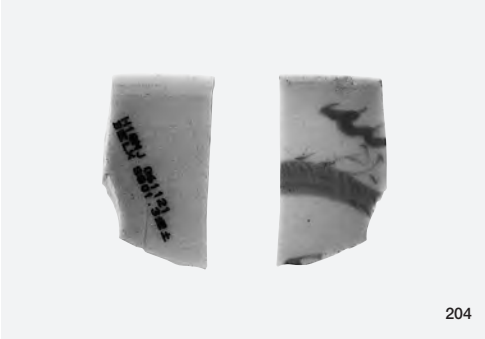
198

192～198　B区土器・陶磁器（SG01Ⅲ層）

図版31

200A

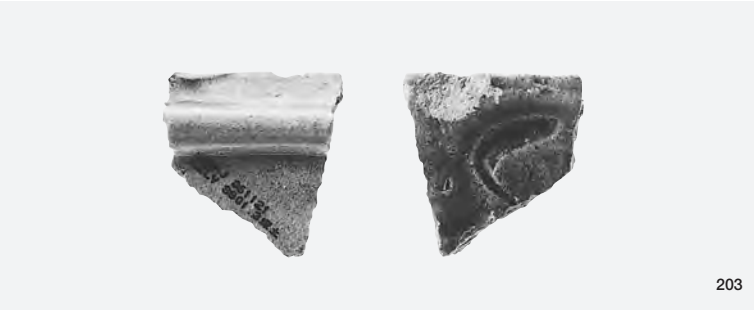
200B

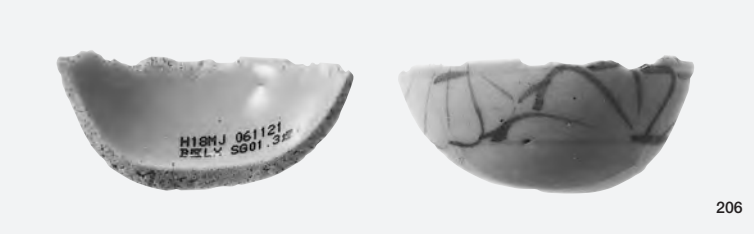

204

205

201

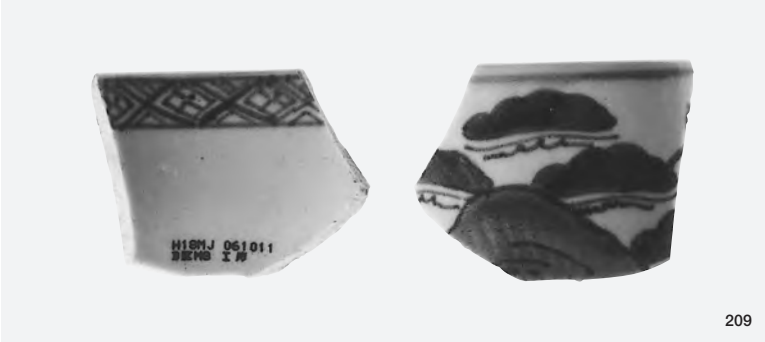
202


203


206

207

208


209

210

図版32　200・201　B区土器・陶磁器（SG01Ⅲ層）、202～206　B区土器・陶磁器（SG01Ⅳ層）
207・208　B区土器・陶磁器（SG01Ⅴ層）、209・210　B区土器・陶磁器（第Ⅰ層）

211

213

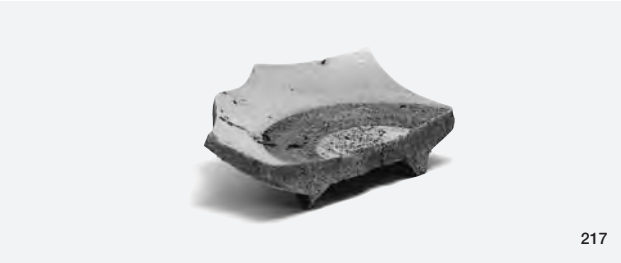
212A

214

212B

215

216

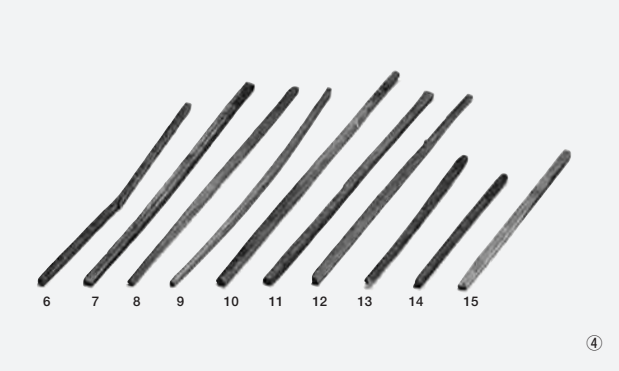

217

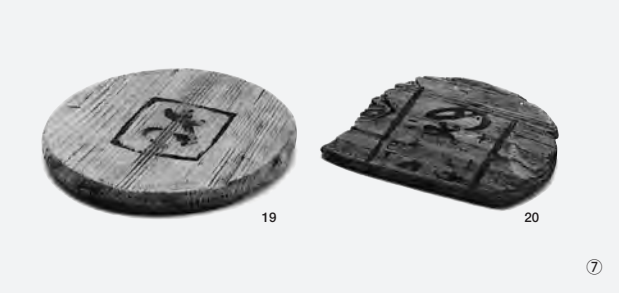
218

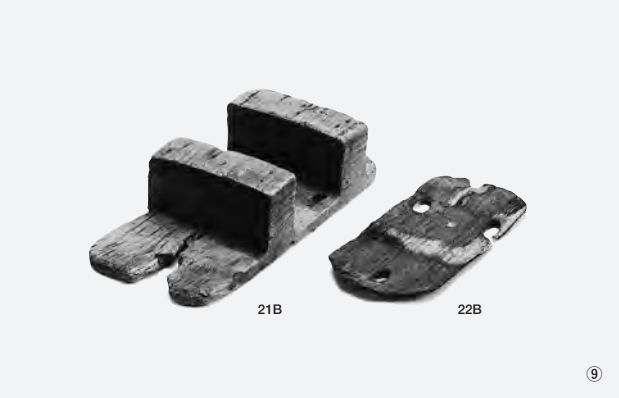
219

211～213　B区土器・陶磁器（第Ⅰ層）、214～219　B区土器・陶磁器（遺構外）

図版33

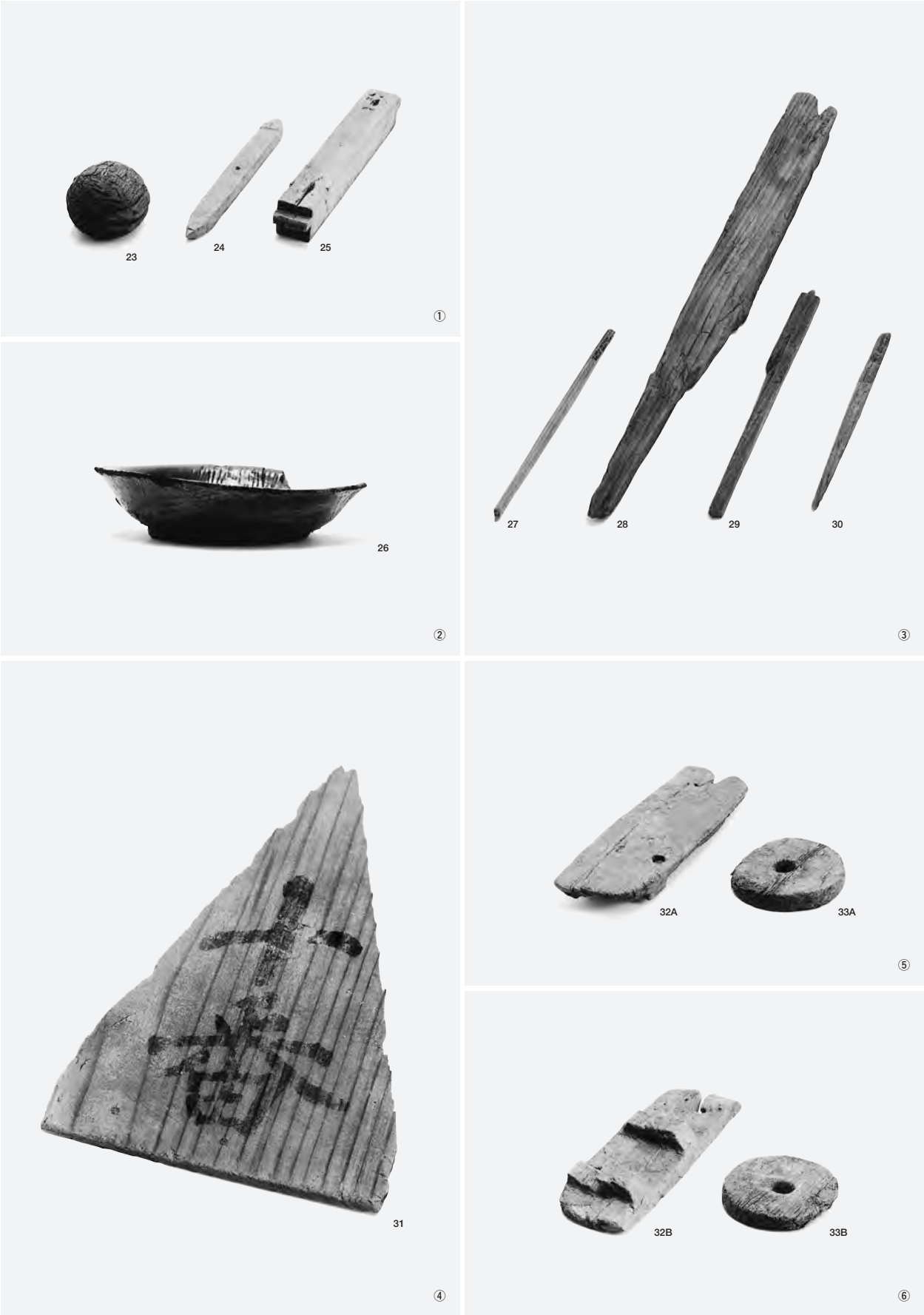






①・②　B区木製品（SG01Ⅰ層）、③～⑨　B区木製品（SG01Ⅱ層）

図版34



図版35　①　B区木製品（SG01Ⅱ層）、②～④　B区木製品（SG01Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層）
⑤・⑥　B区木製品（遺構内）

①～③　B区土製品、④　B区金属製品、⑤　B区銭貨
⑥　B区石製品、⑦　B区骨製品、⑧　B区動物遺存体

図版36

報　告　書　抄　録

ふりがな	みなとじょうあと
書名	湊　城　跡
副書名	秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成18年度調査区）
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西谷隆、伊藤才城
編集機関	秋田市教育委員会
所在地	〒010-0951 秋田県秋田市山王二丁目１番53号山王21ビル内　TEL 018-866-2246　FAX 018-866-2252
発行年月日	2008年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
湊城跡（みなとじょうあと）	秋田市土崎港（あきたしつちざきみなと）中央三・五・六丁目地内	05201	165	39° 45′ 26″	140° 4′ 16″	20060801～ 20061130	330	道路拡幅事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
湊城跡	城郭 その他	中世 近世	堀跡 溝跡　32条 土坑　36基 ピット　19基	土器・陶器・磁器 木製品・土製品 金属製品・銭貨 石製品・瓦・骨製品	慶長４年～６年（1599～1601）の大改修前後の中世湊城に伴う遺構・遺物が検出された。 また、17世紀～19世紀中葉までの江戸時代の近世土崎湊に伴う遺構・遺物が検出された。

要約	湊城跡は、JR土崎駅の西方約200ｍにある土崎神明社及び土崎街区公園を中心とした地域で、現在は市街地となっている。 中世には、安東氏の居城である湊城が所在した場所であり、今回の調査で堀跡が確認された。

秋田市
湊　城　跡
－秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成18年度調査区）－

印刷・発行　平成20年３月
編集・発行　秋田市教育委員会
〒010-0951
秋田市山王二丁目１番53号　山王21ビル内
TEL 018-866-2246 FAX 018-866-2252
印　　刷　有限会社 タイヨー商会